

2023年度

The

2023

Journal

# 大学造形美術教育研究

## 第22号

〈会長挨拶〉 大成哲雄（聖徳大学）「大学造形美術教育研究」の発刊に寄せて ……P.1

〈指名レポート〉 浅野卓司（桜花学園大学） 松岡宏明（大阪総合保育大学） 森田ゆかり（金城大学短期大学部） 伊藤美輝（元・山梨学院短期大学） 山崎正明（北翔大学） 全美協造形教育フォーラム 2022 報告「造形ウェルビーイングミーティングを通して養成校としてできること — 令和4年度 造形美術教育フォーラムより —」 ……P.2

### 【研究ノート・実践報告】

木下 藍（常葉大学短期大学部） 保育者養成校における保育環境を考える—木工表現の実践— ……P.14

葛西克行（柴田学園大学） 地域に根差した造形活動の素材開発 ……P.18

櫻井 剛（新島学園短期大学） 自然物を栽培・採集・活用できる保育者の養成—菜園の取り組み— ……P.22

佐藤牧子（目白大学） ミクロに・マクロに素材と関わる ……P.26

千凡晋（仙台白百合女子大学） 手作り人形劇を通じた保育実践力の育成と地域貢献活動としての可能性 ……P.30

中島 法晃（東海学院大学） パブリックアート制作が育む自己と他者のコミュニケーション ……p.34

仁木裕美（大阪人間科学大学） 釘を打つ行為にみる精神性についての一考察 ……p.38

福岡龍太（新潟青陵大学短期大学部） 大規模な表現活動でしか得られないこと—「子どもと舞台芸術大博覧会 2023 イン新潟」に参加した学生を見て— ……p.42

森高光広（東京未来大学） 「年長児向け造形活動の試み」～造形教室の実践から ……p.46

森高光広（東京未来大学） 「幼・保教育現場でも活用できる紙粘土題材の試行」 ……p.50

山本将之（大阪大谷大学） 新しい風船のあそび方「風船ドンダリ」の提案と実践 ……p.54

渡辺一洋（育英大学） 透明ファイルと光を用いた影絵表現 ……p.58

ダンボールで自分のお部屋をデザインする地域の親子アトリエ ……p.60

渡部 晃子（帝京科学大学） イメージを育むごっこ遊びの可能性 ……p.62

### 【賛助会員レポート】

佐藤牧子・野中梨帆（目白大学）/ 服部千明・宮崎恵（大和屋株式会社） 「端材×造形」- 木材の魅力、端材の魅力を探求する ……p.66

### 【産学連携レポート】

鳥越亜矢（中国短期大学） 「樂がき」で海の生き物と遊ぶ—キットパス in 水族館— ……p.74

【全国大学造形美術教育教員養成協議会規約】 ……p.84

【全国大学造形美術教育教員養成協議会 賛助会員内規】 ……p.85

### 【エッセイ】

三澤一実（武蔵野美術大学） 美術の知識とは ……p.88

Vol. 22

## 「大学造形美術教育研究」第22号の刊行に寄せて

全国大学造形美術教育教員養成協議会

会長 聖徳大学 大成哲雄

ここに第22号となる全美協(全国大学造形美術教育教員養成協議会)の研究誌をお届けします。全美協は、大学・短期大学で造形美術を教授する教員及び造形に関わる企業(賛助会員)によって構成される組織です。この研究誌は加盟大学・加盟資格大学及び賛助会員に配布いたします。

研究誌は、本協議会の会則2条(目的)に示す「本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。」ことの具体的な取組みとして20年以上の実績があるものです。第1号から第20号までの研究誌は、国立国会図書館にも納本されています。国立教育政策研究所より、本誌の実践について問い合わせがあったものもあります。この研究誌の特筆すべき点は、多くの学会誌にみられる研究論文という位置づけでは無く、造形活動の探究的な実践報告が多いところです。ワークショップや大学での日常的な授業など、多様な取組みにあふれています。まさに美術造形教育の今を垣間見ることができます。

新型コロナウイルスの国内感染拡大から4年が経ち、ようやく出口を出たような感があります。コロナ禍を経て、私たちの生活にも変化が生じました。最も大きな変化はAI化・DX(デジタル・トランスフォーメーション)が一気に進んだことではないでしょうか。AIといかに付き合っていくか、造形美術教育に関わる者として避けて通れない課題が加わりました。造形・美術という活動は、見たり、感じる活動や描いたり、作ったりする表現を通して、自分自身の表現の在り方や他者との関わりにおいて、色や形という造形的な視点から共感性や生み出される価値観を大切にしています。そして、身体性や体験の重要性が学びのキーワードとしてあげられます。これらはどのような時代になっても変わらない本質的な事柄だと思います。

本研究誌は、こうした造形・美術の活動を通して実践者が様々な角度から考察しています。どの内容も試行錯誤をしながら研究に取り組む姿が記録されています。それぞれの実践報告に触れることで、こういうやり方や考え方があるのかという、しなやかな捉え方に繋がることや、実践の深化やコミュニティの広がりとなっていくことの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本研究誌の発刊にあたり、執筆いただいた皆様と編集作業を引き受けていただきました三澤一実先生はじめ、多くの方々にお力添えをいただきました。厚く御礼申し上げます。



# 全美協造形教育フォーラム 2022 報告

聖徳大学 大成哲雄、目白大学 佐藤牧子、中国短期大学 鳥越亜矢

## 造形ウェルビーイングミーティングを通して 養成校としてできること

— 令和4年度 造形美術教育フォーラムより —

What we can do as a Universities and junior colleges that foster childcare workers and kindergarten teachers through “Art Education Wellbeing Meeting”?  
Based on 2022 fomative Arts educational forum

浅野卓司\*1、松岡宏明\*2、森田ゆかり\*3、伊藤美輝\*4、山崎正明\*5

### 1.はじめに

造形ウェルビーイングミーティングは、本協議会が刊行しているメルマガ第52号「幼稚園の先生になる人をどう育てるか」(山崎正明氏 原文は全美協 HP に掲載)の投稿が発端となっ  
て行われた、造形美術のオンライン会議(全6回開催)です。これらの取り組みを総括する形で2023年2月19日に「造形美術教育フォーラム」が開催されました。山崎氏のメルマガ記事には、幼児教育の現場を踏まえたとき、教諭を育成する養成校として何をすべきかということについて一つの提案がなされています(図1;全美協 HP に掲載)。

令和4年度造形美術教育フォーラムは、山崎氏が指摘するこうした教育保育現場の造形活動の現

状を引き起こす要因を、乳幼児期の育ちを踏まえた造形活動として捉え直すことが全美協メーリング

\*1 桜花学園大学 \*2 大阪総合保育大学・大学院 \*3 金城大学短期大学部 \*4 元・山梨学院短期大学 \*5 北翔大学



図1 全美協メルマガ52号

リストでも話題となり、美術教育関係者や養成校での指導の在り方を見直すという2つの側面から考えることを目的として開催されました。フォーラムでは、乳幼児期の造形活動の特質や養成校の教育、造形行為の始まりとしての乳児の造形活動について、3名のパネリスト（松岡宏明氏、森田ゆかり氏、伊藤美輝氏）から報告を受け、全美協としてどのようなアクションを起こすのかという点から立ち上がったBlog「そうだったのか！こどもの造形表現」について山崎氏から紹介されました。以下にフォーラムの次第に沿って紹介します。（浅野卓司）

## 2. 造形をめぐる用語整理

「造形」という言葉は、一般的な大人にとってアートや美術とのつながりが希薄です。Modeling、立体的なもののみが造形だと思われている傾向にあります。乳幼児が、形・色・材料と関わることで自体を通して世界を拡大させていくという意味で考えると、「図画工作」や「美術」という言葉より「造形」の方が適切だと言えます。「自然の造形」などという言い方もあり、概念が広いわけです。

さて、造形をめぐる用語を整理する意義は二つあります。一つは、「子供にとって、バランスの取れた活動内容を提供するため」です。もう一つは、「指導者にとって、互いの議論がかみ合う土壌をつくるため」です。

（図2）「図画工作科の内容構成」をご覧ください。「造形遊び」と「絵や立体、工作」の間には少し大きな隙間があります。また、「絵や立体」と「工作」の間には小さな隙間があります。さらに「絵」と「立体」の間には隙間はありません。「造形遊び」と「絵や立体、工作」は大きく違い、「絵や立体」と「工作」も違います。さらに「絵」と「立体」は二次元か三次元かという違いはあるものの、性質は一体化しています。

「造形遊び」と「絵や立体、工作」の違いを見ていきます。「造形遊び」は、「材料、場所」や「技法、行為」からスタートし、はじめから作品にすることを必ずしも目的とせず、作品になるとは限りません。そこにあるのはプロセスや行為だけということがあります。ですから、形成的評価活動がたいへん重要となります。一方の「絵や立体、工作」は、およそ「イメージ、目的」からスタートし、基本的には作品が

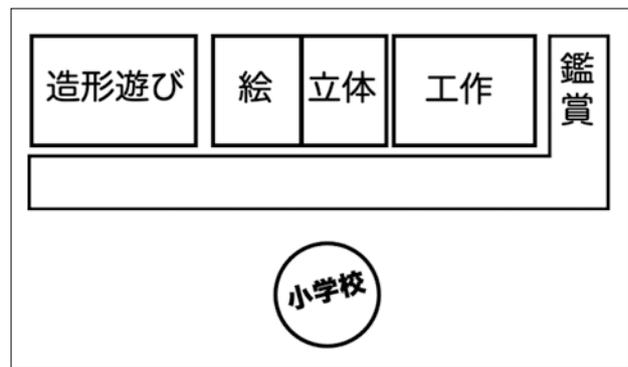


図2 図画工作科の内容構成

仕上がります。

次に、「絵や立体」と「工作」について見ていきます。「絵や立体」は心象表現であり、発想やイメージ、思いを表す活動です。できあがったものは「見るだけ」ということになります。もちろん、見ることを低位に考えているわけではありません。一方、「工作」は適用表現であり、「使ったり、遊んだり、動かしたり、伝えたりするための合目的・機能的なものをつくる」活動です。つまり完成した後に何らかの役割用途があるわけです。

図画工作では学習指導要領で内容が区分されていますが、保育所保育指針等には何も書かれておらず、保育学生や保育者が造形の分類を理解するのが困難です。それも、園によって造形の活動の呼び方はバラバラです。単に「造形」と呼んだり、すべてを「造形活動」や「造形表現」、「造形表現活動」と呼んだりする園もあります。また、すべてを「造形遊び」と呼ぶ園もあります。これでは小学校の「造形遊び」の捉え方と齟齬をきたします。さらにすべてを「製作」、「製作活動」と呼ぶ園さえあります。幼稚園教育要領では、かつて「絵画製作」という保育内容がありましたが、その名残です。「絵画製作」というのは、「絵画の製作」ではなく、「絵画と製作」、つまり「絵（図画）と工作」です（絵画の「せいさく」の場合は、「絵画制作」と書きます）。中には「製作遊び」という造語を使っておられる園まであります。合目的な「工作」を「遊び」とくっつけて「製作遊び」と呼ぶことは、さらに混乱を助長します。

（図3）「園における造形活動の範囲」をご覧ください。まずは「自由活動」があります。自由な時間に造形に関わる活動を子供がおこなっているものです。もう一つは、先生が意図してすべての子供たちを対象に、その経験をさせたい「設定活動」です。

形態としては、必ずしもすべての子供たちに一斉におこなうわけではありません。

設定活動のなかに「造形遊び」と「造形表現」があります。「造形遊び」は小学校の「造形遊び」と同じ、「造形表現」は小学校の「絵や立体、工作」に対応すると考えると整理できます。

小学校の「造形遊び」は、教科のなかに位置づく、いわば設定活動です。子供たちが休み時間に自分のお絵描き帳に絵を描いている時間を「造形遊び」とは呼びません。

「造形遊び」は、一般的には「色・形・材料や場所と直接関わり、働きかけていく過程を大切にしたい造形活動のことであり、遊びとしての性格（遊び性）をもつもの」と定義されます。換言すると、「必ずしも作品にすることを目的としない、色や形と格闘することそのものを大切にしたい遊び」です。昭和52年に（当時はまた「造形的な遊び」）学習指導要領に登場しました。「造形遊び」は、言葉としては十分に定着しています。ですので、この定義を、保幼こども園でも使っていくのが現実的です。保育指針等には「造形遊び」という言葉は一切出てきませんので、理解しにくいのは当然です。

「造形表現」は、「心象表現」（小学校で言う「絵や立体」）と、「適用表現」（小学校で言う「工作」）に区別できます。「造形表現」は「見るだけ」の「心象表現」と、つくった後で使ったり、遊んだり、動かしたりする「適用表現」に分かれるということです。さらに「心象表現」には「観察から」、「（生活）経験から」、「お話・空想から」等といったさまざまな起点があります。「観察から」と言っても幼児の場合は、五感による観察です。「適用表現」には「用途を考えた」表現と「機能性を考えた」表現が想定されます。

もちろん、このような分類は、幼児の側にはありません。ただ、先生がこの区分を認識していないと、同じようなプロセスや内容ばかり提供して、活動が偏ったりする可能性があります。

造形活動は、A 目的、B 材料、C 行為の三つの要素で構成されます。A は「何を描くのか、つくるのか」、B は「何をを使って描くのか、つくるのか」、C は「どんなふうにつくるのか、つくるのか」です。「これを描こう、つくろう」と考えて、材料を選び、行為に移る（A → B → C）こともありますし、何かの

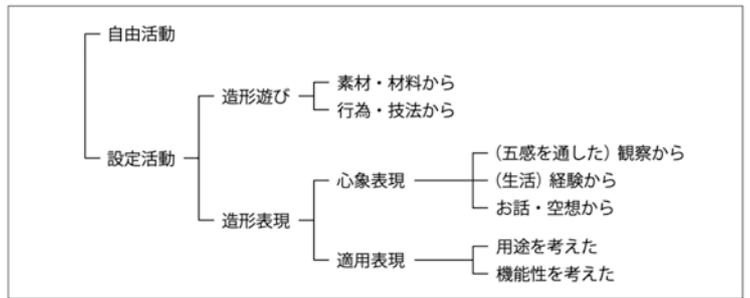


図3 園における造形活動の範囲

材料に見ているうちに「いいこと、考えた」と言って行為に移したり（B → A → C）、何か切ったり、つないだり、破ったりしているうちにはたと思いついて、そこに材料を足していく（C → A → B）など、いろいろなパターンがあります（図4 いろいろな造形過程）。小さな子供たちは、途中で「いいこと考えた」とよく言いますし、目的が後で生まれることはざらにあります。A からスタートする活動を「造形表現」・「絵や立体、工作」、B や C からスタートする活動を「造形遊び」と考えると理解しやすくなります。

B や C からスタートすると、材料が自分を開いていってくれたり、行為が自分を広げたりしてくれるので、新しい自分との出会いがどんどん起こります。小さな子供たちは、自分の外側にあるものを通して自分を拡大させます。いつも目的をもったスタートでは、頭のなかにあるいつもの自分にしか出会えません。ですから、先生はいろいろな造形過程を知っておくべきなのです。その上で「造形遊び」を、設定活動として意図的・計画的にすべての子供たちに展開していく必要があります。

「表現」の話に移ります。小さな子供たちは心身ともに未分化ゆえ、表現のかたちも未分化です。「劇（ごっこ）」、「音楽（音）」、「身体」、「造形（色・形・材料）」、「言葉」等、表現の媒体はさまざまあるわ

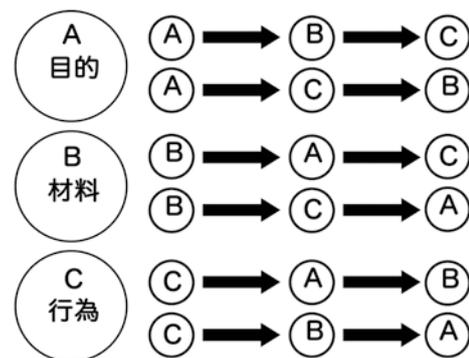


図4 いろいろな造形過程

けですが、子供のなかでは一体化しています。ですが先生は、それらをしっかり分化させて一つ一つを学ぶ必要があります。それでこそ、それらを統合させ、未分化な子供たちの未分化な表現を引き出せるわけです。

平成になって領域「表現」が誕生しました。「絵画製作」と「音楽リズム」が統合されて「表現」になったのではありません（幼稚園教育要領）。未分化な子供たちに対応させるべく、あらゆる表現媒体を含めた「表現」として新たに立ち上がったのです。35年ほど経ちましたが、表現媒体一つ一つについての研究や研修が浅くなり、保育者が未分化状態になってしまったという皮肉な結果となりました。さらに保育者養成校でも、造形に関する学びの時間は削減され、「領域に関する専門的事項（幼児と表現）」と「保育内容の指導法（表現領域指導法）」を履修すればいいことになっています。しかもこれは「幼児と表現」であって「幼児と造形」ではありません。

以上、造形をめぐる用語について、図画工作科とのつながりを意識しながら整理しました。まずは、これらの共通理解や議論からはじめる必要があると考えます。（松岡宏明）

### 3. 「0・1・2 ART — 金城大学短期大学部幼児教育学科×認定 NPO 法人おやこの広場あさがお —

筆者は2年生の実践では、特に0、1、2歳児との関わりを大切にしている。「造形遊び」は、知らない「もの」や「こと」に興味を示し、五感・手・身体を使って、それがどんなものなのかを確かめ知ろうとすることから始まる。学生たちは、0、1、2歳児とのART体験を通して「表現」の原点を実感する。

「そんなに小さな子どもが何かを描くの？」と感じるかもしれない。大人は、これまでの経験により「ART＝作品を作ること」と狭くとらえがちである。保育者からも、「0、1、2歳児の造形って何を作ればいいの？」という質問をよく受ける。作品にするために保育者が時間をかけて下拵えをし、子どもは少しだけ線を描く、シールを貼る、手形を押すなどという話も聞く。

作品を作らせなければと構える必要はない。「造形」は形あるものを作ることだけではなく、形や色、

素材と「かかわっていくことそのもの」も含み、そのことに大きな意味がある。作品になる場合もあるが、ならなくてもよい。

保育・幼児教育が大切にしていることは見えにくい。『0・1・2 ART』プロジェクト1)は、筆者が2022年、造形ウェルビーイングミーティングに毎回オンラインで参加する中で、必要に駆られ、当初の計画より迅速に、並行して進めていったプロジェクトである。乳幼児のTART・あそびUの魅力と意味、TART・あそびUを「見る」こと・「探る」ことの面白さを、子どもを取り巻くより多くの大人に伝えたいと願い、2022年10月から展開している。

造形美術教育フォーラムでは、プロジェクトの一環として制作した「ポスターパネル」「冊子」に使用した写真とテキスト、紹介動画を活用しながら、子どもの姿を多数紹介した。子どもの行為や表情が多くのことを語る。本稿ではその一部を取り上げる。

（図5）は、0歳5か月の子どもの「探索活動」である。絵の具を染み込ませた雑巾に興味を示す。「なんだろう？」と自ら手を伸ばし触る。「冷たくて気持ちいい」と感じながら指を動かしているのかもしれない。絵具のついた手で今度は画用紙に触り、画用紙の存在・材質・感触を確かめる行為の結果が作品になる。この後、画用紙を口に入れて確かめていた。このように、子どもは全身の感覚を使い、「もの」を自分の中に感じて取り込み、そしてまた「もの」に関わろうとする行為を繰り返し試みていく。（万一口に入っても差し支えない絵の具を使っている。）

2022年度から、画用紙にペンなどで「描く」こと以前に、子どもたちが、ペンや絵の具に興味をもち、「自ら関わっていこう」とする思いや行為を大切にしたい。大人が必要以上に「余計なこと」をしなかったことによ

り、子どもたちは自然に、一人ひとりの遊び・表現を生みだし（図6）、結果的に、ペンのキャップの開け閉めなどの技能も獲得していった（図7）。



図5 探索する



図6 ペンと遊ぶ

大人は無意識のうちに子どもが使いやすいように箱の蓋を開け、「どの色にする?」…「〇〇色にする?」…と聞く。

ペンのキャップを開けてあげ、子どもの手に持たせ、「さあ、描いて!」という素振りを見せる。

(悪気がないことは分かっている。)

子どもの気持ちを想像してみよう!

小さな子どもにとっては、「初めての体験」「未知の世界」(図8)。

大人は、もしかすると、余計なことをしているのかもしれない。

子どもは、見て…、触って…、  
ゆっくり、ゆっくり「もの」と関わり、  
感じながら、確かめながら、知ろうとしていく。  
世界を広げていく。

その姿は科学者や哲学者のよう…。

それを見逃すなんて、勿体ない2)。

まだ握力の弱い小さな子どもでも、マーカーや絵の具で遊ぶことは案外容易である。手を動かすと白い紙の上に色や形が生まれる(図9)。生まれて初めてペンや筆を握った子どもの「嬉しい」「楽しい」という気持ちが伝わってくる。思い思いに手を動かして遊んだ痕跡が、今、この年齢の時にしかつくりえない「色」や「形」になってあらわれる(図10)。からだの発達や心の動きも見えてくる。

絵の具はとても不思議である。手を動かすと「色」や「形」が変わる。子どもたちの好奇心や探究心をひきだし、子どもは「やってみたくいこと」を試す(図11)。



図7 自分でしめたよ!



図9 じっと見る



図8 はじめて見るもの



図10 ペンで描く



図11 ぼとぼと…

まだ十分に言葉でコミュニケーションできない年齢でも、素材や行為を楽しむ姿や豊かな表情、片言の言葉から、発見や驚き、感動を読み取る

ことができる。その瞬間に寄り添い、大人が共感的に応答することにより、子どもはさらに楽しい気持ちになり、遊びを広げていく。

子どもは大人をよく見ている。手を動かしながら大人の反応を確認し、安心して遊び続けたり、手を止めてしまったりする。大人が何を期待しているかを探り、小さいながらも、大人に合わせようとするこもよくある。大人が「何かを描かせなければ」「みんなと同じことをさせなければ」「上手にさせなければ」というとらわれから解放されると、子どもも大人もゆったりした気持ちになる。

子どもは安心して自ら手を伸ばし、全身の感覚を総動員して世界を感じ、あらわしていく。生きることそのものがART。小さな子どもたちを見ていると、

そのことに気づかされる。作品づくりが目的ではないのに、生まれてきた作品はのびやかでとても魅力的である。(森田ゆかり)

#### 4.「造形活動における育ちと出会いについて」

行為の始まりである乳幼児の育ちや活動への理解を深める為に、この時期の造形行為(以下、造形活動)においてどのような育ちと出会いがあるか確認する必要がある。まず「育ち」に関しては、乳幼児の成長についての基本的な考え方を示した国のガイドラインとしての保育所保育指針及び幼稚園教育要領等に示された5領域「健康、人間関係、環境、言葉、表現」から、造形活動のプロセスにおける「育ち」と「出会い」について考察したい。

##### 4-1. 5領域の「ねらい」における「養う力」について

###### ○領域「健康」

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

###### ○領域「人間関係」

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

###### ○領域「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

###### ○領域「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

###### ○領域「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

表現活動＝領域「表現」ではなく、保育における表現活動は5領域の「ねらい」を総合的に含んでおり、各領域の「養う力」を育てる活動であることを確認する必要がある。

##### 4-2. 0歳児の3つの領域における表現行為

0歳児においては、3つの「ねらい」が示されている。

ア 健やかに伸び伸びと育つ

1歳児以降 領域「健康」へ

(ア) ねらい

A 伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする。

イ 身近な人と気持ちが通じ合う

1歳児以降・領域「人間関係」へ

(ア) ねらい

A 体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。

ウ 身近なものと関わり感性が育つ

1歳児以降・領域「環境」へ

身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。

(ア) ねらい

@ 身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。

A 見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。

B 身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。

この時期の特徴として「表出」が重要な表現行為で、それは環境への関わりとして行われる。ソフトな環境(人的)とハードな環境(物的)からの刺激と関わりとして身体の成長を促す動きとして現れる。これは「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」につながる重要な意味を持つものと考えられる。すなわち、環境からの刺激と関わりプロセスにおいて、乳幼児の心身の成長が促される。「表出」から「表現」に移行してもその構造は変わる事ない。1歳児以降の5領域における領域「言葉」領域「表現」の源は、3つの「ねらい」から続くものであることも理解する必要がある。また、保育・教育における造形活動は「造形教育の為の造形活動」ではなく「教育の方法としての造形活動」であることも重要な視点であり、常に論議する必要がある。4-3. 造形活動における「出会い」について

前項4-2において「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」と示したが、造形活動は環境との関

わりの中で展開される。では、そのプロセスで出会う物についてミニマムな視点で纏めると「環境と関わる人の行為の視点」と「環境に存在する物の視点」に分けて以下のエレメントとして示すことができる。

・造形活動エレメント1

「切る(ちぎる)、貼る(つなぐ)、塗る」行為の視点

・造形活動エレメント2

「素材(材料)、道具(工具)、原理(仕組み)」存在する物の視点

乳幼児の造形活動を支援する際に、様々な「表現技法」が存在するが、全てはこのミニマムなエレメントの組み合わせであると言える。

エレメント1の「行為」は、思いの表れとしての「関わり」(表現)であり、身心の成長を促す。0、1、2歳の頃は、このそれぞれの行為を楽しむ過程(プロセス)により自らの感覚とその「受け止め」、それから生まれる行為による「あらし」の体験が、こどもの身体の成長となり、保育者等の受容・共感が、自らの行為の肯定感となっていく。したがって、関わる方法としての「行為」を楽しむ「造形あそび」の重要性はここであると言える。

エレメント2における様々な物との関わりにより「素材の性質、特性との出会い」「道具の機能との出会い」「様々な仕組み(原理)との出会い」がある。「仕組みや原理」は素材や道具にも含まれるとともに、造形活動だけでなく、日常生活の中にある人工物や自然現象等への「不思議」「面白い」と感じる好奇心や探究心を刺激する場面にもあり、領域「環境」のねらいと繋がりそれが、領域「表現」における「感性」の育ちとなる。

乳幼児期における造形活動での「出会い」を5領域の視点で考えると、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」

領域「環境」が重要な存在であると言える。その関わり=出会いで培われたことが、領域「表現」のねらいにある「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ」「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」に繋がる。関わる行為は既に思いの現れであり出会いの方法である。それは、「心情・意欲・態度」の保育・幼児教育の

根幹を培うことになる。

造形活動における育ちと「出会い」について述べさせていただいたが、保育士・教員養成における課題として「学生の造形活動に対する認識を、保育所保育指針・幼稚園教育要領に基いた保育者としての認識に如何に転換するか!」が常にあることに触れさせていただく。

それは、養成校入学までの造形活動の経験の減少や、入試に関わる主要教科と周辺教科の区別(差別)の中で培われている造形に対する価値観を、乳幼児期の造形活動は、こどもに作品を作らせる活動ではなく、そのプロセスでの様々な出会いと発見を通して、こども自身が自らとのコミュニケーションを取り、身心の成長に関わる活動である事を、養成に関わる全ての方々が理解し、保育内容系教科間の連携が図られる事を願うところである。---

## 5. 「Web を中心とした発信の提案」

### 5-1. 提案の背景

2023年1月1日に配信された全美教メールマガジン第52号(筆者)では、「幼稚園の先生になる人をどう育てるか」というテーマのもと幼児教育現場の課題について問題提起をした。内容は主として幼児の「表現」をめぐるものである。これに対し、全美協のメーリングリストで反響があり、それを受けて浅野卓司会長(当時)の提案によりウェルビーイング会議が重ねられ、造形美術教育フォーラムを「そもそも、こどもの表現ってなに? ~よりよい教員養成を目指して~」というテーマで開催することとなった。造形美術教育フォーラムにおいての山崎のテーマは「Web を中心とした発信の提案」~乳幼児期の造形活動を通して育まれるものの意味や価値を伝える方法として Blog 活用の提案。プロトタイプ版の検討。ウェルビーイング会議を踏まえつつ、~とした。以下はフォーラムで提案した概要である。

### 5-2. なぜ Web 発信が必要なのか

#### (1) 幼児教育現場の表現領域における問題点

保育現場でよくある「今度の製作、何させよう?」となった場合、一般的には園でやってきたこと、先輩やってきたこと、それから本とか保育雑誌等を参考に具体的に立案する。しかし、その参考にしている内容に問題が多い。「美育文化ポケット」という素

晴らしい保育・教育誌もある)それは、先生の想定した子供らしい作品を上手に作らせることが目的になっているものである。これが、少なからずある。当然のことながら、幼稚園教育要領や保育所保育指針等における感性や表現に関する領域「表現」の目標、ねらいにも沿っていないことになる。また、幼稚園・保育園等で見受けられる「壁面装飾(「壁面飾り」)の問題もある。幼児不在で、先生が苦勞して装飾を作ることになっている園もある上、その教育的な意味においても問題が多い。

## (2) 問題が起こる背景

一つは発行されている本の内容の問題。書店に行くと作品の描かせ方、作らせ方を説明した内容の本が多数販売されている。もう一つは Web にある内容の問題。それは本と重なる。Web の方の問題は放置しておけば、今後さらに拡大していくと予測できる。

例えば、「3歳児・製作」で検索すると様々な例が出てくる。造形教育フォーラムで松岡宏明・森田ゆかり・伊藤美輝が発表した内容とは程遠い3歳児の作品が多数出てくる。動画では「描かせ方・作らせ方」が楽しくわかりやすく紹介されている。上手に作らせることが目的化されており、それを見て実際にやってみると、子供もその通り作るわけで、先生にとっては便利で有用なコンテンツとなる。料理の作り方が You Tube でわかりやく説明されているのと同様の感覚と言って良いだろう。こうして、子供に指示をして作品を上手に作らせることになってしまう。非常に残念なことではある。なお、ここで問題とした内容を養成校の中でも「保育内容 表現」の講義として行なっていることもある。これも大きな問題ではあるが、本提案では触れない。

さらにもう一つ、幼稚園・保育園等で見受けられる「壁面装飾(「壁面飾り」)という幼児教育界における独特の文化の存在である。(多くの園で取り組まれているわけではないが。地域差もある。)検索で「壁面飾り」と入れると多数の壁面が出てくる。ヤクオフでは壁面装飾が出品されている。これらが手作り品として売られているのはそのようなニーズがあるからである。先生方は、壁面装飾を作るために貴重な時間を費やすくらいなら、お金で解決するということである。しかもその壁面の飾りを教育的な視点で捉えると、子供のための「環境」としては、文

化的、芸術的な質という面で大きな課題が残る。

## (3) なぜ Web 発信なのか

多くの先生が日常的に簡単に利用するのがインターネット上のコンテンツである。特に YouTube では「描かせ方・作らせ方」に関するものが多い。楽しく、わかりやすく、親しみやすいことから、それを安易に保育に取り入れることも出てくるであろう。実際に大学の講義の学生が模擬保育の参考に行っていることもある。有用な内容も多い Web サイトの一つ「求人・転職の『保育士バンク!』」には、例えばそのコンテンツに「保育士お役立ちコラム> 日常保育 > 3歳児の製作遊び> 保育に役立つ春夏秋冬別のアイデアと指導案作成のコツ」というものがある(3)。ここでは、あるべき幼児の「表現」とは、程遠い、「描かせ方・作らせ方」が主となっている。

残念ながら web 上のコンテンツはこのようなものが主流となっている。だからこそ良質な内容のコンテンツが必要となってくる。それは、誰かに依頼するのではなく、これらの問題に気がついた教員養成課程を担う教員で行うことを提案する。まずは全美教の教員から。そして、Web 発信の根本となる考え方をこれまであげた問題点「作り方・描かせ方」に対して「乳幼児期の造形活動を通して育まれるものの意味や価値を伝える」内容とする。

## 5-3. Web 発信のプロトタイプ・ブログ「そうだったのか!こどもの造形表現」

今回のフォーラムに向けて図のような Web サイトを Blog という形でプロトタイプを提案する。

### (1) Blog という発信スタイル

Blog というスタイルを取ったのは無理なく複数の人数で更新可能(ID とパスワードさえあればすぐに更新可能)で専門的知識が不要のため。さらに SNS とは違って、記事のアーカイブ化という点で有利である。Blog ではあるが、検索・カテゴリー・タグなどを使えるので、コンテンツを活用してもらう上で非常に重要である。

### (2) 各記事・コンテンツの信頼性を高める

信頼できる記事の具体例として3つの記事を以下紹介する(図 12、13、14)。

クリックすれば動画「0・1・2 ART」(森田ゆかり)を見ることができる。このようなこどもの動画については、個人情報保護の観点から公開が難しい

貴重なものである。そして何より乳幼児にとってのARTの魅力と意味を考えさせてくれる優れた動画である。

また「記事について」ということで他者の評価を入れることで記事への信頼性も高めるようにした。例えば「記事・乳幼児のARTの魅力と意味(その2)」では、中国学園短期大学 鳥越亜矢が次のように評価文を書いている。「ART(あそび)の入り口に使われている写真を見ると、この子達には高い・低いとの区別と、色の区別がついていることがわかります。特に、「私もやってみたよ。自分なりのやり方で」の写真を見ると、同じ色のマーカーとキャップがペアになって置かれています。背の高いマーカーが先でそのすぐ後ろにその色のキャップがちょこんと置か

れています。私にはそれがまるで親子のように見えてきました。色と高さに子どもなりの意味付けがなされていることがうかがえる写真ですね。」(以上)というように一つの記事を巡って複数でつくっていくような形が良い。

(図13)の記事「子どもと造形 その意味と役割」のコンテンツは動画ではなく、音声である。移動中の車の中でも聞くことができる上、非常にわかりやすく、本質的なことが語られている。動画以外の音声ならではの良さがある。そして「子育て」という視点もweb発信では重視したい。保護者への啓発が非常に重要だと考えているからである。

(図14)の記事「子供の美術」で紹介されているのは松岡宏明によるYouTube「子供の美術」まつおかチャンネルである。

内外の美術教育の成果を踏まえたもので、学術的な内容であるが、それを具体的に、わかりやすく語りかけるようにして伝えている。このYouTubeをリンクし、コンテンツのように扱えることの意味は大きい。現在web上にあがっている幼児の表現に関するコンテンツに問題があることに気づかせてくれることになる。

以上3つの記事について説明したが、記事内容の充実は園内研修の講師依頼の動きや、教員養成における教育内容が充実につながっていくことも考えられる。

### (3) 活用されやすいようにする

活用されやすいようにするためBlogの機能を最大限に活用する。Blog内の記事を「検索」できることは、活用のしやすさにつながっている。他にカテゴリとタグの活用である。カテゴリはまずは「全美教」に関するものを作ったほか、地域「北海道・東北・関東・中部・関西・中国・四国地方・九州沖縄地方」を設定した。

これは全美教のメンバーが各園の保育の実践例などを紹介することを想定している。こうして園どうし、教員どうしの横のつながりも生み出しながら、地域の高まりも期待したい。横のつながりということ言えば、例えば、例えばカテゴ

**記事のタイトル**

**記名記事とし、記事内容の責任を明確にしながら、信頼性を高める。**

**金城短期大学のYouTubeコンテンツ(森田ゆかり)を紹介。**

**記事内容についての評価も掲載。ここでは、四條畷学園短期大学 保育学科香月欣浩が評価。**

**記事について後日、追記として補足なども可能。**

図12 記事「乳幼児のARTの魅力と意味」

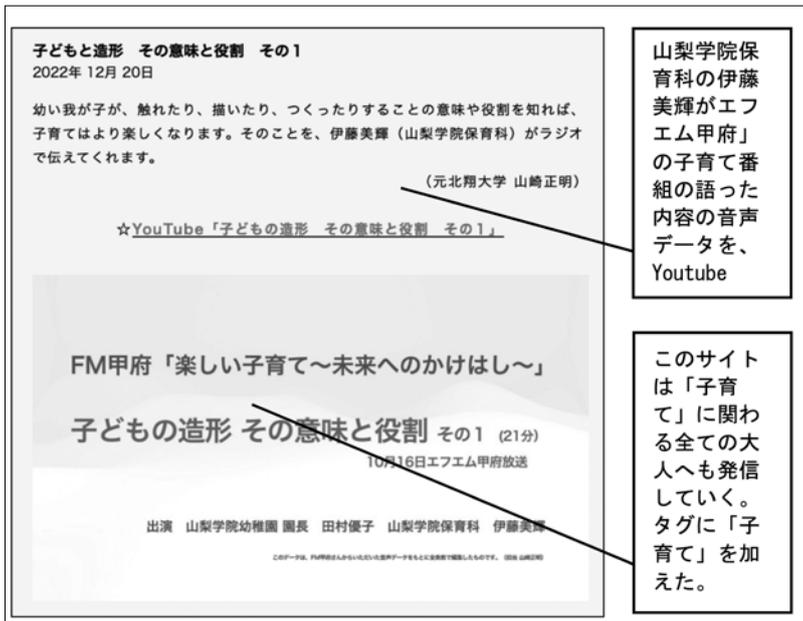


図13 記事「子どもと造形 その意味と役割」

り「関東」であれば「三松幼稚園」が出てくるが、そこには園長の言葉が掲載されている。この内容に共感した同じ地域の小学校の校長が実際に見学に行き、強い感銘を受けている。幼保小連携の参考になったとのことである。

また内容であるが身近な実践例の紹介も大切にしたい。例えば、カテゴリ「北海道」では、特別なことではなく、日常的な素朴なものを取り上げている。

カテゴリ同様、重要なのがタグである。タグは今後も増やせることができるが、まずは「0歳・1歳・

2歳・3歳・4歳・5歳・子育て・ドキュメンテーション」を設定した。どのタグも重要である。例えば「5歳児」。ネットで「5歳児・製作」で出てきたものとのこのBlogのタグ「5歳」で出てくるものが違う。実は、そのことが重要である。またタグ「ドキュメンテーション」も単なる流行ではなく、本質的な意味で非常に重要なものであることも示していきたい。

リンクは厳選した。その中で「全美教メールマガジン」をリンクしたことで、多くの人に読んでもらえるようにした。また、供の造形表現はどうあるべきかの大切な根拠となるものとして、幼稚園教育要領・保育所保育指針等へリンクしている。

以上がWeb発信のプロトタイプ「そうだったのか!こどもの造形表現」についての説明である。

#### 5-4. Web 発信のこれから

次にプロトタイプ「そうだったのか!こどもの造形表現」をどうしていくかについての今後の方向性を述べる(図15)。

今後、有志によって2024年にBlogを整理。2025年に専用のWebサイトを作るかどうかを検討。そして全美教が正式に組織として責任を持って発信することを期待したい。さらに他組織との共同できたらベストである。

このようにして、Webサイトでの発信をより強めていく。最終的には、例えば、産婦人科や小児科の待合室にwebサイトのQRコードを示したポスターなどを掲示する。待ち時間に親が、アクセスし、有益な情報を得る。それは子供の幸せにもつながる。Well-beingである。そのため、信頼性の高い内容の発信は絶対である。

さて、生成Aiが注目される中、2023年3月にChat GPT 4がリリースされた。Aiは急激なスピードで進化してきている。心配な内容もあるが、だからこそ私たち自身もWeb上にどんどん発信していく必要があるだろう。それは発信された内容

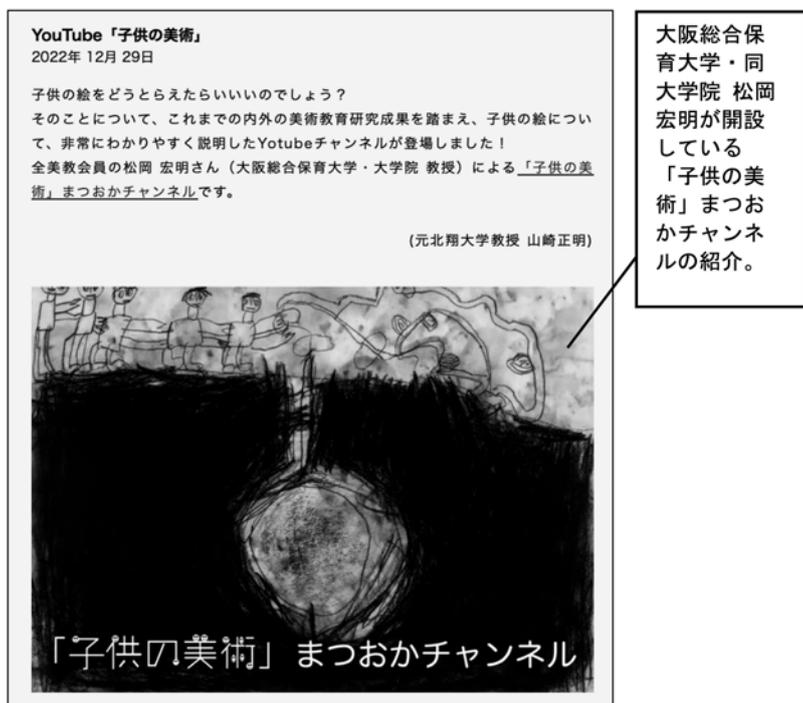


図14 「子供の美術」まっおかチャンネル



図 15 Blog 全体の説明

を生成 AI がデータとして使っていくからである。とにかく、現状の乳幼児の表現についてのネット上の情報は問題が多すぎる。そういう視点からも今回の「Web を中心とした発信の提案」で乳幼児期の造形活動を通して育まれるものの意味や価値を積極的に伝えることは一層大切になってくる。批判だけでは、解決ができない。そのための具体的な行動が必要である。それが Web を中心とした発信である。(山崎正明)

## 6. おわりに

造形美術教育フォーラムを通して見えてきたことは、子どもの造形実践の質保証は、価値づけする大人がこれをどのように解釈して、豊かな実践へ繋げていくかという点です。これを具現化することとして以下の2点を最後に示したいと思います。

### 6-1. 活動の主体として「子ども」の姿を捉え直す

造形行為のはじまりである乳幼児の育ちや遊びへの理解を進めることは、子どもが主体となる造形活動へと繋がっていきます。造形活動における「子ども主体」という言葉は、言い換えれば大人が子どもにそうあってほしいという過度な期待や、指導者の意図的な出来栄や見栄えといった現場の実態に対する反省から出て来ているようにも感じます。乳幼児の造形実践は、これまで行事と関連した活動として捉えている側面があります。ここには、合目的性という特徴があります。一方で、日常的な遊びから派生する活動には明確な目的が活動の始まりに存在するわけではありませ

ん。  
幼稚園教育の基本となっている「環境を通して行う教育」との関係で言えば、人格形成の基盤が育つ乳幼児期の「遊び」の意義、活動のプロセスを通して見えてくる「子どもの姿」から捉え直す必要があるのではないかと。造形ウェルビーイングミーティングの話題にもなっていました。生活を通して経験することは遊びを通した学びであり、内面で起きている変化に着目することは、乳幼児期の造形実践の意義や価値を再確認することです。

子どもの姿という点においては、美術科教育学会乳・幼児造形研究部会が作成した「乳・幼児の造形が気づかせてくれる10のこと」に示されている子どもの姿、幼稚園教育要領や保育所保育指針等の解説書に示される子どもの姿、保育内容を通して垣間見ることができる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」はどれも重なりあっています。保育の実践における造形的表現活動において、作品としての成果を重視する題材の選定やハウツー的な指導方法といった保育者のための造形ではなく、子どもにとって相応しい活動とは何かという視点から捉えることなくして、子どもが主体となる実践にはなり得ません。

## 6-2. 造形を通した養成校と現場の協働

養成校における教育課程は、2018年の教職再課程認定申請で大きな節目となりました。造形関連科目の教授内容は、音楽・造形・身体表現の統合的表現という観点から大きく変更した養成校もあるようです。このように科目あたりの時間数が減少したことで、養成段階において身につける知識・技能、その育成は十分となっているのでしょうか。

また、保育現場における子どもの造形表現は、子どもの心身の成長を促すような豊かな体験を保障するものになっているのでしょうか。保育の造形は独立した活動であったり領域ごとに区切られたものではなく「生活」「遊び」の一部であることはいうまでもありません。その中でも行事が集中する時期や作品展の開催に向けた造形表現は「やらなくてはならない」活動になりがちです。子どもが「やってみたい」「面白いからもっとやりたい」と思えることが、探究心を育てる保育に繋がると考えます。

子どもの造形について大人が語る時、「のびのびと」「感性豊かに」という語がよく用いられますが実際のところ、こうした言葉はそうであったら良いという保育の理想や子どもの純粋な感性を信じる大人にとって都合の良い言葉になっていないかということです。こどもが造形活動に没頭できるような環境や空間、繰り返し試すことができる機会、新たな気づきを共有して喜び合う豊かな人間関係といった深まりのある造形活動の諸要素を環境として作っていくために、養成校はどのような内容を学生に教授しながら、現場を支援していくのかということを経験

的に検討することが必要です。

造形ウェルビーイングミーティングをこうしたこと  
を検討する場として2024年度に再構築していこう  
と思います。概念ではなく直接的な体験を通した学  
びや共感、造形活動の特徴といえます。こうした  
ことを重ねることで「子どもにとっての造形表現」の  
本質に迫ることができるように感じます。(浅野卓司)

註

- 1) 金城大学短期大学部幼児教育学科・森田と、美術学科・大場新之助が2022年7月に開始した協働プロジェクト。
- 2) 森田ゆかり・大場新之助『0・1・2ART』金城大学短期学部 2022 p.3
- 3) 「保育士お役立ちコラム> 日常保育 > 3歳児の製作遊び> 保育に役立つ春夏秋冬別のアイデアと指導案作成のコツ」

[https://www.hoikushibank.com/column/post\\_1720](https://www.hoikushibank.com/column/post_1720) (情報取得日; 2023年12月28日)

参考文献

- ・松岡宏明『子供の世界 子供の造形』三元社、2017
- ・松岡宏明『子供に子供の美術を』三元社、2023/
- ・「保育所保育指針」(平成29年厚生労働省告示第117号)
- ・「幼稚園教育要領」(平成29年3月文部科学省)
- \*1 桜花学園大学 \*2 大阪総合保育大学・大学院 \*3 金城大学短期大学部 \*4 元・山梨学院短期大学 \*5 北翔大学



## 保育者養成校における保育環境を考える – 木工表現の実践 –

常葉大学短期大学部 木下藍

### 1. はじめに

本稿では、令和5年度に保育者養成校の2年次選択科目「図画工作Ⅱ」で行った「保育環境を構想する—木工による表現活動—」の内容について報告する。

授業では、保育者となった際に子どもと過ごしたい保育環境を構想すること、イメージを木工で表すための知識・技術を習得することを目的に、木工による保育室／園庭の模型制作を行った。

本報告では5回の授業の具体的な内容とともに、学生の振り返りの記述内容から個々の学びについて考察する。

### 2. 授業の概要

「図画工作Ⅱ」は2年次の選択科目である。1年次の必修科目である「図画工作Ⅰ」で学修した内容を深化させ、領域「表現」のねらい及び内容の理解を踏まえた具体的な保育を構想するために、幼児に身近な材料と方法を用いた「伝承あそび」「かく」「つくる」「造形あそび」の教材研究を主体的に行う。

本論文では15回ある授業の内、「保育環境を構想する—木工による表現活動—」の5回の内容について報告する。

また、授業の最後には、毎回振り返りを書く時間を設けている。学生の振り返りの内容も含め、各回での個々の学びについて考察する。なお、倫理

的配慮として、振り返りの記述内容や写真の掲載にあたっては学生の了承を得ている。また、写真や振り返りを掲載する際には個人が特定されないよう配慮している。

5回の授業及び授業外で行った大学祭での展示の内容は表1の通りである。

表1 5回の授業の流れ

1	保育環境の構想と工具の使用の確認
2	グループでの制作—思いを形にする木工—①
3	グループでの制作—思いを形にする木工—②
4	グループでの制作—思いを形にする木工—③キャプション作成
5	鑑賞—発表と共有—
	授業外活動：大学祭での展示

### 3-1. 保育環境の構想と工具の使用の確認

次に、各回の授業の具体的な内容について報告する。第1回目では5回の授業の流れと目的を説明し、「保育者になった際に子どもたちと過ごしたい保育室または園庭の環境」を構想した。

参考資料としてイタリア、レッチョエミアアの幼児学校の保育室<sup>1</sup>や、日本の保育室の環境について、具体的に写真等も掲載してある書物<sup>2</sup>を用いて紹介した。また、幼児の木工表現活動の紹介として、筆者の研究協力園でもあり実際に木工を行っている保育園の動画<sup>3</sup>も紹介し、学生のイメージを深めるための手助けとした。

保育環境の構想は3-5人程度のグループで行い、ワークシートに保育者の願い、具体的な環境図とその意図等を書いて計画した。

授業の後半にはのこぎり・金槌の使用を確認した。中学校での技術の授業で工具を使用した以来の学生が多かったため、基本的な使用方法、使

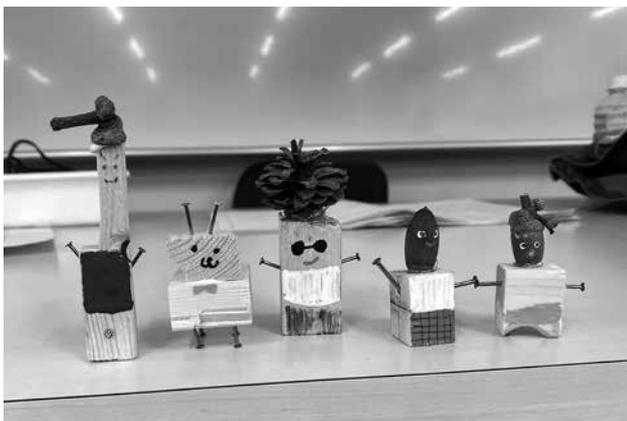


写真1 こびと制作

う際の環境、配慮等を、見本を示しながら説明した。その後、練習もかねて一人一つ木片でこびとを制作した(写真1)。こびとは、保育室/園庭を制作した際にそこで遊ぶ自分の分身として授業の最後にも活用した。

学生の振り返りからは「導線を意識して計画した」「実習で行った園を思い出しながらどんな保育室だと良いか考えた」「園にある園庭も様々な意図が考えられていると思う」等の記述が見られ、これまでの実習の経験を活かして構想している様子がうかがえた。

### 3-2. グループでの制作—思いを形にする木工—

2回目から4回目まではグループで計画した保育環境について実際に木材を使用して制作していった。使用した道具・素材は表2の通りである。ベニヤ板を保育室/園庭の床とし、2枚または4枚を合わせて使用した。筆者からは自然物を使った制作に親んでほしいというねらいから表2に記載のように自然物を多く準備したが、その他グループで必要と判断した素材については各自で準備するよう指導した。各グループが自分たちの構想する保育環境のねらいに沿って、築山を作るための紙粘土、砂場用の砂、模型用の人工芝パウダー等を準備し制作していた(写真2)。

表2 使用した道具と素材

道具	のこぎり・糸鋸 金槌・釘(25mm、32mm、38mm、45mm) クランプ・ヤスリ(荒・中・細) 木工用ボンド・グルーガン
素材	シナベニヤ 300×225×4mm 木の枝・まつぼっくり・どんぐり 布切れ・毛糸・針金



写真2 小石、芝生を用意して園庭を制作する

実際に木工制作を始めると、平面での計画や頭の中にあるイメージを、3次元に落とし込むために試行錯誤する姿が見られた。木工表現では特に、素材の性質を知った上で制作する必要がある。例えば釘打ちだけでも、薄い板に釘を打ち込もうとしても割れてしまったり、節のある部分では全く打ち込めなかったりという風に、実際に体験することで気がつくことが多いようであった。

あるグループでは保育室にロフトのようなものを作りたいと考え、初めはベニヤ板同士をボンドのみで接着しようとしていた。しかしながら、それでは当然強度が足りず倒れてしまう。そこでグループで案を出し合い、木材を添えて釘で打つことで安定するようにした。

このように失敗を重ね、どうすれば良いかアイデアを出し合い、試行錯誤しながら共同的に制作する姿が多く見られた。(写真3)

また他のグループでは、のこぎりで切る際に、直線に切ることに苦労している様子だった。しかし、回数を重ねる毎に道具の使い方に慣れ親しんでいき仕上げの段階では糸鋸をうまく使って円を切り抜くことまでできるようになった。

振り返りでも「道をどのように作るか、気をどこに配置するか、もしこの園庭で遊ぶ身になったらどこに何があるかをおいてみながら考えて、立体的にイメージすることが大切」「のこぎりや金槌は思ったよりも難しい。作ることは楽しいけど危険もある」といった記述が見られ、実際に素材に触れることで体験的に学ぶことが多かったことが推察される。

4回目の授業では、制作の仕上げとともにキャプションを作成した。キャプションは印刷して鑑賞会と、学園祭での展示の際に使用した。



写真3 2階建ての保育室を制作するため試行錯誤

### 3-3. 鑑賞—発表と共有—

5回目の授業では鑑賞会を行った。初めに各グループが制作した保育室／園庭に込めた保育者の願いや環境構成の工夫について発表する。その後は各自が自由に観る時間を取った。鑑賞の際、学生は初回の授業で作ったこびとを持ち歩き、それぞれの保育室／園庭で子どもたちだったらどう過ごすかを想像しながらこびとを配置し、写真撮影をした。

フィードバックはTeamsを用いて行った。各グループが保育室／園庭のテーマを投稿したものに、返信機能を用いて、こびとが遊んでいる写真と、鑑賞した感想を投稿した(写真4)。

学生の振り返りでは「友だちと協力しながら作り上げたので、できあがったときの達成感がとても大きかった。」「実際の自然の素材と粘土などの素材を



写真4 teams を活用したフィードバック

使ってどうやったらリアルになるかな?と試行錯誤した。」「水で遊べたり畑があったり子どもが考えて遊べる園庭がとてもよかった」「カラフルで遊びたくなるような遊具がたくさんあって楽しいと思いました!ステージからの景色もわくわくしました」等の記述があった。他の学生が制作した保育室/園庭に、こびとが遊びにいくというイメージを持って鑑賞することで新たな気付きもあったようだ。

### 3-4. 授業外活動:大学祭での展示

授業外では、11月に開催された大学祭において作品展示を行った。大学祭では子どもの遊び場等も設置されていたため親子連れの来場者も多く、展示物に興味を持って見る子どもの姿が見られた。

## 4. まとめ

本実践では、保育者となった際に子どもと過ごしたい保育環境を構想すること、イメージを木工で表すための知識・技術を習得することを目的に、木工による保育室/園庭の模型制作を行った。その結

果、それぞれの学生の保育観を反映した多様な保育室/園庭ができあがった(写真6-8)。

本学は短期大学部のため多くの学生が2年で卒業し、幼稚園、保育園、こども園といったところへ就職する。本実践のように園の環境全てを構想することは実際には難しいが、授業での経験を基に「どのような環境で子どもたちと過ごしたいか」という視点を持って保育を行うことに繋がると考える。

註

1 森田浩章、中谷里美、五島真希(2016)「光の中へ—レゾ・エミリア市の幼年学校の子もたちに魅せられて」

2 高山静子(2017)「学びを支える保育環境づくり:幼稚園・保育園・認定こども園の環境構成」

3 保育園のアトリエ「子どもと椅子」<https://youtu.be/79M5cI8tMh0?si=RIYZIW6xLRdfb-Q3> (参照2024年1月5日)

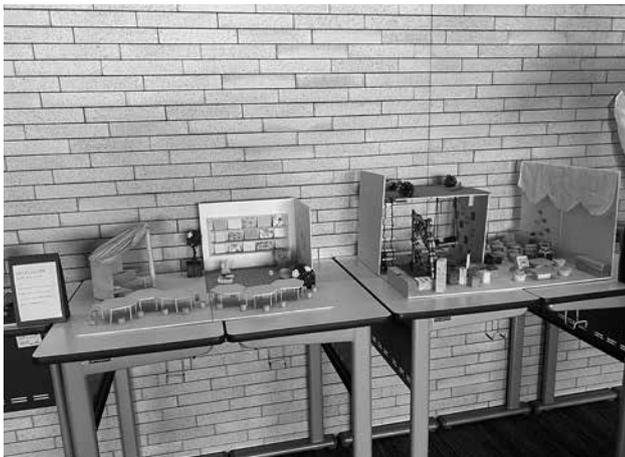


写真5 大学祭での展示の様子



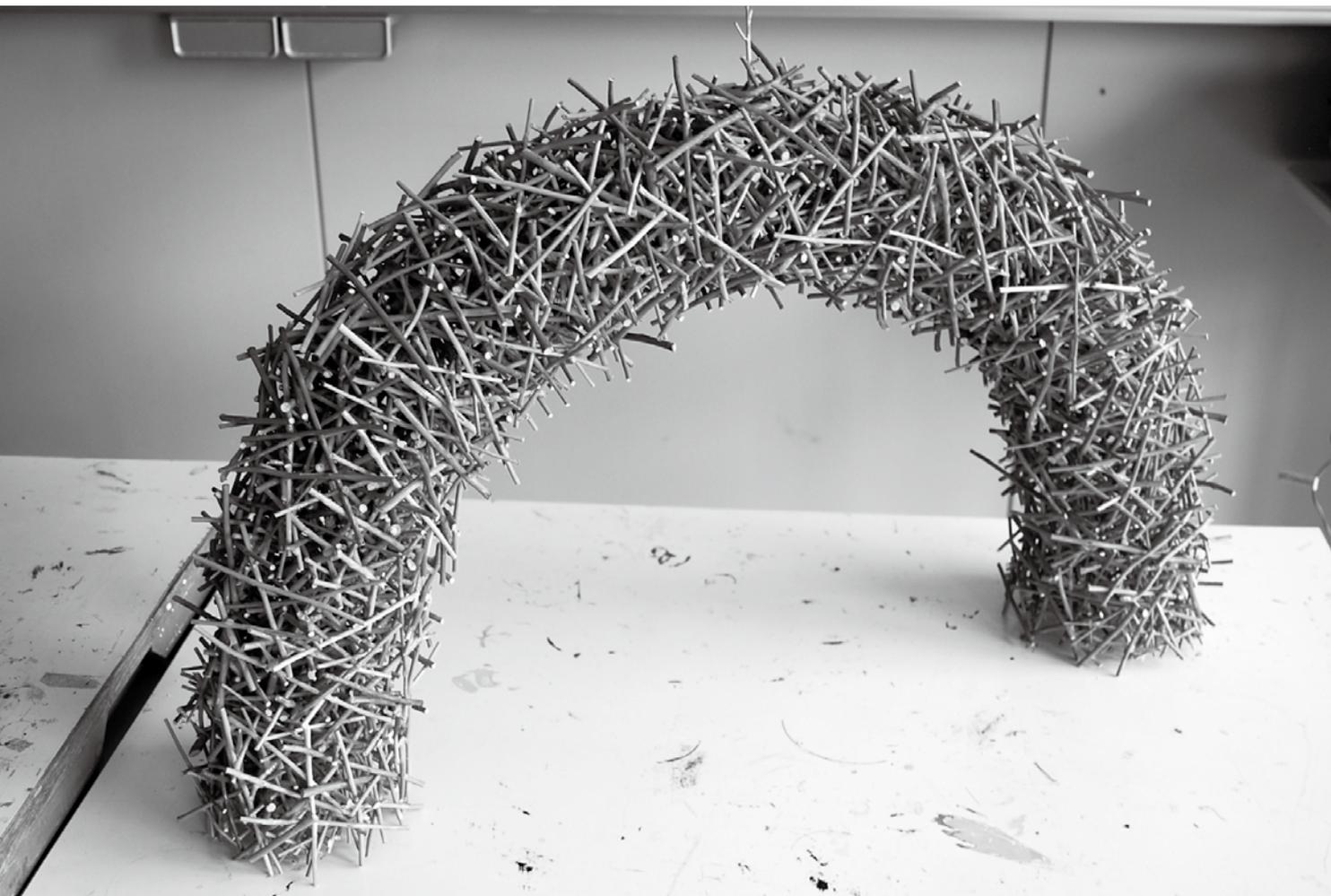
写真7 遊びが広がる保育室



写真6 六角形の可動式テーブル、円窓のある和室、大きな窓のあるランチルームのある保育室



写真8 身近に自然を感じられて、子どもたちがやってみたくて思い切り動かして遊べる園庭



## 地域に根差した造形活動の素材開発

柴田学園大学 葛西克行

### 1 はじめに

本学園は、青森県弘前市にある。弘前市は、桜とりんごが有名で、りんごは全国1位の生産を有する。市街地を外れると、郊外にはりんご園が広がっており、りんごは身近なものとしてある。

本稿では、この地元の特産であるりんごを利用した造形活動の素材開発の事例を紹介する。

### 2 経緯

これまで短期大学部の保育科で図画工作の演習を担当してきたが、本年度は、大学のこども発達学科で図画工作の演習を担当している。受講学生は50名から60名程度であるため、大量の造形活動

の素材が必要となる。また、演習の予算はほとんどなく、学生に金銭的な負担がかからないようにするためには、使用する素材は安価なものでなければならない。

これまでは、集積的な立体造形の演習に安価で大量に入手可能な素材として、主に綿棒やストローなどを使用してきたが、綿棒やストローのような人工的な素材ではなく、もっと自然の素材を取り入れた演習ができないものかと考え、身近にある特産のりんごに着目した。地域のりんご農園に協力をお願いしたところ、趣旨を理解してもらい、大量のりんごの枝を無償で提供していただいた。

これまで、提供していただいたりんごの枝を使っ

た立体造形の演習を2回行った。今年度も引き続きりんごの枝を素材とした立体造形の演習を予定している。

### 3 素材としてのりんごの枝

#### (1) りんごの枝の加工

##### ① 皮はぎ

りんご園では、毎年枝の剪定を、春先と初夏から秋にかけて2回行っている。

素材としてのりんごの枝は、皮がついたままだと、見た目も良くなく、また腐りやすいため、皮をはぎ取るようにしている。

春先の剪定で切り落とした枝の皮は、りんごの木がまだ水分を吸い上げていないため、髓とくっ付いてなかなかはぎ取ることができない。一方、初夏から秋にかけて行う剪定は、新梢の剪定である。この時期のりんごの木は、水分を吸い上げているため、新梢の皮と髓の間に水分があり、簡単に皮をはぎ取ることができる。そのため、素材として使用するのは、専ら新梢の枝である。ただし、新梢の枝でも剪定し

たらすぐに皮をはぎ取らないと、皮と髓がくっ付いてしまい、皮をなかなかはぎ取ることができなくなる。すぐに皮をはぎ取ることができない場合は、バケツに水を入れ、水分が蒸発しないようにす剪定した枝を浸しておく必要がある。

##### ② 乾燥

皮をはいだばかりの状態では、樹液や水分が髓に含まれているため、枝の接着に使う木工ボンドの効きが良くない。そのため、1か月程度の乾燥が必要である。乾燥が進むと、髓の色が薄緑色から薄茶色へと木材らしい色に変化する。

##### ③ 切断

制作するテーマに応じて、剪定鋏で切断し、長さを調整する。剪定鋏で切断するときは、切断した枝が弾け飛ぶことがあるので、けがをしないように床の近くで切断するとよい。剪定鋏で切断することが無理な太い枝は、鋸で切断する。

#### (2) 素材としてのりんごの枝の特質

##### ① 確保できる量と経費

りんごの新梢は、初夏から初秋まで、次々と芽を



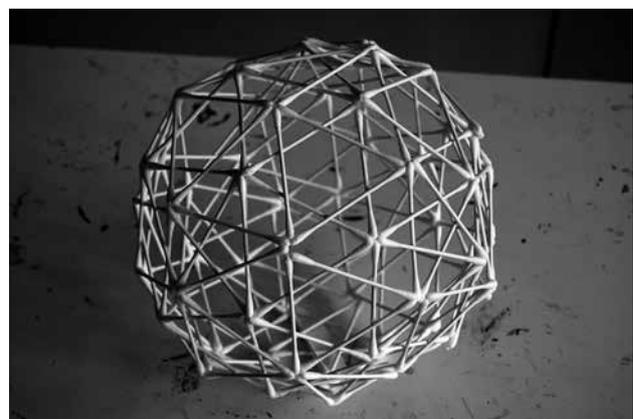
りんごの新梢



切断したりんごの枝



皮をむいて乾燥したりんごの枝



綿棒を使った「球体」の作品

出して伸びるため、ワンシーズンだけでもかなりの量を確保することができる。また、剪定した枝は、ほとんど処分してしまうため、りんご園の協力が得られれば無償で入手できる。

### ②形状の種類

枝の太さは、細いものから太いものまで、様々な太さのものを手に入れることができる。

また、課題のテーマによって、いろいろな長さの枝を用意することができる。「りんごの枝の加工」の箇所です説明したように、剪定鋏や鋸を使って、簡単にいろいろな長さに切りそろえることができる。

### ③制作方法とメリット

制作は、枝を1本1本、木工ボンドで接着して行う。そのため、完成の形をイメージしながら、少しずつ修正を加えて制作することができる。修正も容易にできる。

また、様々な枝の形から、作品のイメージをいろいろ膨らませて制作することもできる。さらに、作品の大きさも、工作台上載するような小さな作品から大きな作品まで制作することができる。

## 4 実践内容

### (1) 綿棒を使った造形活動

りんごの枝を使う以前は、安価で大量に手に入れることができる綿棒を素材として、立体造形の演習を行ってきた。

実際の演習では、課題のテーマを「直線でつくる曲線・曲面」とし、直線は平面、曲線は曲面という考えを相対化し、形を柔軟に捉えることを目的とした。

学生は、形がどれも均一な綿棒の取り扱いが、容易にできていたが、曲面を作るために、まっすぐな綿棒をどのように組み合わせるかに苦心していた。

### (2) りんごの枝を使った造形活動

りんごの枝を素材として使うようになったのは、地域のりんご農園から、りんごの枝を大量に無償で手に入れることができるようになったからであるが、それ以外にもりんごの枝には、綿棒に比べて木の温もりや微妙な歪みや変形など、自然の形のおもしろさがあったためである。そのため、無理やり作品の形に枝の形を適合させることは難しく、むしろ枝の形に作品の形を適合させる必要がある。枝を使った造形では、枝の形をコントロールするのではなく、

枝の自然な形を積極的に活用しなければならない。そのためには、素材をよく観察し、素材に寄り添うことが必要になる。

演習では、綿棒を使った時と同じテーマ「直線でつくる曲線・曲面」を取り上げた。綿棒とは違い、りんごの枝は1本1本違う形をしているため、最初の作品のイメージが、枝の形に応じて変わっていく様子が見られた。りんごの枝の取り扱いが難しいようだったが、完成した作品は、綿棒の作品とは違い、自然が持つ力強さが感じられる作品が多く見られた。

## 5 今後の課題

### (1) りんごの枝の確保

今後とも大量の枝を確保するためには、りんごの枝を剪定する人員が必要である。実際にりんご園へ行き、梯子に上って新梢を切る人員が確保できなければならない。

また、今回は地域のりんご農園の協力を得て、新梢を大量に無償で確保することができたが、今後も地域のりんご農園の協力を取り付けることが必要であり、地域との連携が大切になる。地域との連携は、地方の大学の独自性をアピールするためには、必要不可欠である。

### (2) りんごの枝の加工作業

りんごの枝の加工作業は、皮はぎと切断の2つである。特に皮はぎは、剪定後すぐにはぐのが最善であるが、それができない場合は、りんごの枝を水に浸しておいて、後で皮をはぐことも可能である。しかし、その間1日ごとに水を取り換えないと腐敗が進んでしまうため、長い間水に浸しておくことはできない。実際の演習では、受講学生も皮はぎの作業を行ったが、それだけだと必要な量を確保できないため、協力をいただいたりんご農園のスタッフにも手伝っていただいた。大量のりんごの枝の皮を乾かすうちにはぎ取るためには、りんごの枝の剪定人員の確保と同様、皮はぎをする人員の確保が必要となる。

### (3) 共同制作への導入

小学校学習指導要領図画工作科の「指導計画の作成」の中では、共同制作を取り上げることを示されている。本演習でも共同制作をテーマとした演習を行ってきた。平面での共同制作に比べて、立体造形の共同制作のテーマや素材は豊富とは言え

ない。りんごの枝を立体造形の素材に加えることができれば、共同制作のテーマや素材も広がる。

例えば、りんごの枝を素材としたこれまでの演習では、個別に工作台で作れる大きさの作品を制作してきたが、各自で制作した形を部分として、それらを組み合わせ、一つの大きな作品にすることができれば、共同制作にりんごの枝を素材として使うことができる。

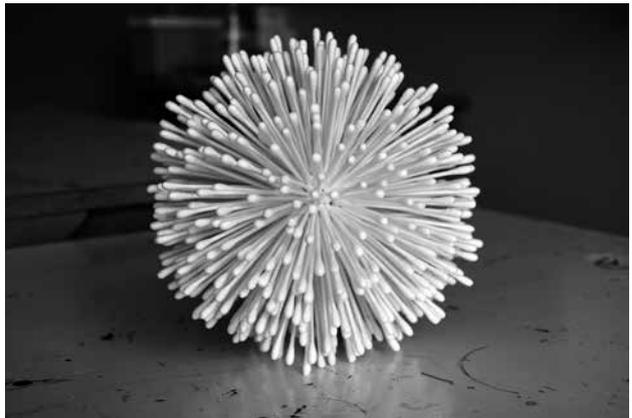
今後は、実際の演習の中で、りんごの枝を素材とした共同制作の演習内容を、具体的に検討していく予定である。

### 謝辞

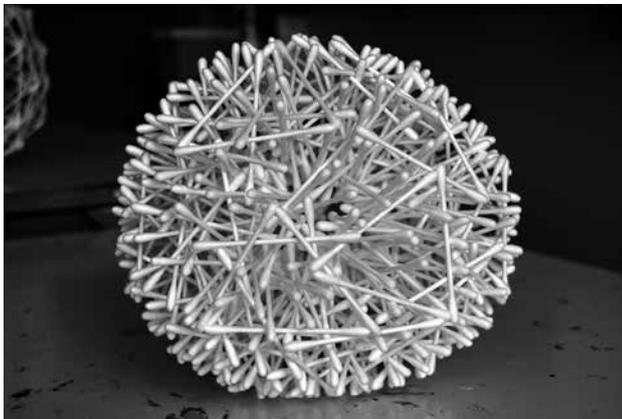
「葛西りんご農園」には、大量のりんごの枝を無償で提供していただき、心より感謝申し上げます。



りんごの枝を使った「ドーム」の作品



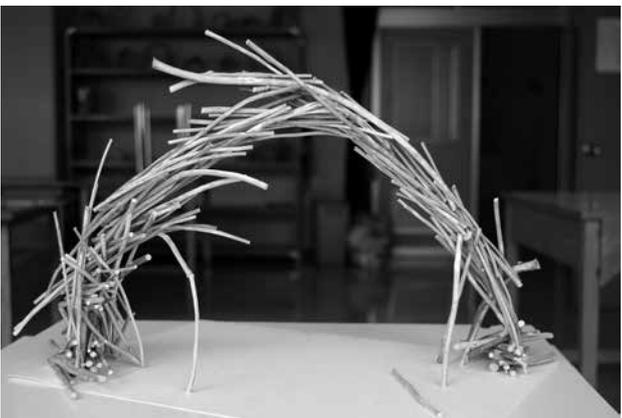
綿棒を使った「球体」の作品



綿棒を使った「球体」の作品



りんごの枝を使った「ドーム」の作品



りんごの枝を使った「アーチ」の作品



りんごの枝を使った制作の様子



## 自然物を栽培・採集・活用できる保育者の養成 - 菜園の取り組み -

新島学園短期大学 櫻井剛

### 1 はじめに

本稿は、自然物を栽培・採集・活用できる保育者の養成を目指した菜園の取り組みを紹介する。

#### (1) 菜園の沿革

この取り組みの前に、筆者が所属する短期大学に菜園はなかった。2017年度の教授会においてキャンパス内の一部を菜園として使うことの許可を得た。2017年から現在まで毎年菜園を活用している。ちなみに筆者の専門は栽培ではなく、造形である。

この取り組み以前は、学生の栽培の学びは、主に教科書を使って行われていた。しかし、学生が卒業後に働く保育現場では、栽培が行われている場合があり、菜園で収穫した自然物を活用することも

行われていることから、保育者に必要な知識・技能の一つと考えた。

#### (2) 環境

筆者が所属する短期大学は住宅街にあり、菜園は道路に面している場所にある。このため、キャンパスの外側から菜園のトウモロコシなどの背丈が高い植物が見える。

菜園はキャンパス内の空いている場所を使う許可を得て開墾した。菜園は約13Fと22Fの2つに分かれている。菜園として開墾した場所は、建物や樹木に囲まれており、日照時間が少ない場所である。このようにキャンパス内の菜園は、残念ながら栽培に適した条件ではない。

肥料を作ることは、古い校舎を解体したときのベニヤ板や柱材の廃材を分けてもらい、その木材で枠を作り菜園の廃棄物や落ち葉を入れて肥料にした。菜園のいない作物や落ち葉を木枠の中に入れて肥料を作ることでわずかではあるが循環型の菜園を目指した。ただし、菜園で作った肥料だけでは栽培できないため、多種の市販の肥料を使用している。

## 2 菜園で学ぶこと

菜園で学生が学ぶことは、次の7つである。

### (1) 栽培の知識・技能

菜園の活動は、植物の栽培の知識・技能を学ぶ。

菜園で栽培する場合、菜園の環境に合った植物を調べ、栽培する植物の種類を決め、適切に植物を世話する。このように、菜園の活動は、栽培の知識・技能の修得につながり、栽培の経験の不足を補う。

菜園の活動は、植物が生長していく様子を見る。植物の種類によって種まきや植え付けの時期が異なることを理解したり、間引きや芽かきなどの生長に必要な作業を知ったりする。しかし、種を植えて芽

が出ないことがあったり、生長の途中で枯れたり、病気になったりすることもある。きちんと植物を世話しても、雨量や日照時間、気温などの条件で十分に育たないこともある。

このように植物の性質や環境を理解して世話することの大切さや責任を持って世話することを理解する。

### (2) 採集・活用の知識・技能

菜園の活動は、採集して活用する知識・技能を学ぶ。

菜園の活用によって、どのような時期にどのような植物を採集できるのか、採集した植物はどのように活用できるのかを学ぶ。このように、菜園の活動は、採集・活用の知識・技能の修得につながる。

### (3) 環境構成の知識・技能

学生は菜園の活動によって、領域環境と領域表現を関連付けて学び、子どもの多様な表現を育むための環境を整える。保育者は、子どもの興味や関心を引き出す環境を整えることが重要であり、学生は専門的な知識と技術を身につけることで、子どもの成長や発達をより効果的に支援する。



写真1 菜園



写真3 収穫



写真2 菜園

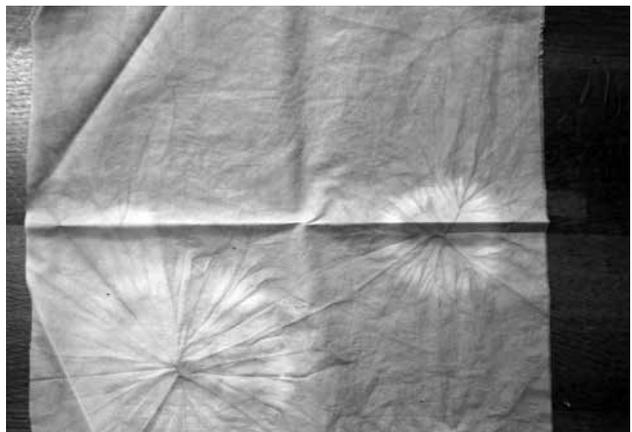


写真4 藍の葉の生葉染め

#### (4) 感性

菜園は、保育者を目指す学生が、自然の美しさ  
と不思議さを知り、自然との関わりを深め、環境を  
大切にすゝる気持ちを育む。環境の中でもとりわけ自  
然の環境は、五感を刺激し、感性を育む。夏は炎  
天下の作業に耐え、日焼けになりながら活動する。  
秋・冬は寒さや風の中で活動することがある。学生  
は季節を通した栽培を経験することによって、季節  
の変化を感じる。さらに、菜園での活動は、晴や雨、  
風などの天候に左右されるため、天候にも敏感にな  
る。

このように、キャンパス内の菜園で自然の環境を  
肌で感じる。

#### (5) 汚れを気にしない感覚

菜園の活動は、土ほこりで全身がほこりまみれに  
なり、手や衣服、靴が土で汚れる。草の汁で汚れたり、  
臭いが付いたりすることもある。菜園の活動は汚れる  
ことは当然のことであり、あまり汚れを気にしない  
感覚になる。

#### (6) コミュニケーションと協働

菜園の活動はコミュニケーションと協働が欠かせ  
ない。

例えば、土に肥料を混ぜ、耕して畝を作ることは  
重労働なので学生は交代で菜園を耕している。また、  
畝にマルチシートを張るときは、シートを伸ばし土  
で端を覆う作業を分担して協力して作業している。  
植物の支柱を立てるときにも竹の棒を支える学生、  
紐で縛る学生と役割を分担して協力して作業して  
いる。また、菜園は地域住民や小学生がすぐ隣  
を通る環境であるため、授業で学生が菜園で作業  
していると、地域住民が興味深そうに見たり話し  
かけたりしてくるので、地域住民とのコミュニケーシ



写真5 トウモロコシなど

ンにわずかに役立っている。

このように菜園の活動は、学生のコミュニケーション  
能力と協働につながる。

#### (7) 身近な生き物を知る

街中のキャンパスの菜園ではあるが、身近な昆虫  
や鳥などに関する機会になる。菜園で作業していると  
蚊に刺されたり、土を掘って幼虫やミミズが出てき  
たり、葉につくイモムシがいたり、チョウやバッタが  
いたり、いろいろな昆虫と出会う。さらに、まいた種  
をほじくり返すムクドリや実った作物を狙うカラス  
にも出会う。

このように、育てる植物について学ぶだけではなく、  
菜園で出会う生き物について知る機会になる。

### 3. 菜園の管理

菜園の管理は、主に卒業研究Ⅰ・Ⅱの授業で行っ  
ている。筆者が担当する卒業研究Ⅰ・Ⅱの授業は、  
児童センターでの活動と学内の菜園の2つを主な  
テーマと設定している。卒業研究Ⅰは2年次の春学  
期に開講し、卒業研究Ⅱは2年次の秋学期に開講  
していることから、春に菜園を耕して、種まきや植  
え付け、その後に追肥や農薬散布、夏や秋に収穫  
といった季節を通した栽培ができる。

また、菜園の管理は、ゼミのような少人数の集団  
に適している。卒業研究Ⅰ・Ⅱは少人数のゼミの授  
業であり、植物の状態に合わせて協力して世話して、  
収穫する。これらの作業を通して、学生同士のコミュ  
ニケーションや協働が深まる。

### 4. 菜園の活用

菜園は2の菜園で学生が学ぶことで示した通り、  
多くの学びがある。菜園の管理は卒業研究・「の授



写真6 ワタ

業で行うが、他の授業でも菜園を活用することで学びが得られる。キャンパス内に自由に使用できる菜園があることで、授業でさまざまに利用できる。

次に、各授業での菜園の使用を紹介する。

#### (1) 卒業研究I・IIにおける菜園の使用

卒業研究I・IIの授業で菜園を管理することは、2で示した菜園の学びの全てに関連する。

卒業研究I・IIで菜園を経験することで、学生が卒業・就職した後に保育現場で栽培し、栽培物を活用すると考えた。

例年、4月の授業開始時に耕作し、菜園計画を話し合う。それ以降は、時期に合わせて畝を作り、種をまき、収穫、栽培物を活用する。

これまで栽培した植物は、保育者を目指す者として栽培を経験しておいたほうが良いと思った身近な野菜や花、それ以外に雑草である。

以下はこれまでの活動の例である。

- ・花や種を活用するために、アサガオ、ヒマワリといった花を栽培した。

- ・芋やつるを活用するためにサツマイモ、サトイモ、ジャガイモといったイモを栽培した。

- ・一部を材料として活用するために、ミニトマト、キャベツ、ダイコン、ナガネギ、トウモロコシ、エダマメ、ナス、オクラ、ピーマン、ルバーブ、アスパラ、イチゴを栽培した。

- ・材料として活用するために、ジュズダマ、タデアイ、ヨモギといった雑草を栽培した。

- ・材料として活用するために、バジル、シソ、パクチー、レモングラスといった匂いの強い植物を栽培した。

- ・材料として活用するためにダイズ、ワタを栽培した。

#### (2) 基礎演習I・IIにおける菜園の使用

基礎演習I・IIの授業で菜園を使うことは、2で示した(2) 採集・活用の知識・技能、(4) 感性、(5) 汚れを気にしない感覚、(7) 身近な生き物を知ることの学びに関連する。

基礎演習I・IIの授業でコースとして自然物を活用している。このコースの活動については、2022年の大学造形美術研究の実践報告として紹介した。整備されて手入れが行き届いたキャンパスは多様な自然物が見つかりにくい、菜園はいろいろな植物が生い茂っており多様な自然物が見つかり、昆虫な

どの生き物にも出会うので、自然物の活動で菜園を活用している。

以下は活用例である。

- ・菜園でチョウや幼虫などの昆虫を捕まえて、観察した。

- ・菜園の土を掘り、土の中の昆虫を見つけた。

- ・タデアイの葉でたたき染めや生葉染めをした。

- ・イモの葉を使った遊びを紹介した。

#### (3) 保育内容の理解と方法(造形)における菜園の使用

保育内容の理解と方法(造形)の授業で菜園を使うことは、2で示した(2) 採集・活用の知識・技能、(4) 感性と関連する。

以下は活用例である。

- ・いろいろな形や色の植物を見つける。

- ・サツマイモのつるを材料にする。

- ・トウモロコシを材料にする。

- ・ジュズダマを材料にする。

- ・ワタを材料にする。

### 5. 学生の反応と学び

学生は、実際に栽培することで、苦労や手間、収穫時の喜びを感じ、栽培と採集、活用のつながりを理解できるようだ。教科書を使って学ぶのではなく実際に菜園を耕して栽培するので、栽培の苦労や手間、収穫時の喜びを感じるようだ。また、造形とは関連が薄い、栽培に関連して虫や、収穫物を狙う害鳥のことを知り、菜園を取り巻く環境に目を向けるきっかけになっている。

### 6. 取り組みの影響と今後の展望

キャンパス内で菜園を作ることは学生や教職員から驚かれるが、栽培した植物が作品の材料になっていることを伝えると、この取り組みの意義や内容が理解されるようだ。

栽培する植物の種類が限られるため、今後は、造形の材料として使用できる植物の種類を増やすことが課題である。



## 「ミクロに・マクロに素材と関わる」

目白大学 佐藤牧子

### 1. はじめに

造形活動において、素材と関わり素材への理解を深めることは、想像的・創造的活動につながる重要なポイントである。子どもたち(幼児・児童)の造形活動においては、素材に十分に関わる時間の確保が課題であると感じる一方で、保育学生においては、素材への関わり方、関わる視点の弱さに課題を感じている。本報告では、保育者養成校2校(目白大学、川口短期大学)における授業実践を通して、造形活動において素材と関わることの意味を探りたい。

### 2. 造形活動に対する苦手意識の所在

履修学生の中で、造形活動に対して苦手意識をもつ保育学生に対し、「なぜ苦手意識をもつようになったのか」を尋ねると、素材に関わる示唆深い内容が語られた。

■触ったことのない素材で、いきなり作品を作らされて上手くかない経験を積み重ねた結果、苦手意識をもってしまったのだと思う。

■(素材に触れず)手を動かさずに、机上で制作計画を立てることが多かったため、計画通りに行くことがほとんどなく、上手くいかない経験を繰り返すうちに、造形活動に対して積極的になれなくなってしまった。

### 3. 実践

授業では、常に素材との関わりを意識した実践を行うようにしている。本報告では、素材に関わる方法に着目し、特に学生の感性を刺激したと思われる方法を3点取り上げて報告する。

対象：保育内容（表現・応用）〔履修者 81 名〕  
造形表現応用／図画工作〔履修者 52 名〕

以下、学生の振り返りの文言については、読みやすさを考慮して一部補足修正を行っている。

#### (1) 技法を通して関わる

一部では技法を教えることへの懐疑的な意見も耳にするが、技法を覚えることが活動の目的ではなく、技法によって身近な世界を広げることが目的に、「モダンテクニックを通して世界を知る～フロッターージュ編～」と題して実践を行った。学生は、コピー用紙と和紙、色鉛筆とクレパスのセットをもち、学内の至る所から40分間で10個以上の質感を発見して採取するというミッションに挑んだ。予想外にフロッターージュの未体験者が多く、ミッションに挑む前にみんなでコインを使いフロッターージュの体験と練習を行うことになったことは、想定外であった。

#### [学生の振り返り]

- モダンテクニックを通して、ベンチや葉っぱなどいつも注目しないところに目を向けられるいい機会になった。
- 葉っぱがいちばん綺麗に写し出すことが出来て感動した。
- 普段通っている学校にある素材や凹凸に着目して見たことがなかったので、とても新鮮だった。それだけじゃなくて、使う色によっても印象や濃さが違ったり、色鉛筆とクレヨンという画材が違うことでも、模様の浮き上がり方等が違っていたりして、すごく面白かった。
- 手で触れた質感と、フロッターージュした時に紙に写る質感



写真1 樹皮

が異なるモノが沢山あって不思議だった。

- 普段何気なく通っている大学の中にも、たくさんの面白い質感が眠っているのだと感じた。
- 思ったより平面の場所は少なく、何かしら模様があるんだなと気づいた。
- 帰り道などでもこの壁なら可愛い模様が出そうだななど考えるようになった。
- 保育園の時に戻ったみたいで楽しかった。
- 指で凹凸を感じるころでも、紙に写らないこともあってやっぱり指って繊細!って感じた。
- 大きくなると小さい頃はみえていたものがだんだん気にならなくなってきているんだな、ということが改めて分かった。
- 色んなところに触ることで五感の一部が刺激され、色々な物に興味を持つきっかけ作りになると感じた。
- 久しぶりにモノに触った気がした。

#### [考察]

学生の振り返りからは、技法（フロッターージュ）を通して身近な環境・モノに触れて、新たな発見や感動を得ることで、モノに向き合う視点を得ていることがわかる。また、活動を終えて教室に戻ってきた学生の多くが、活動前には気にしていなかった教室の中のモノや自分の持ち物が気になりはじめ、フロッターージュを継続する姿も見られた。中には自分の腹筋をフロッターージュする男子学生も現れるなど、素材・環境と関わる方法としての「技法」の有意性が感じられた。さらに、画材の違いにも意識が向けられていることから、技法と画材の組み合わせを工夫することで、身近な世界を加速度的に広げていくことができるのではないかと考えた。

#### (2) デジタル顕微鏡を介して関わる

「自然物であそぶ」「ICT 機材と造形表現」の時



写真2 地面のタイル

間に素材と関わるアイテムの1つとして、Wi-Fi デジタル顕微鏡を使用した。専用アプリ Max-see を各自のスマホにダウンロードすることで、顕微鏡で見たものがスマホに映し出されると同時に、撮影機能を使い記録をとることができる。「自然物であそぶ」においては、造形素材として持ちよった素材をまずはミクロな視点で見る時間を設けてから、造形あそびを行った。「ICT 機材と造形表現」では、実際に保育現場で使用されている造形に関わる ICT 教材とともにデジタル顕微鏡を使用して、造形表現における ICT 機材の可能性について考えた。

### [学生の振り返り]

■綺麗な石だったので、顕微鏡で見てみたら緑や青、白など色々な色が入っていた。模様がとても綺麗だった。(写真6)



写真3 カットिंगステッカー



写真4 壁

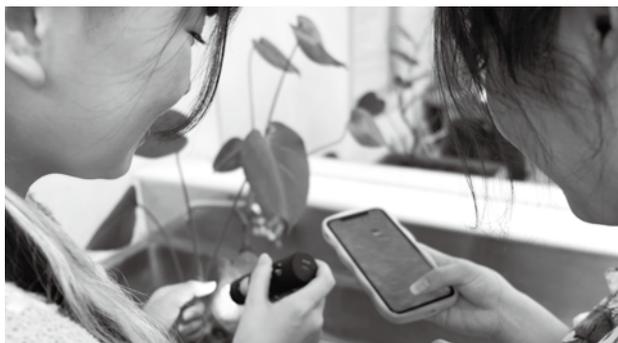


写真5 デジタル顕微鏡とアプリ Max-see

■金タワシを拡大していみると思ったより綺麗だった。(写真7)

■ススキを拡大したら、普通の風景みたいな写真が撮れていた!(写真8)

■枯れ葉を見ると、霜柱みたいなのが見えた! 想像していなかったものが写し出されてびっくり!

■まさか一人一人の髪の毛の太さがあんなに違うなんて思わなかった。

■すごく神秘的なモノがあったり、見ていて気分が悪くなるようなモノがあったり、しわしわしていたり、全く別の物に見えたりするモノがあって面白い。

■拡大する活動では、目に見えているモノとは違った形をしていて、想像もしてなかった形が出てきて面白かった。これはどんな形をしているんだろうとかますます気になる感じが子どもにもあると思うし、子どもの追求する気持ちを引き出せる活動なのかなと思った。

■モノに近づく(拡大する)と素材の構造や細かい線や微妙な色の違いを感じ取ることが出来た。

### [考察]

学生の振り返りからは、デジタル顕微鏡で拡大し撮影することを通して、普段見慣れているモノ、あるいは知っていると思っているモノにも見えていない側面があることに驚いたり感動したり、面白がったりしている様子が窺える。モノのもつ色や形の美



写真6 石(学生が撮影編集)



写真7 金タワシ(学生が撮影編集)

しさや神秘性、時には気持ち悪さなども感じる体験が、新たな興味や探究心を生んでいることがわかる。

また写真8では、拡大したススキの中に普段の風景があったという面白い発見があった。また、素材と関わった後に行った自然物で遊びながら作った作品の中には、イメージを膨らませたストーリー仕立ての作品も見られた(写真9)。まさに幼児教育・保育における感性と表現に関する領域「表現」で扱う「(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする\*」体験になっていると言えるだろう。

\*幼稚園教育要領解説,平成30年2月,文部科学省,p226

### (3) 全身で関わる

「紙コップ・紙皿であそぶ」の回では、屋内外で活動を展開した。机上で積んだり並べたりすることを楽しんだり、外の広場に文字を作り校舎の窓から写真を撮ったり(写真10)と、さまざまなアプローチが見られた。さらに授業後、続きを行いたいという学生7名が紙コップタワーを作り、最後は見事な飛び込みも見せてくれた。(写真11,12)

### [考察]

同じ紙コップでも、遠くから見てみたり(写真10)、そのモノに全身で関わってみたり(写真11,12)することで、素材に対する印象はずいぶん

異なってくることだろう。積み上げたモノを倒したり、そこに突っ込んでみたりしたいという欲求は子どもにも大人にもあるが、安全を保障することに難しさがある。しかし今回の見事な飛び込みを見て、紙コップであればその欲求も満たせることに気付かされた。

### 4. おわりに

幼児教育・保育における造形活動は、表現であり遊びでもある。今回の実践を通して、素材や身近な環境へのアプローチの方法に着目することは、学生自身が造形表現活動を堪能すると同時に、技法等の活用スキルを体験的に習得し、さらに子どもたちの遊びから乖離した教材ではなく、遊びの延長線上にある造形表現活動を生むヒントになると考えた。



写真10 紙皿 SOS (学生が撮影)

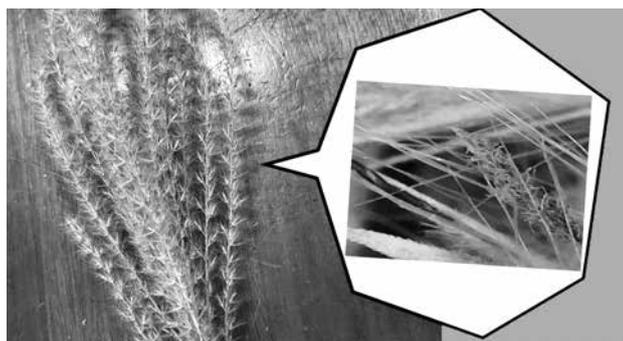


写真8 ススキ (学生が撮影編集)



写真11 紙コップタワーに飛び込む①

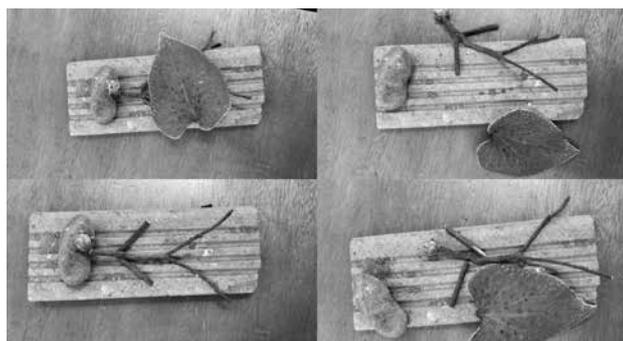


写真9 作品「寝相の悪い棒人間」(学生が撮影編集)



写真12 紙コップタワーに飛び込む②



## 手作り人形劇を通じた保育実践力の育成と地域貢献活動としての可能性

仙台白百合女子大学 千凡晋

### 1. 実践の目的

所属学科で担当している3年次ゼミ(後期)では学生の児童文化財への知識と技能の向上を目的に手作り人形劇の製作を行い、4年次ゼミ(前期)(後期)では近隣の教育・保育の現場に出向いて人形劇の公演を行う活動を通して保育実践力の育成を目指している。2021年の「くれよんのくろくん」をはじめとし、「くつやのこびと」、2023年には「あかずきん」をテーマにした人形劇を行った。本稿では「あかずきん」の人形劇の活動を中心に、構想、製作段階で行った活動の概要と教育・保育現場にて行った人形劇の公演での様子を報告する。

### 2. 手作り人形劇の構成と製作活動の概要

3年次ゼミ(後期)から4年次ゼミ(前期)では学生主体で人形劇の構想・製作・練習活動を行う。

#### (1) 構想

学生には人形劇を通して子どもに伝えたいメッセージ、即ち人形劇を行うねらいをしっかりと意識して、どの劇を行うか決めるように指導している。2022年度の3年次ゼミ(後期)でゼミ生5名は絵本、昔話などいくつかの物語からあかずきんを選び、そのストーリーと子どもを犯罪から守る防犯標語「いかのおすし(いかない、のらない、おおごえをだす、すぐにげる、しらせる)」と関連付けて人形劇を行うことと計画を立てた。

## (2) 製作

### ①人形劇の登場人物

あかずきん(大サイズ)、あかずきん(小サイズ:オオカミのお腹から救出される演出用)、動物3匹(リス・ウサギ・クマ)はフェルトで、オオカミはフェイクファーの布で、あかずきんの母と猟師は段ボール材と色画用紙で製作を行った。あかずきんの祖母役の人形は昨年度に製作した人形劇「くつやのこびと」の奥さん役のものを再利用した。

### ②劇の背景や小道具

人形劇の背景2種類(おばあさんの家に向かう森の道、祖母の家の中)と人形劇に必要な小道具(パンとブドウジュースが入ったかご、お花、猟師が使うハサミなど)を作った。

### ③台本

あかずきんの物語を基にして、以上児向けのセリフで創作した。

### ④人形劇で流す音響(BGMと効果音)

主題曲、お花を摘むシーン、オオカミの登場のシーンで流すBGMをピアノで演奏し、録音した。その他、オオカミのお腹をハサミで切る際の効果音を作って録音したり、劇中にミニカホンを使ってノックの音を出したりした。録音した音響は人形劇中にナレーションを担当する学生がタイミングに合わせてスピーカーを使って流した。

### ⑤「いか・の・お・す・し」のパネル

人形劇を終えてからまとめの活動で「いかのおすし」を伝えるために五つの標語に対する9枚の絵を作成した。

### ⑥人形劇の宣伝用のポスターとチラシ

人形劇のポスターと、保育施設に出向いて行うために宣伝用のチラシ(写真1)を作成し、大学の近隣の保育施設に配布した。

## (3) 練習

人形劇を実施するにあたり9人分の役が必要であった。そのため、主役(あかずん)とナレーションを担当する2名を除き、3名の学生で7人分の役割を分けて担当した。役割が決まってから、セリフを言いながら人形を動かす方法や録音した音響を出すタイミングなど(例えば、眠っているオオカミのお腹を猟師がハサミで切ってお腹からあかずきんが取り出されるシーン)、人形劇が流れ良く進むように練習を行った。

## 3. 教育・保育現場での人形劇の公演

2023年度に行う人形劇は8月のCこども園の夏祭りをはじめとし、学内での3回と学外(7か所)での7回とを合わせて、計10回である。(本稿では実施日程と場所の詳細は省略する。)

### (1) 学内での公演

#### ①学祭(10月)

学祭に訪れた幼児・児童の親子を対象に所属学科のイベントの一つとして人形劇を行った。

#### ②大学のイベント(10月)

同学科のSゼミの音楽コンサート(昼のミニコンサート)のイベントの一部として近隣の住民たちを対象に実施した。

#### ③子育て支援活動「ゆりっこ広場」(1月末に実施予定)

所属学科で運営している「ゆりっこ広場」は未就園児親子を対象に月に一度開かれる子育て支援活動である。参加した親子を対象に人形劇を行ってから人形との触れ合いタイムを設ける。

### (2) 学外での公演

#### ①Cこども園の夏祭り(8月)

大学近隣のCこども園の夏祭りへの出演の依頼があり、こども園の親子、卒園児を対象に2回の公演を行った。

#### ②児童館フェスタ(8月)

公益財団法人ひと・まち財団から依頼があり、児童館フェスタに参加した。Covid-19の感染流行後の久々のイベントであったゆえに、約1500人の親子が参加した。

雑然している会場内で大勢の幼児、児童、大人を対象に4回の公演を行ったために人形劇の完成度が上がった。「いかのおすし」の実践(写真2)に対し



写真1 人形劇の宣伝用のチラシ

て保護者から好評であった。

### ③近隣の T 児童館 (11 月)

児童館フェスタに参加したつながりで、大学近隣の T 児童館から依頼があった。児童館便りの広報を見て参加した 0～2 歳児親子を対象に絵本の読み聞かせ、人形劇、人形との触れ合いタイム (写真 3) を行った。

### ④ M 保育園 (12 月)

近隣の小規模保育事業 A 型の M 保育園の依頼で 0～2 歳児を対象に公演 (写真 4) を行った。年齢を考慮し、「いかのおすし」の代わりに絵本の読み聞かせと人形との触れ合いタイム (写真 5) を行った。

### ⑤ A こども園 (12 月) ・ K こども園 (2024 年 1 月初旬) (メイン写真)

両園とも 2～5 歳の園児を対象に人形劇、まとめ (写真 6)、人形との触れ合いタイムを行った。両園とも子どもの反応は良く、園の保育者から本物の人形劇を見せることができたこと、人形劇とまとめ活動の関係性について高い評価を得た。

### ⑥ S 幼稚園 (1 月中旬に実施予定)

S 幼稚園の 3～5 歳の園児を対象に、学内の②のイベントを一緒に行った S ゼミと人形劇&コンサートを実施する。

## 4. 学生の振り返りを通して

本稿を作成するに当たり、今までやってきた人形劇に関して学生の感想を収集した (D の K こども園での人形劇を終了してから Google form を用いて 7 つの設問で調査実施)。本稿では下記の 4 つの設問に対して学生の回答の一部を紹介する。

### 1) 手作り人形劇の全体を通して一番楽しかった点

- ・子どもの楽しそうな声をきくことができた点。子どもの反応を聞きながら自分自身も楽しく演じることができた。
- ・児童館フェスタなど大勢の前で公演できたこと。
- ・子どもたちの前で人形劇を披露したこと。
- ・劇が形になって子どもたちの前で発表できた点。
- ・現場で人形劇を発表するために準備する時。発表前の緊張感もあったが、子どもたちを喜ばせるためにゼミ生全員が協力して公演を準備する時の一体感がうれしく楽しかった。

ゼミ生 5 名も子どもたちの前で人形劇を行うことに対しての楽しみを感じていることが分かった。



写真 2 児童館フェスタ (いかのおすしの実演)

### 2) 手作り人形劇の全体を通して一番苦労した点

- ・人形や小道具の製作
- ・背景や小物を作ったこと。
- ・人形を作る過程。
- ・こだわりすぎて人形がなかなか終わらず、時間がかかってしまったこと。
- ・背景の絵の具が剥がれてきて修正したこと。

ゼミ生 5 名とも製作物に対して苦労を感じていることが分かった。

### 3) 手作り人形劇の全体を通して一番やりがいを感じた点

- ・人形劇を行う際に子どもの様子は見えないが、子どもの声による反応から皆が楽しんでいることが伝わってやってよかったと思った。
- ・現場の先生や子どもたちに感想をいただいたとき。
- ・人形を作る過程。
- ・人形をすること。
- ・人形劇を披露して終わった後に子どもたちから面白かったと言って貰えた時。

ゼミ生は苦労して作った人形劇に対して子どもや保育者から好評をもらうことに対して満足感を感じていることが読み取れる。

### 4) 手作り人形劇の公演の回数を積み重ねることで伸びたと思った点

- ・セリフを言いながら人形を動かし方法や声の強弱など
- ・公演前後の立ち回りは慣れてきた。
- ・人形の動かし方、演技力
- ・台詞回しや導入が段々とスムーズになっていって、見やすくなっている。
- ・子どもの反応をみながら導入を行うこと。動物の動かし方。

公演の回数を重ねるにつれ、ゼミ生はそれぞれの役割に慣れ、その分余裕をもって演じたり、臨機応変に活動したりすることができたことがうかがえる。

5) 本活動で学んだ点、身に付けた点を通して職場にて活用できる点

- ・人形劇の作り方、役の演じ方や人形の動かし方。人形劇の公演を通して子どもに伝えるにはどの言葉がわかりやすいのかを台本を考える上で学んだ。職場ではこの経験を子どもの発表会の指導の時に活用ができると思う。
- ・人形劇ではアナウンスや映像制作の経験から、音響を担当した。自分の得意分野や知識を活かして活動することができると感じた。職場でも積極的に取り入れていきたい。
- ・子どもたちをまとめる力。どう説明したら、子どもたちに伝わりやすいかなどの言葉かけ。
- ・パペットの作り方や、それを使用した子どもの興味の引き方など。職場では、この製作スキルを活かして子どもの興味を惹きつけることができる。
- ・協力して取り組む姿勢、意見を出し合い、物事を解決していく点、最後まで諦めることなくやり遂げる点、子どもがわかりやすい言葉遣い(台詞)にする点、改善して次に活かす姿勢など。

ゼミ生は手作り人形劇の活動を通して、保育教材を含めた児童文化財を製作する力、発表を行う際の表現力、子どもへの言葉かけや言葉遣い、人と協力する姿勢など、保育者として必要な資質、能力

を自然と身に付けたことがうかがえる。2024年4月から子どものいる現場で働き始める5名のゼミ生がゼミ活動を通して学び、身に付けたことを生かして活躍することを期待する。

5. まとめと今後の課題

本稿では1年間半のゼミ活動の報告を通して学生の保育実践力の育成と地域貢献活動としての可能性について検討した。ゼミ活動に人形劇を取り入れてから3年しか経たないが、製作活動と公演活動を組み合わせた実践的なアプローチにより、学生の表現活動への総合的な理解と技能が向上できていること、保育現場で直面する可能性のある課題に備えられる力も育まれていることを実感している。

人形劇の製作や学外での公演活動には苦労と手間がかかるが、人形劇を通して学生が子どもたちとの相互の喜びとつながりを感じる貴重な経験ができるゆえに今後ともこの活動を継続していきたい。



写真3 T 児童館 (人形との触れ合いタイム)



写真5 M 保育園 (人形との触れ合いタイム)



写真4 M 保育園 (人形劇中の様子)



写真6 A 子ども園 (いかのおすしの実演)



写真1 学生作品 @「やさしい心」

## パブリックアート制作が育む自己と他者のコミュニケーション

東海学院大学 中島 法晃

### 1. はじめに

パブリックアートとは、広場や道路や公園など公共的な空間に設置されるアート作品を指す。文化庁はパブリックアートの定義<sup>1</sup>について、「アーティストがその周囲の文化や社会、歴史との関係において、場所を選んで制作を行う、公共の場所における空間性 (site-specific) を意識して作られた作品 (抜粋)」と示している。また、パブリックアートの効果として、「アートがシンボルになるなど地域の活性化に貢献 (話題性、キャッチ、アゴラの創出) (抜粋)」することであると示している。

美術館や画廊、アートギャラリーに足を運ばなくても気軽に鑑賞することができることから、美術作

品への興味関心がさほど無い大学生にとっても、「〇〇公園にあるあの作品知っている?」と聞くと、「見たことがある。」「写真撮ったことがある。」などと答える学生が存在する。公共空間に設置されたアート作品は、時に人の待ち合わせの場所になり、時に「SNS 映え」スポットになり、人の感性を刺激するものとなっている。作品の作者やタイトル、制作コンセプトは知らなくても、人は自由に作品を鑑賞し、屋外にある作品は季節による背景の景色の変化を意識的、または無意識的に感じながら感性が育まれていく。

本稿は、幼稚園教諭および小学校教員養成課程に在学する大学3年生を対象とした図工の授業: 題

材「東海の住人をつくろう」の実践報告である。大学生が制作した作品と、学内の任意の場所に作品を設置して撮影した後に記述したワークシートから、パブリックアート制作に取り組んだことで示唆された他者とのコミュニケーションツールとしての美術表現の可能性について報告する。

## 2. 授業の流れ

対象とする授業は3年次後期に開講する「図画工作演習」である。大学生となり2年半経ち、多角的な視点をもち学生生活について様々な思いを抱えている。仲間との関係性や学修やサークル活動、学内での生活面で楽しさを感じ、時につまずきを感じながらも、教職に就くことを目標に各々が学生生活を過ごしている。学内は東西に分かれたキャンパスがあり、自然が豊かな中庭や、絵本に特化した図書館「えほんの森」、購買、学食、ラウンジなどがあり、学生によって「お気に入りの場所」はそれぞれ違う。学生が場所を自分で決めて、その場所に設置するための作品を制作する。

本授業は全4回で行った。パブリックアートの歴史や定義、諸外国や日本における著名なパブリックアート作品をスライドで紹介した後に、以下の課題を設定して制作を展開した。

- ①学内のどこに設置するかを考える
- ②「架空の生き物」をデザインする
- ③自立させる
- ④段ボールをベースとした廃材を素材とする
- ⑤1人で持ち運びができるサイズにする

制作物を無生物やアブストラク的な形態ではなく、「架空の生き物」と設定したのは、本授業の前の課題において擬人化をテーマにした題材で制作を行い、バケツやドア、蛇口など、身の回りにあるどんな物にでも、目をつけるとキャラクター性やストーリー性が生まれることを体験したことで、本課題に取り組むにあたりスムーズにアイデアを出すことができると考えたからである。

素材は大学祭後であったため廃棄用の段ボールがゴミ集積所に豊富にあり、再利用の視点から使用した。固定方法については、着色することを前提にして、塗料が定着しにくいテープ類の使用は避け、グルーガンを使用して接着固定をした。

制作後に、事前に計画していた学内の任意の場所に作品を設置し、学生自身が撮影をして画像を

提出した。制作および設置後に記述するワークシートには以下の5問を設定した。

- ①タイトル
- ②設置した場所（設置場所）
- ③その場所を選んだ理由（理由）
- ④通る人に伝えたいメッセージ（メッセージ）
- ⑤制作、設置後の感想（感想）

紙面に限りがあるため、数点を抜粋して記述する。ワークシート記述内容については、誤字脱字を筆者が訂正した箇所がある。

## 3. 学生作品

### (1) 学生作品①（前頁写真1）「やさしい心」

設置場所：中庭

理由：中庭は緑があって良い場所だし、椅子も置かれているけど、学生が過ごしている所をあまり見たことがないので寂しく感じていた。せっかく広い芝生なのでここに置いた。

メッセージ：一見すると怖そうな怪物に見えるけど、近くで見るとわかるように手に1輪の花を持たせて、優しい心を表現した。誰かが共感してくれたら嬉しい。

### (2) 写真2 学生作品A「一歩」 設置場所：キャンパス正面玄関

感想：段ボールの素材を生かした作品ができたのが良かったが、手足を細くしすぎたので運ぶ時に壊れやすくなってしまったことが反省だった。でも、この場所や伝えたいことに合う作品を考えると、この形が自分の中ではベストだと思った。

理由：いろいろな学科の学生皆が通る場所で、それぞれ専門の知識を学んで自分の夢を叶えようとしている人が多いから、「頑張れ」という気持ちで設置した。また、来客者やオープンキャンパスに参



写真2 学生作品A「一歩」 設置場所：キャンパス正面玄関



写真3 学生作品B「ブックの子」設置場所：えほんの森

加する高校生の目印になり、面白い大学だと思ってもらいたいと思ったから。

メッセージ：「学校に行きたくないな」とか、「このままでいいのかな」という不安や葛藤の中で、この作品のように一歩踏み出したり前に進んだりする人を応援できるようにしたい。

感想：自立させることに苦労したが、こだわりを持って作ることができた。メッセージが伝わるように、歩いている姿が上手く表現できて良かった。

### (3) 写真3 学生作品B「ブックの子」

設置場所：えほんの森

理由：「えほんの森」は学生だけではなく地域の子どもたちに開放された図書館なので、子どもたちに親んでもらえるような作品を制作して設置した。

メッセージ：いろんな絵本があり、自由に読むことができるけど、本を大切にしてほしいという願いを込めた。えほんの森のイメージキャラクターとして、作品を見てホッとしてほしい。

感想：難しかったが、子どもに親んでもらうために丸みのある形にすることができた。白やパステルカラーで塗ることで優しい雰囲気生き物になるように配色することができた。

### (4) 写真4 学生作品C「本の精」設置場所：図書館内の本屋

理由：この本屋には1年生の時から教科書や文具などを購入するために行っているが、もっと入りやすく良い雰囲気になりたいと思っていたから。

メッセージ：体の中にA3程度のサイズのポスターを貼る場所を作ったので、本屋や図書館でイベントがある時にチラシなどを貼ると学生に周知しやすく



写真4 学生作品C「本の精」設置場所：図書館内の本屋

なと思うし、本屋のキャラクターとしてだけではなくて掲示板としても活用してほしい。

感想：いつも計画段階が一番楽しくて制作すると上手くできなくて諦めてしまうこともあったが、今回は途中で形の変更をしてしまったことはあっても用途を持たせる作品を制作することで、安全性や耐久性について考えることができた。自分の作った作品が役に立つのなら嬉しい。

### (5) 写真5 学生作品D「心の中のハートちゃん」

設置場所：正面玄関バスロタリー

理由：友達や恋人同士で椅子に座って暖かさや爽やかさを感じながら作品を見て優しい気持ちや心が温くなるような作品を作りたくて、椅子やベンチがある場所ならどこでも良いと思って制作した。

メッセージ：ハートのオブジェの中にアルミホイールで制作したいろんな大きさのハートが入っていて、それに気づいた人が話題にして、一緒にいる人同士に感謝を伝え合ってもらいたい。

感想：課題の「架空の生き物」になっているかは難しいけど、箱の中を覗き込むことができるような、見た人が参加できるような作品にしたかったので上手くできて良かった。

### (6) 写真6 学生作品E「騎士さん」

設置場所：キャンパス連絡通路のエレベーターホール

理由：多くの人が行き来していて、エレベーターが開いてすぐに目につく所だから。隣にストリートピアノもあるので人が集まること間違いなし。

メッセージ：東館の守り人として少し怖い印象を与えて学生の風紀を監視する意味と、よく見るといういろんな商品のパッケージをそのまま装飾として使っ

ているので、気づくと面白く感じて、毎日見てだんだん親近感を感じるようになってほしい。

感想：本当は足だけで自立させたかったが、バランスを取るのが難しくて剣を作って3点で自立させた。

段ボールを活かし、着色する箇所と段ボールのデ



写真5 学生作品D「心の中のハートちゃん」設置場所：正面玄関バスロータリー



写真6 学生作品E「騎士さん」設置場所：キャンパス連絡路のエレベーターホール

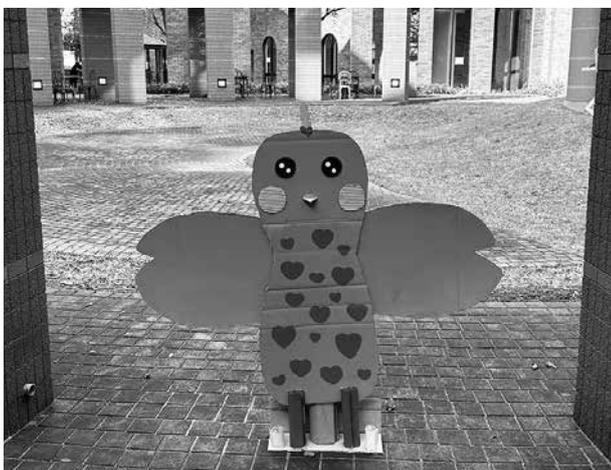


写真7 学生作品F「幸せを集める青い鳥」設置場所：中庭

ザインをそのまま活用する箇所を分けたのは成功したと思う。いつもならこれぐらいで良いかという妥協もあったが、皆が通る場所で見られるから耐久性をしっかりと考えて作ることができたし、とても楽しかった。

(7) 写真7 学生作品F「幸せを集める青い鳥」

設置場所：中庭

理由：作品が鳥をイメージしたもので、羽根が動くようになっていて外に置いて今にも飛び立ちそうな感じにしたかった。中庭には緑色が多いけど花は咲いていないので少し殺風景だと感じていたので、鳥の鮮やかな青色と景色のコントラストで華やかさを感じてほしいと思った。

メッセージ：毎日同じ学校生活を過ごす中で、ちょっとでも「ほっ」とほっこりする気持ちや何気ない風景の中にかわいい鳥が置いてあるという、「きゅん」とときめく気持ちを伝えたい。また、「今日も頑張ろう」「明日も頑張ろう」という前向きな思いになってもらいたい。感想：(略)

#### 4. まとめ

パブリックアート制作体験後のワークシートの記述から、大学をアートによってより良い場所にしようと考えて、学生の視点だけでなく、学外からの来客者の視点に立ち制作アイデアを抽出している学生が多かった。また、「誰かのため」に制作することは制作意欲向上につながることや、場所性を活かしながら伝えたいメッセージを、作品を通して他者に伝えるために効果的な色や形や動きについて試行錯誤をすることで知識技能の向上に寄与し、作品の完成度へのこだわりが向上することが示唆された。

註

1. 文化庁(2010) 文化審議会文化政策部会美術ワーキンググループ配布資料「アートマネジメント分野における文化庁の施策」 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/08/wg/bijutsu\\_01/pdf/shiryō\\_6\\_ver02.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/08/wg/bijutsu_01/pdf/shiryō_6_ver02.pdf)

# 釘を打つ行為にみる精神性についての一考察

大阪人間科学大学 仁木裕美

## 1. はじめに

筆者が「釘」に注目したのは、全美協フォーラムにおいて実践発表の機会をいただくことになったことがきっかけである。幼い頃、釘を金づちで打ち込んだ経験は誰にでもあるだろう。しかし、昨今のDIYブームの中、店舗から持ち帰る組み立てキットに梱包されているものは「釘」ではなく「ネジ」の方である。釘は、軸の部分が直線でビスにあるような螺旋状の凸凹がない。そのため、真上に引き抜く力に対して抵抗が弱くなり、ビスと比べると抜けやすい。また、ビスは電動ドライバーなどの工具を使用して打ち込むことができるため、施工スピードが圧倒的に早く、効率が良い。そのため、施工者への肉体的負担も軽くなる。横方向に加わる力に対しては、粘りのある釘の方が強いという長所はあるが、機能性・施工性のいずれの側面からも釘がビスに勝ることはないのが現状のようだ。

学生はどう感じているのだろうか。筆者が担当する授業で釘とビスの違いを尋ねてみたところ、明確に説明できる学生は少数であった。また、釘を金づちで打った経験を尋ねてみると、81.3%の学生(n=32)が「経験がある」と回答した。その経験の多くは中学校技術科での木材加工で柵を作るなどの題材によるものである事もわかった。学生にとっての釘とは板材と板材を接合するための締結材(ファスナー)であり、釘打ちは、いかに正確にかつきれいに打ち込むことができるかを重要視したものという印象が強いようだ。しかし、日常生活において釘よりもネジが主流になり、性能の高い接着剤の開発が進む今、ものづくりにおける締結材としての釘の出番は減少の一途を辿っている。とはいうものの、金づちや玄能といった手動工具でトントンリズムよく釘を打つ行為はなんとも言えない魅力がある。そのような背景を考えた時、締結材としての釘という

性質を取り入れながらも、まずは「釘を打つ行為」に注目した活動を行いたいと考えた。

そこで、本稿では、釘を用いた造形活動を実践するにあたり、「釘を打つ行為」にみる精神性について再考しておきたい。

## 2. 人の心と釘の関係

### 2-1. 呪詛と釘

釘は、鉄を一本一本槌でたたいて四角に作る和釘と呼ばれるものと、線材を材料として機械で大量生産される洋釘と呼ばれるものがあり、現在一般的に使われているのは洋釘の方である。釘の歴史は古く、日本最古の木造建築物である法隆寺の解体修理の際にも、当時のものと推定される和釘が数多く発見されているようだ。また、物事などに夢中になりその場から動かないさまを「釘付け」、言い逃れができないよう念を押すことを「釘を刺す」と表現するなど、日本には釘にまつわることわざが多い。釘が今以上に日本人の生活に密着していたのであろう。

さて、古来からの釘を打つ行為と言えば「丑の刻参り」を思い浮かべる人もいる。呪う人を模した藁人形を神木に五寸釘で打ちつけ、その死を祈る呪詛的な行いと言われている。TVアニメ「呪術廻戦」に登場するキャラクター釘崎野薔薇は釘や藁人形を用いた術式で敵と戦うという設定になっている。そして、オープニングテーマ曲になったKing Gnu「SPECIALZ」のミュージックビデオにも五寸釘を藁人形に打ち付ける映像が度々登場する<sup>1)</sup>。

目をひく釘だらけの人形(図1)は「ンキシ・ンコンディ」と呼ばれるコンゴの呪術用の像である<sup>2)</sup>。死者と交信できる呪術医による儀式で使用された。像に打ち込まれている無数の釘や金属片は、村人たちの手によるものである。日本で言う丑の刻参りのような個人的な恨みを晴らすためのものではなく、



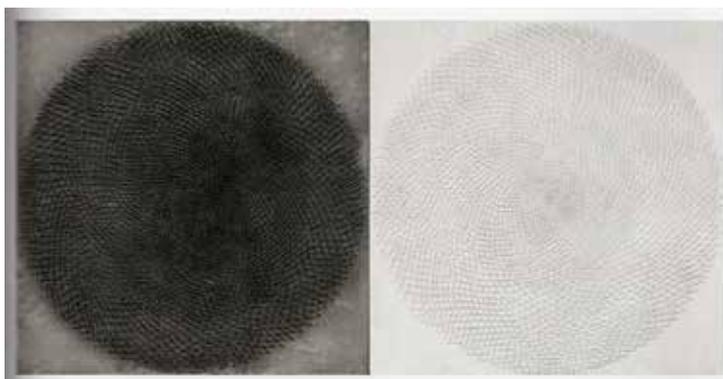
〈図1〉左 / Power Figure (Nkisi N'Kondi)  
全体 45.7 × 20.3 × 8.9cm 19世紀から  
20世紀初頭 右 / 部分 (The Yale University  
Art Gallery website より引用)

釘を打つことでコミュニティでの生活を妨害する者の力を奪い、罰する。このようにして、コミュニティにおける法と秩序を維持し、自分たちの文化を守っていたようだ。

釘を打ち付ける反復行為は時には個人的な感情・信条を解き放ち、時には宗教的な儀式として感情を昇華させる。古来より、人間の心と釘とは切り離せない関係なのかもしれない。

## 2-2. ギュンター・ユッカーと釘

釘を用いた作品を発表し続ける現代アーティストも取り上げておきたい。Günther Uecker / ギュンター・ユッカー (1930-) は、1950年代の末、グループ〈ゼロ〉という前衛美術運動の中で活躍したドイツを代表するアーティストの1人である。筆者が初めてユッカーの作品を見たのは、京都国立近代美術館で開催された「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」(会期:2022年10月14日～2023年1月22日)であっ



〈図2〉 大きな螺旋I(黒) と大きな螺旋II(白) 1968 (ルートヴィヒ美術館展 図録より引用)

た<sup>3)</sup>。

《大きな螺旋I(黒) と大きな螺旋II(白)》(1968年)〈図2〉は、キャンバスに対してサークル状に釘が打ち付けられており、釘の粗密や方向によって生み出される光と影の複雑な戯れを探究した作品である。本展覧会に出品されているユッカーの作品はこの1点のみであったが、無数の釘を使う彼の作品を鑑賞していると、静的な美術館という空間に振動する動的なうねりを感じたことを記憶している。

他にも、《樹 Baum》(1992年)〈図3〉など、打ち曲げられた釘からは、金づちを振りかざしては叩くユッカーの姿、鉄の錆び臭さや汗の匂いすら喚起



〈図3〉樹 Baum 1992 釘・灰・膠・木 90x50cm(ギュンター・ユッカー 虐待されし人間 図録より引用)



〈図4〉 審判(1975) (寺山修司実験映像ワールド vol.2 より引用)

させる。山本(2004)は、『おそらく、視覚を肉体的感覚へと変換させる装置、と呼ぶべきものがユッカー作品に共通する構造的特質であろう<sup>4)</sup>』とユッカーの作品群を評している。

### 2-3. 寺山修司と釘

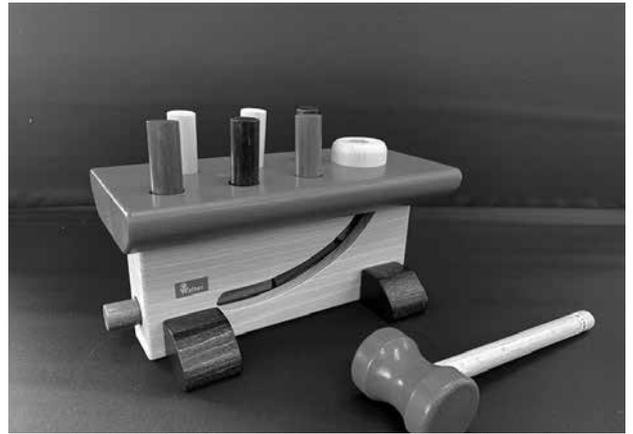
寺山修司(1935-1983)は、前衛演劇グループ「天井桟敷」を主宰した歌人・劇作家である。寺山は自身の実験映画のことを「私の詩、私の暴力、私の猥談、私の名刺」と呼んだ。1975年に制作された『審判』〈図4〉は、登場人物たちが様々な対象物に釘を打ち続ける短編実験映画である<sup>5)</sup>。道路に五寸釘を打ち込む男、巨大な釘を背負いあてどなく荒野を歩く男、男が金づちで床に釘を打つたびに身悶える女など、釘は、時には十字架、時には性のメタファーとして登場する。そして、その映像からは釘を叩く音のみが響き渡る。実際の上映の際には、板に白いペンキを塗った特性のスクリーンに投影され、最後は観客たちが客席から立ち上がり、自らスクリーンに釘を打ち込んでいくという観客参加型作品であったようだ。ここで登場する釘は、材と材をつなぐ締結材としての意味よりも、精神と精神をつなぐもの、あるいは「釘を打つ行為」がもたらす意味を観客に問いかけるものであろう。

## 3. 子どもの造形活動と釘

### 3-1. 幼児の打つ行為

幼児の造形活動は、身体機能の発達や生活経験に伴って変化するため、手や指先が発達していないと釘の扱いは難しい。しかし、釘を打てるようになる前から「打つ行為」は始まっている。

nic社のハンマートイ〈図5〉は、大工さんのように木製ハンマーで円筒形のペグを叩き入れる事が



〈図5〉 nic社ハンマートイ「大工さん」22×10×11cm カエデ・ブナ

できる木製のおもちゃである。次々に打ち込んでいくとペグが少しずつ押し出されていく仕組みになっており、箱の中の通り道がいっぱいになると、横の穴から飛び出す。叩くたびにペグが音を立てながら少しずつ入っていく感覚が心地良く、視覚的にもユーモラスである。

郡司(2018)が、『造形行為による「呼びかけ—応答」、ものともとの関係性が世界に立ちあらわれる実感を、手応えとともに与えてくれるのは音である<sup>6)</sup>』と述べているように、繰り返し叩いて打ち込む行為は、音とともに手応えを感じながら達成感を繰り返し得られる。幼児にとって、体を使って打つ行為は世界とのコミュニケーションでもある。

### 3-2. 学習指導要領における釘の取り扱い

小学校図画工作科における釘の取り扱いについても簡単に確認しておきたい。

学習指導要領図画工作編(平成29年告示)<sup>7)</sup>では、材料や用具の取り扱いを適切に習得するための当該学年が示されており、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりするよう示されている。釘は、切ってつないだり、組み合わせたりに適切な材料の1つとして、金づちは、釘を木切れに打ち込んで表現したり、板材と板材を釘でつないだりするとき使用する用具として、以下の通り示されている。

教科書では、金づちを使って木片に釘を打ち込

#### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

2(6)イ 第3学年及び第4学年においては、木切れ、板材、釘(くぎ)、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなどを用いること。

みながら形を見つけていく題材が紹介されている〈図6〉<sup>8)</sup>。「くぎをうってできる形を見つけ、くふうしてつくる」「いろいろなうち方をためしながら、つくりたいものを思いつく」「うつかんしよくをあじわいながら、形を見つかることを楽しむ」という3つの学習のめあては、まさに、ユッカーの制作プロセスに通じるものを感じる。

しかし、釘と金づちを使用する際には、まずは道具を正しく使い、安全な環境を整えることが大前提として必要である。教科書では、巻末の資料として見開き2ページに渡り、釘の打ち方、木のつなぎ

方、釘の抜き方などの説明や注意事項が掲載されており、基礎技能に関する説明は充実してきている。

一方、荒井ら(2012)が、「基礎技能の習得」が、子どもたちの安全な表現活動のために大切であるとした上で、『「基礎技能の習得」が豊かな表現につながる一方で、正確にかつきれいに仕上げることを目的とした一連の「基礎技能の習得」プロセスが前にすぎると、「表現内容を主体的に追求し、創造的に考え、表す力を育む」図画工作科の中で、物事や動作を考え理解し判断する能力(知性)が優先され、木材に触れた時のぬくもり、木材を切る感触、木材に釘を打つ音、木材の香りを楽しむ妨げになることも考えられる。』<sup>9)</sup>と述べているように、偏りすぎないように配慮する必要がある。

#### 4. まとめ

トントンと釘を打つ。リズムカルな反復行為に対して、対象物は手応えや音で応答する。体全体に響き渡るその応答は私たちの心を満足させてくれる。対象物は釘を打たれることによって破壊され、同時に新しい命が吹き込まれる。つまり、釘は創造と破壊という相反する営みを同時に生み出す素材であるとも言えるのではないか。何かを象徴し、暗示することで表現に結びつく。あるいは、釘を打つ行為によって感情が浄化される。ネジに機能面でその座を奪われたとしても、そのような機能を持つ素材としての釘はこの先も不変であろう。

釘の容姿はシンプルだ。硬くて、細長く、そしてちょっと痛い。学生は小さいそれを「かわいい」とさえ表現する。これまでの考察を踏まえ、今後は、



〈図6〉くぎうちトントン(ためしたよみつけたよ図画工作3・4上より引用)

精神性を重視した釘の造形活動を実践していきたい。

#### <引用・参考文献>

- 1) King Gnu, ミュージックビデオ『SPECIALZ』, Ariola Japan, 2023年  
<https://youtu.be/fhzKLBZJC3w?si=G1DnIk2ZkiWatrOs> (2024/01/12 最終アクセス)
- 2) Power Figure (Nkisi N’Kondi), The Yale University Art Gallery  
<https://artgallery.yale.edu/collections/objects/84444> (2024/01/11 最終アクセス)
- 3) 京都国立近代美術館『ルートヴィヒ美術館展図録』日本経済新聞社, 2022年
- 4) 山本和弘『ギュンター・ユッカー 虐待されし人間 図録[日本語版小冊子・ギュンターユッカー - 睥睨するヴェルトシュメルツ』伊丹市立美術館/栃木県立美術館, 2004年
- 5) 寺山修司監督『寺山修司実験映像ワールド vol.2』(DVD) ダゲレオ出版, 2006年
- 6) 磯部錦司編『造形表現・図画工作 第2版』建帛社, 2018年
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示) 図画工作編』日本文教出版, 2018年
- 8) 日本児童美術研究会著『ためしたよみつけたよ図画工作3・4上』日本文教出版, 2021年
- 9) 荒井一成・古川香・堤司・蝦名敦子『図画工作科における木工作題材の検討と課題』弘前大学教育学部紀要, 第108号, 2012年, pp.99-106

# 大規模な表現活動でしか得られないこと

## — 「子どもと舞台芸術大博覧会 2023 イン新潟」に参加した学生を見て—

新潟青陵大学短期大学部 福岡龍太

### 1. はじめに

年に一度開催される「子どもと舞台芸術大博覧会」(以下大博覧会)が今年度、本学の本拠地である新潟市で行われた。準備は2022年の初冬より始まった。この大博覧会の主な活動理念は、プロのパフォーマーが舞台芸術を介して、子どもの感受性を育むことである。子どもの表現力を期待する前に、大人が真剣に表現をする姿を見せるという趣旨なのだろう。

初期準備が始まってすぐに、大博覧会の関係者から本学学生へのボランティア支援の要請があり、筆者が所属する学園は協議の末に共催することとした。また、本学の有志学生だけが参加するのではなく、「高等教育コンソーシアムにいがた」という連携組織への声かけにより、より多くの学生へ社会活動の活性化を促した。

従来ボランティア学生には、運営者や演者が企画した催し物を円滑に進行する手助けをお願いするのだが、今回の大博覧会では遊びを企画して子どもとの関わりを積極的に行うことができる機会も設けた。表現という大枠の中で黒子にも表現者にもなりながら、大博覧会を支え、楽しむことができるという点が最大のアピールポイントとなった。

本研究ノートでは、現在の学生が抱く対人関係における悩みを明らかにし、大博覧会の特に子どもと共に遊ぶエリアでの様子に注目してみる。彼らの果たした役割と成果を紹介しながら、大規模ワークショップへの参加意義を述べる。

### 2. 現況と問題意識

#### (1) 「子どもと舞台芸術大博覧会 2023 イン新潟」とは

人の交流が極端に制限された3年間から解放されそうな兆しに一喜一憂しながらも、2023年初頭

より本格的な準備が始まった大博覧会は、大人が真剣に取り組む舞台芸術を子どもに見てもらい、何かを感じてほしいという思いから、1999年より継続されている。年に一度、開催地近郊に活動拠点を置く舞台俳優や大道芸人等のパフォーマーが、幼児・児童教育の充実とネットワーク拡充に寄与してきた。今年度は新潟市がその会場となり、新潟の実行委員会より参加のお誘いをいただいた。

#### (2) 参加するにあたり

筆者は日頃から学生へ「学外活動を経験することは大変貴重だ」と伝えている。そしてチャンスがあれば積極的に実践をしてきた。ようやく行動制限を緩めていいのではないかという兆しを社会に感じ始めたころ、学生から「アルバイトの経験しか社会と接することができない現状を打破したい」との要望があった。少し時期尚早な感も否めなかったが、準備だけでも進めておこうと大博覧会への参加を決め、学生募集を開始した。しかし、いくら学生が社会と接したいと大博覧会への参加を申し出たとしても、筆者は若干の不安材料を抱いていた。それは学生の初期段階におけるコミュニケーション力である。

#### (3) 問題意識

参加募集が開始されると、保育科に所属している学生だからなのか、それとも人と関わる経験が制約されていた反動によるものなのか、理由は定かではないが、筆者の予想をはるかに超える反響があった。ただし、応募後に学生はある不安を口にする。初対面の子どもらと、どのように話し始めればいいのか、わからないらしい。

2023年度新学期が始まると、ほぼすべての授業が対面で行われることとなった。手探りで作り上げた感染防止対策用のカリキュラムを2019年以前の授業へ戻そうとしたが、授業内容を元通りにするだ

けでは授業が成り立たない状態になっていることに筆者は気づいた。一番深刻な状態を挙げるとすれば、対話が成立しづらいということだ。例えば、授業中に筆者が質問を投げかけても、学生は無言で微動だにしない。しかし、紙に記述したり、パソコン入力をしたりすれば、別人かと紛うほどの姿勢を見る。内容的には的を射る意見もあればそうでないものもあるし、丁寧な文字で読みやすいものもあれば誤字脱字が多く読めないものもある。文章の出来不出来の差異が深刻なのではなく、感情や自己表現の表出をすべて文字入力に頼っているのではないかと疑念を抱くような立ち振る舞いに、筆者に限らず多くの教員は困惑する。

現在、本学1年生の学生からは、高校時代に対面による会話の経験ができなかったと聞く。何とかコミュニケーションを取りたくとも、ひとこと目に何を話せばいいのか思い浮かばず、勇気を出して話しかけてみても言いたいことが整理できず伝わらなかったり、声が小さくて聞きとってもらえなかったりと、話すことが億劫になっていったと言う。黙食などと話を禁止するような環境が定着したために、活字でのやり取りだけに慣れきってしまったようだ。理屈をかざして画一的で普遍的な「素晴らしい教育」掲げてきた教育環境は、暗黒とも言える数年間で崩壊してしまったのだろう。多様な手段による相互交流から、言葉だけの交互交流へと急激に変化したことで、学生は意思表示意欲を見失っているのかもしれない。

大博覧会へ参加したいと申し出た多くの学生は、初対面の子どもとコミュニケーション構築ができるようになりたいと望んでいる。またとないチャンスだということは十分理解しているのだが、対応する自信がない。筆者は「とにかくやってみましょう」と声をかけ、本番を迎えた。すると、他学の学生からも同様の悩みを打ち明けられた。高校時代の自粛生活は、彼らの能動的なコミュニケーション能力の発育を著しく妨げている。

### 3. 本番の様子

#### (1) 実施詳細

大博覧会でボランティア学生が行うべき活動は主に2つで、会場設営・撤収と、各催場の進行を円滑に行うための手伝いや自主企画の実践である。催事の種類は演劇会場、遊ぶコーナー、学習体

験ができるコーナー、遊びに関する資料展示、乳児を見守る部屋など多岐にわたった。

日程は以下の通りに実施をした。

・8月16日(水) 準備日9時から17時

・8月17日(木)から20日(日)10時から16時(最終日は14時で終了)

ボランティア学生は1日単位で参加できるように事前に公募し、事務局がランダムに配属を割り振った。朝礼は全員一斉集合で毎日行うが、解散は各ブースの判断に任せた。衣装は大博覧会のロゴを印刷したオレンジ色のTシャツで統一する。持参している貴重品は筆者が担当するブースで保管した。大会実行委員会より、学生ボランティアには1日毎1,000円の交通費が支給された。

次項では筆者企画のお絵描きブース(楽画会、らくがかい<sup>2)</sup>)中心に学生の様子を記す。

#### (2) 実施記録

1日目 8月17日(木) 快晴

前日の準備が予定通りに終了していたため、朝礼後すぐに学生は担当ブースへ移動して開場に備えた。楽画会ブースでは担当学生6名が養生シートの上に大判のダンボール板12枚を敷き、マジックペン(20色×15本程度)とボンド3本をランダムに配置した。成人男性の手のひらほどの大きさのダンボール木っ端は、ダンボール箱に入れてブースを取り囲むように配置した。

筆者は学生に、活動中は特に参加者へは必要以上に言葉がけを行わないかわりに、自身もラクガキを楽しんでほしいとお願いをした。

開場と同時に数組の親子連れが参加してくれた。子どもがラクガキに飽きるまで滞在するはずが、親の方が熱中しているようだ。たちまち大きなダンボール板がラクガキで埋まっていく。学生はラクガキを楽しみながらあいさつはするものの、参加者より質問がある場合のみ優しい対応を心がけているようだ。徐々に参加者が増え、昼食をとる間もないほど盛況となった。

2日目 8月18日(金) 快晴

本学と他学の学生がランダムで配置されているが、特に所属校同士で固まって行動している様子はなく、円滑なコミュニケーションが確立されている。

2日目も午前中から親子連れが目立ち、2日連続で参加してくれる人も見受けられる。学生は「え、今日もいらしていただいたのですね。ありがとうございます

ざいます」と感謝の言葉を発している。その後、特に会話を続けなくともお互いに自分のやりたいラクガキを行っている。初めて来場した人がその状況を見て、参加を強要されるような雰囲気ではないためか、躊躇することなくペンを持って座ってくれる。初日と同様に盛況であった。

### 3日目 8月19日(土) 快晴

準備したダンボール板が残り少なくなっている。おそらくラクガキをした部分を切り取って持ち帰ってもらうサービスを積極的に行ってきたのが原因だろう。しかし、ラクガキしたものは宝物であるため、持ち帰れることを子どもに知ってもらうことは表現教育上不可避であると筆者は学生へ説明をし、切り取られて穴の開いたダンボール板も、描ける部分があるようならば再び床に敷いてもらうようお願いをした。

午後になるにつれ室内気温も上昇し、空調機器は作動しているが大変蒸し暑い。そのような状況でも子どもは汗だくになりながらラクガキに没頭している。来場者は昨日以上に増加したが、学生は対応に苦慮することなく活動環境の安定維持に努めていた。

### 4日目 8月20日(日) 快晴

早朝にダンボール板を補充して最終日を迎えた。数日参加している学生は、本日初めて参加する学生に活動の流れを説明している。そしてインクの減ったマジックペンを新品に交換するなどの環境整備を共に行う。

日中は相変わらず蒸し暑く、親は暑すぎてペンを持とうとしないが、ダンボール板の上を占領する子どもはラクガキがにじむほどに汗がしたり落ちても快適な空調を必要としないようだ。ダンボールの隙間を見つけ子どもを誘導することが主な仕事と



なってきた学生も、汗を拭う間もなくその状況を満面の笑みで楽しんでいる。14時に終了する予定だったが大幅に超過してしまった。15時以降にやっと片づけを始めたのだが、4日間通い詰めてくれた親子と一緒に手伝ってくれた。学生とその親子はつい数日前までは見ず知らずだったにも関わらず、数年来の知り合いのような親密ぶりが伺える。

### (3) 結果

初日はお盆休み明けの平日であったが、延べ40組以上の親子連れが参加してくれた。滞在時間は子どもがラクガキに満足するまでがほとんどで、平均20分であった。

2日目は連日参加してくれる親子連れが目立つ。どの組にも共通しているのは、親がラクガキに熱中していると、その横で子どもも同じように楽しんでいるということ。そして、楽画会の段取りを理解して新規参加者を導き、学生を助けてくれていることだ。活動環境は穏やかに活性化しつつ、学生と参加者の相互交流が芽吹いている。そして、昨日より滞在時間が延びているようで、終日にぎわっていた。

3日目は快晴の土曜日ということもあり、大変多くの参加者により「三密回避」に反した状況が終日続いた。明らかにラクガキを行える場所が足りなかったが、学生は慌てることもなく手際よく場所の整備と誘導を行い、目立った混乱は発生しなかった。また、前日同様、すでにラクガキをしている親子が新規参加者の誘導を手助けしてくれたこともあり、学生は短い時間で子どもだけでなく親とも交流を深め、広げているようだ。最終日も参加者多数により子どもの活動範囲が狭く、トラブル発生の危険性は高まっていたが、大博覧会の環境に慣れた学生が円滑な誘導と対応を心がけたために、無事に会期を終了することができた。顔見知りとなった親子の協力が学生を相当助けてくれたようだ。

## 4. まとめ

### (1) 問題意識の払しょく

大博覧会に参加する前は、ボランティア学生の多くが不特定多数の初対面の人との関わり方がわからないという問題を抱いていた。そして筆者は、まずは参加してから臨機応変に対応してみようと推奨した。ファーストコンタクトをどう発すればいいのか、その後の話題継続に自信がないという不安を解消するために、筆者の担当する楽画会ブースでは2つ

の提案をした。

- ①無理に言葉がけをすることはしない。
- ②自らがラクガキを楽しむこと。

ひょっとすると真面目な学生は、話しかけてはいけない、ラクガキをしなければならないと思ったかもしれない。そこで筆者は、初日の午前中はダンボール板の上に腹這いになりラクガキを楽しんだ。しばらくすると学生は各々寝転がって遊んでいた。

### (2) 主体的活動意欲の表出と伝播

対面交流を思うようにできなかった学生へ、筆者が言葉巧みに経験させようとしても無意味だ。それよりもワークショップという特性を学生が素直に受け入れ、楽しむことができれば、それは学生の主体的な活動と言える。主体的な活動を目撃した他者はいちいちそれを説明される必要もなく、興味と意欲を抱けば近づいてくれる。近づく他者がペンを持ってくれば、主体的活動の意欲が伝播した証である。そして伝播を受けた参加者は、新たに近づいてきた他者へとその意欲を広めてくれる。主体的活動意欲をもって動いた者にしか拡散はできない。

### (3) 結論

主体的活動意欲を広める者、受ける者が存在することが拡散条件ではあるが、源流には主体的活動意欲を高めて活動する第一人者が必要である。今回の大博覧会の楽画会における第一人者は学生であり、その役割を果たした結果、拡散し多くの主体的活動を引き出したのである。これは楽画会ブースのみならず、各催事会場でも同様だったと言える。学生が初対面の人とどう接して交流を深めればいいのかわからないという心配は、第一人者となったことで解消され、自ら発した表現意欲の伝播により相互交流が実現した。これは大規模なイベントだったからこそ可能になったわけで、知り合い同士で行っていれば叶うことはなかったのかもしれない。



楽画会を楽しんだ参加者は、それを貴重な思い出として持ち帰ろうとする。なぜならば、主体的活動で生まれた作品だからである。誰もその作品を粗末に扱ったり、いたずらに評価したりすることはできない。

問題意識の解消が果たせた学生の、今後の表現意欲の発展を大いに期待したい。

## 5. おわりに

大規模イベントに学生が参加する時の予期せぬ出来事とは、来場者との交流により社会のあたたかさを実感することである。それは学生を気遣ってくれる優しさなのかもしれないし、子育てに不安を抱える親が学生を頼ろうとする SOS なのかもしれない。これは学生という立場だからこそ味わえるのかもしれないが、現在の学生を取り巻く教育環境を含む社会は、高度機能の発展に依存するあまり、アナログな相互関係に過敏だ。「人の振り見て我が振り直せ」ならぬ、人に自分の振りをさらけ出すことで、極めて人間的な関係構築にどっぷり浸かる時間も必要なのではないか。

註

- 1 小浜逸郎『子どもは親が教育しろ!』草思社 1997, pp.118-119
- 2 愛知県西尾市に本拠を置く社会福祉施設より譲り受けたダンボール板を床へ敷き、マジックペン等で自由にラクガキをする。2015年頃より実施している。

参考文献

- ・福岡龍太「在宅授業に対応する表現教育の可能性 - 造形(表現)指導法Iでの取り組み -」『大学造形美術教育研究』19, 2020

# 「年長児向け造形活動の試み」～造形教室の実践から

東京未来大学 森高光広

## 1. はじめに

2023年度から、幼稚園と保育園で年長児向け造形教室を定期的実践している。前職の大学では幼稚園教諭・保育士養成の造形関係の授業を担当し、研修会講師なども務めてきた。また、顧問を務めたサークルや研究室所属学生とともに、多くの教育現場で造形教室やワークショップも実践している。本年度から筆者だけで年長児向けの造形活動を行い、制作や活動について、試行錯誤を続けている。この実践を通して、得るものも大きかったと考える。本稿では、2023年度の実践から、年長児向けの造形制作やその活動について、実践から再考した援助の留意点や子どもへの具体的な手立てについてまとめ、提言する。

## 2. 問題点について

前職の大学では15年間で様々な教育現場で実践活動を行ってきた。幼稚園、保育園、小学校、中学校での実践や様々な保育士や教員向け研修会講師も務めた。幼・小合同や保・小合同の図画工作授業実践も関東各地で実践した。幼・保専攻課程の学生が研究室に主に在籍していたため、幼稚園や保育園での造形ワークショップ等は主として研究室所属学生が企画・立案や具体的な準備をし、実践の際に助言、指導や支援を行ってきた。将来就く教育現場でも活かせる経験ともなるように、実践当日は学生が主に子どもの前に立ち、主体的に活動が出来るよう配慮もしてきた。(小・中学校での授業実践は、筆者が授業者として行い、例えば後片付けや子どもの作品を感想欄にしまう等の補助的なことを学生に依頼した)

本年度より研究室所属学生がいないため、企画・立案、準備・実践を全て一人で行っている。近郊の幼稚園と近隣の保育園で月2回と月1回継続して実践している。どちらの園も対象は年長児だが、

園環境や園での過去の経験も踏まえた違いや園児の反応の違いもあって、実践を通して改めて学ぶことは多い。昨年度まで幼稚園や保育園等の教育現場で実践する際は、研究室所属学生の卒業研究のテーマに沿った題材を主として行わせていた。学生が自分の考えが現場ではどのように実践できるかを探らせるためである。また、卒業研究を進めるためのデータ収集のねらいもあった。コロナ禍最中の2年間は実践は出来なかったが、昨年度は幼稚園2園、保育園7園で実践した。例えば紙バネ、にじみ、貼り絵等それぞれの個々の学生の卒業研究のテーマを踏まえた、幼・保現場で活用できる題材内容を考えさせ、研究室所属学生が相互に試作した上で検討を重ね、園児に制作活動をさせていた。

本年度は、幼稚園が3月から、保育園は9月から年間を通した造形活動を年長児に継続して一人で行っている。基本的に幼稚園や保育園の現場では行っていない題材内容を開発して実践した。

自分が大学授業時に行っていた題材内容や卒業生が実践した内容以外に、より教育現場に適した題材の開発が出来ないかと考え、試行錯誤を重ねた。その理由として、以下がある。

まず、材料、時間、予算が園事情や時期的なことによっては違いも制約も生ずることである。対象人数や園児のそれまでの造形経験の違いによっては手立てや手順、時間配分も変わることを今まで以上に実感した。様々な試行や材料の研究もしたが、本稿ではどの園にも備えてある色画用紙の活用に絞り、その実践からまとめる。

## 3 2023年度実践から

本年度活動は以下である。

(1) 私立幼稚園で年長児向け放課後造形教室(月2回)

☆企画・準備・運営、実践をした。園長等の補

助も時折入る。内容は全て一任された。参加にあたっては、保護者は園児に確認をとって教室参加を決定している。園児の持ち物は、自分の使用するのりとはさみ、パス類、色ペンである。他の材料、手拭き用雑巾は、こちらで準備し使用させた。

(2) 近隣の社会法人保育園。年長児クラスの造形の時間を担当(月1回)

☆通常の園の活動時間の中で行った。

☆担任と相談の上、企画・準備・運営、実践した。時間内なので担任等の補助も入る。保育園での内容については、担任の意向から予定内容を変更することもあった。例えば、次の月の掲示物に活かせる内容にしてほしい、園であまりしていない工作をしてほしい等の要望を受けて、予定制作を変更や差し替える等である。園児の持ち物は自分ののりとはさみ、パス類、色ペンである。全員の使用する材料、例えばおり紙、セロテープ、手拭き用雑巾等は、保育園に用意可能なものは基本的に園で用意してもらった。ただし、型紙付きの色画用紙等、こちらで準備したものを使用することも度々あった。

保育園、幼稚園での活動実践は当初は戸惑いもあった。幼稚園では、放課後教室ならではの特殊事情もあった。次の習い事のために時間が早まる園児も出た。時折、保護者が参観をして子どもの活動が終わるのを待つこともあった。

どちらの園も欠席者が出る。欠席者には材料を渡し、幼稚園は手順など示した説明の文書も保護者に渡した。保育園は、担任が説明して後から制作させている。

### 3-1 活動の方針について

幼稚園では、3月と4月に数回プレ教室を行い、保護者が参観・確認する場を設けた。事前に園の保護者には、以下の活動方針を示した。

「お子様が楽しく絵を描いたり簡単な工作活動をしたりする場を担当いたします。小学校に入ってから、楽しく意欲を持って図画工作の授業が受けられるように、幼稚園や小学校では扱わない新しい題材を中心に、発想を大切に絵画や簡易な工作に取り組みます。」

基本的に皆同じ作品を完成することを目指すのではなく、個々の園児の発想や個性や主体性を活かす題材内容を考え実施した。例えば、おり紙を自由にはさみで切らせて色画用紙に貼らせてから、まわりに好きな絵を描く等である。

しかし、実施すると個人差が様々あった。はさみで切る速度や何を描くか決める速さ、色の塗り方やのりの付け方など、様々な活動で個人差がみられた。中には一人で黙々と取り組み、小学校低学年かと思わせるレベルの内容の絵を描いたり、こだわって工夫をしたりする園児もいる。なかなか手が進まない園児もいる。制作内容によっては時間がかかる園児も当然いた。

### 3-2 活動の内容について

当初は園児の手先の動きや経験なども把握しなかったため、はさみで紙を切らせたり、のりを使って貼り付けさせたりする、自由に絵を描かせるなどを主とした制作内容となった。その後、少しずつテーマを設けた。例えば、折り紙で各自に蛙に見える形を切る際は、顔だけや手足付き身体までを丁寧に作る等、園児によって様々だった。特に細かい指示は出してはいない。おり紙を蛙に見えるように切って色画用紙に貼らせ、周りに絵を描かせたこの内容は、保護者からも季節にあった内容として好評だったと聞いている。最低限、何を作ろうとしたかが保護者にも伝わるように、題材内容には少しずつ具体性を持たせたり、季節に沿う内容の設定にも心がけた。

簡単な工作も行ったが、全て自作の型紙を使い、園児にもわかるように具体的に出来あがる工夫をした。いつも園児の意欲を高める工夫はしてきた。例えばハロウィンのお化けの制作は絵の具技法でまず色を作り、はさみで切って形にし、不思議な色の混ぜ方を楽しむことを主とした。→不思議な色の混ぜ方を主として楽しませてから、はさみで切って形にした。カボチャの顔など複雑なところは型紙を使用し時間短縮するなどである。

図1の試作、パタパタとりは羽根の動く仕組みはこちらで事前に作り、型紙に沿ってはさみで切ったり、色を塗ったり、目を描いたり、模様付けしたりするところは園児に任せた。型紙通りに正確に切る必要はないことはいつも伝えている。はみだしてもいびつでもよいとした。完成後様々な色の鳥ができあがるととても喜び、その場で羽根を動かして体育館の中を歩き回る姿もあり、個々大切に持ち帰った。

図2は、特殊な紙でカタツムリの殻を半透明で表現し、半立体で制作させた際の試作である。カタツムリや葉等の大きさや形の出来映えは個々に任せた。全員がしっかりその季節らしい作品に仕上げていた。

図3のゆらゆらとりの試作は、紙皿と段ボール状の特殊な紙の活用である。型紙もそれほど複雑にはしていない。仕掛けとしては極めて簡単で4歳児でも制作可能である。型紙通り作れば揺れて首が動く鳥はできる。その上で、青色画用紙を配布して、この鳥が楽しく泳げる湖を考えてみよう、色画用紙を園児が切って各自自由な形の湖を作らせた。園児は三角の湖や丸い湖等、様々な形に切り、石を並べたり魚を泳がせたり、描き加えていた。個々の湖を作り、鳥を置いて遊んだ。

基本的に題材内容を問わず、意欲的に取り組み、制作の中で園児が没頭する時間が必ず出来ていた。

それでも制作時間に個人差があることは毎回ある。日によって個々の取り組みもまちまちであった。いかに飽きさせないで取り組ませるか、題材に魅力があるかどうかはまず決め手と考える。新鮮さも大事である。そのため、園での制作とは全く違う内容であったり、園児の予測がつかない内容を企画するように心がけた。また、なるべく園児の個性が活かせる題材内容となるように工夫した。

例えば図4は簡単なパペットであるが、口の部分の基本構造は押さえつつ、どんな生き物にするかは園児に任せた。園児はウサギや猫の顔にしたり、リボンをつけたりなど、自分の工夫を凝らして楽しく制作が出来ていた。

この制作は計3園(該当園以外に他の保育園でも実施した。)で行った題材だが、どの園の園児も楽しく没等して制作する姿があり、パペットを動かして楽しむ姿もあった。出来た作品を見て歓声をあげる担任の姿まであった。

#### 4 まとめ～成果と課題

この1年間の実践で以下が改めて明らかとなった。

- ・年長児であっても題材内容の工夫で、意欲的に集中して取り組むことが出来る。
- ・初めての題材、年長児が想定していない題材内容は特に意欲が高く、熱心に取り組める。
- ・多少難しいと思われる内容であっても個々への声かけや配慮で制作を進めることか出来る。
- ・複雑な内容でも手順や進め方を丁寧に指示すると、時間はかかっても園児は出来る。
- ・はさみで切り分ける、のりではりつける等の基本的なことは制作を重ねる中で積み重ねていけば、各自スキルアップすることが出来る。
- ・ゼロから自由に発想を生み出すことはなかなか出来ないが、無理のない設定(テーマ)で働きかけると発想や個々の工夫も生み出せる。
- ・ほんの少しでも、動いたりする等の簡単な仕組みの題材は、園児に魅力的で、意欲を持って取り組める。
- ・自分で満足のいく作品が出来ると他の制作作品も気になり、素直に他者の工夫の良さ等も認め受け入れることが出来る。

どちらの園の場合も少なくとも30分以上は制作に没頭して静まりかえって取り組む姿があった。内容が難しいと教えてと複数質問や助けを求める声が出て騒がしくなるが、基本はできあがるまで集中して取り組むことがほとんどである。

その上で改めて課題も明確となった。

例えば、どんなに試作を重ねて準備しても、園児によっては想定外の失敗もある。また、造形活動をする時間や場によって、園児の活動に違いがある

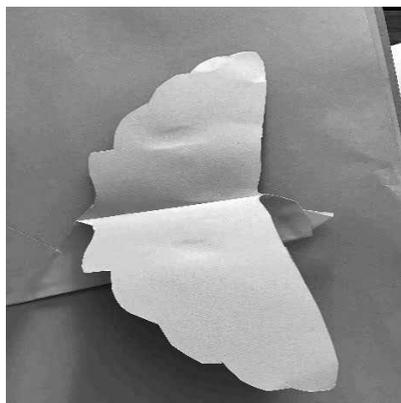


写真1 試作1 パタパタとり(手に持ち遊ぶ)

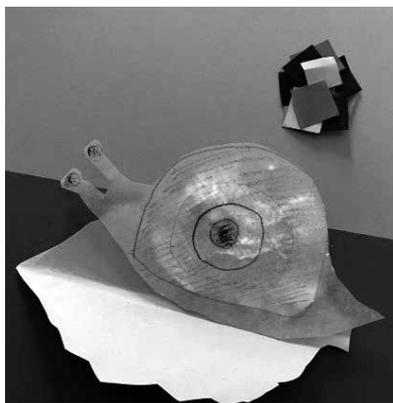


写真2 試作2 かたつむり(葉、花等好きに加える)

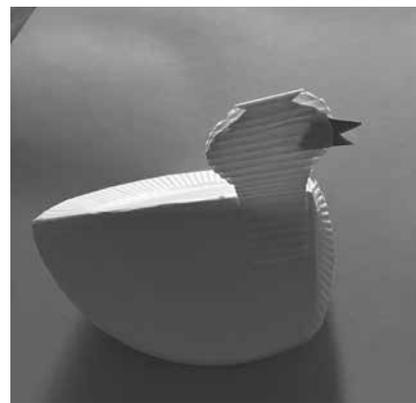


写真3 試作3 ゆらゆらとり(青色画用紙を湖に見立てる)

のも事実である。例えば、保育園の通常の活動時間の中での園児の活動と幼稚園の放課後の造形教室の活動では園児の状況や個々の反応も日によって当然違ってくる。

そう多くはなかったが、同じ題材内容を行った場合も、時間内で制作完了する時とそうではないこともあった。手順の違いや個人差も多いため、児童数の違いにもよると考える。

うまくいかないことは当然あるが、いろいろな場を経験してきた筆者等は最終的に全員完成させることも出来るが、このような柔軟な対応は学生が実習で行う場合や不慣れた初心者にはなかなか厳しい点でもある。その点も踏まえて、試作を重ねることとともに、想定外の失敗はするものであるという観点で材料の予備は常に用意する、指導者は強力なのりや両面テープ、はさみ等の補強や修正可能な準備も必要である。今後の授業ではその点も再度学生に伝えて備えさせていきたい。

一見5歳児には難しそうな内容であっても、どちらの園児も制作に集中して取り組んでいる。「つくりたい」、「やってみよう」という意欲を持たせられるかどうかは大切であり、小学生、中学生、大学生も同様と考える。

学生や初心者が内容を考える際であっても、対象園児にとって少しだけ難しいところも1つはある内容がよりよいと考える。

出来ない園児もいるので、例えば、型紙の切り抜きの部分で園児に難しそうな処は少し切り込みを入れたり、赤で間違えないようなガイドラインや補助線を加えることの必要性は、今回の実践で再度確認できた。焦らせず、取り組ませていくことが肝要である。また、出来たという子どもに明確に次の指示を出せる

ような準備も必要である。例えば、早く型紙を切った子どもには、特定の部分の色を塗ってよい、次の型紙を切っ



写真4 試作4 パクパクパペット試作

てもよい等である。

園児は回を重ねるごとに意欲も増してきていた。こちらの慣れもあると考える。2園が全く同じ内容での展開は数回しかなかったが、その場合、先に取り組んだ実践を踏まえて、手順を変えたり、声かけを増やすだけでも園児の活動がスムーズになったり、失敗がなく全員制作が進めたりもする。授業で学生にはよく言ってはきたが、目の前の子どもにいかにか柔軟に対応するか、スモール・ステップの手立ての大切さや伝え方の精選化は改めて大事であることを実感した。何よりも、実践の場数を重ねることの重要性も踏まえ、今後学生に伝えたいことは、慣れないうちは誰でも思うようにいかないことがあるが、その要因は主としてこちら側にあり、子ども目線を大切にし、それでもだめなところは終わった後にしっかりと検討して次の際の具体的な手立てを考えていくことで今後解消につながるということである。具体的な事例も踏まえて伝えていきたいと考える。

園に行くとき園児は「造形の先生が来た」と声を挙げて出迎える。「今日は何作るの?」と何人も問いかけてくる。保護者からも「子どもがいつも楽しみにしている」、「いろいろな発想を引き出してもらっています」等と終了後に伝えられる。回を重ねるごとに園児個々の個性や性格も明確となり、接し方にも余裕が出てきた。

人数や園での造形経験や指導にもよることは、今回の実践を通してより理解できた。例えば、型紙を切る場合に切る度にゴミ捨てに行くとき、まだ切っていない型紙までもそのまま捨ててしまうこともある。型紙も手順に沿って切らせて一つずつ確認していく等、より細やかな説明の必要性も改めて学べた。

以上のような具体的な知見や園での制作状況を踏まえて、幼・保の養成課程の学生にもより具体的な話も今後出来ると考える。

園児の造形活動の中で学び、そのことを踏まえたよりよい題材内容や養成校の授業内容を今後も探っていききたいと考える。

#### 謝辞

関係園の皆様、参加した園児とその保護者の皆様に深く感謝申し上げます。

# 「幼・保教育現場でも活用できる紙粘土題材の試行」

東京未来大学 森高光広

## 1. はじめに

造形やその活動を支える材料などに関しては、昭和期からすでにあっただりものでも、昨今進化をし、扱いやすくなっている。例えば、粘土材料はどの発達段階の子どもであっても魅力的であり、様々な題材として教育現場で扱われてきた。実際、学校現場（小・中学校）で教員を務めていた際は、土粘土や紙粘土を使用する題材を継続して行ってきた。土粘土を使用した陶芸に関しては成果<sup>1</sup>もあり、具体的な手立てについては過去にまとめたこともある。<sup>2</sup> 大学教員となり、授業でも陶芸や紙粘土による工作の題材として授業で扱ってきた。所属研究室学生の卒業研究をきっかけに、再度紙粘土を活用する題材も自身で試み、開発している。教育現場でよく扱われている業者販売の紙粘土以外にも、100円均一店舗等で扱われている軽量紙粘土にも安価で優れたものがあることも知った。ただ、幼稚園や保育園現場で紙粘土を活用した工作の新しい実践はそれほど多くはない。本稿では、特に幼稚園や保育園等でも活用できる軽量紙粘土活用題材を模索する中、紙粘土の活用の留意点や具体的な手立てをまとめ、紹介する。

## 2. 問題点について

### 2-1. 過去の実践や指導から

22年間の中学校教員時代、主として陶芸の制作を毎年実践してきた。技法練習をしつつ意欲を高めて、土粘土の感触を楽しませ、個々の工夫を大切に制作させてきた。毎年、どの生徒も集中して取り組み、全員が焼成できて家に持ち帰っている。この題材作品は学校の置き忘れが一切なかった。中学生が家族に自身の作品を示し、家に飾ったという報告も多かった。完成後のアンケート調査でも高い満足度がみられた。

国立大学附属小学校の5年間、図画工作の授業でも粘土の題材開発は継続して実践した。6年生や帰国子女学級の児童に陶芸の制作を行い、2年生で油粘土、3年でテラコッタ粘土を扱う授業等も行った。発達段階に即した、意欲を高め工夫できる内容の授業展開ができたと考える。

大学教員となり、小学校・特別支援専攻の学生のみならず、幼・保専攻の学生の授業、研究室所属学生向けの授業でも粘土を活用する題材は扱ってきた。陶芸や紙粘土の工作題材を様々な形で取り上げて学生の学びに役立ててきた。共同制作も含めて、その時々授業では個々こだわりのある制作実践ができたと考える。

以上のように、過去に様々な粘土を材料とし活用できる題材を開発し、実践してきた。

コロナ禍の最中、自宅で制作を余儀なくされた際も、幼・保課程専攻の学生向けの遠隔授業でも紙粘土による制作は大変好評であった。学生は自宅で時間をかけて丁寧に制作しており、個々が工夫した作品の画像を提出できていた。（参照：図1：所属研究室学生の作品である。画像使用の許可は得ている。以下同じ）

以上のように大学で学生は楽しく粘土を活用した制作が出来ているのだが、いざ就職して幼稚園や子ども園、保育園などの教育現場では実際に子どもが紙粘土等の制作実践は難しい現状もある。就職後、大半がまずは未満児の担当となって実践できなかったり、園事情にもよる。卒業後にはなかなか子どもに紙粘土制作の機会がないという声は以前から聞いていた。前述の卒業研究で紙粘土をテーマとした卒業生も昨年度ようやく年長児担当となったが、未だに出来ずにいるとのことである。担当する園児数が多いのも理由としてあげていた。

粘土を扱う題材の良さや紙粘土の材料としての良さは周知のことであるが、なかなか他の教諭や保育

士の理解を得て実際に園児に取り組みさせるのには難しい現場事情もある。大学教員時代に、土粘土を大量に幼稚園に持ち込み、粘土で造形活動を実践した経験はあるが、その際の主任教諭の第一声は「普段できないことができてよかった」であった。附属小学校教員時に他県の附属幼稚園の一室が全て粘土で埋め尽くされた部屋である事例を見た。大変うらやましいことだが、その地域は陶芸で有名で、粘土が手に入りやすい環境でもあった。これは一般の園ではなかなか難しい環境と考える。将来、保育園やこども園、幼稚園の教育現場で働くであろう学生が、就職後園児に実際に活用できる紙粘土題材内容について探っていく必要を感じ、試行錯誤を重ねた。本稿では以下に述べる。

### 3. 実践から

#### 3-1 紙粘土について

紙粘土を活用した制作は、例えば学生が容易にネット情報でいろいろと探ることはできる。ただ、基本的に従来と同じで丸めて塊から形づくるか、芯材を使用した制作が多い。昭和期の紙粘土とは違い、最近は軽量紙粘土が造形でよく使われている。ハンドメイドや趣味の工芸で活用する場合も多く、100円均一店舗などで安価で様々なものが容易に手に入る。ネットでもたやすく購入もできる。軽量紙粘土は、周知の通り、樹脂軽量化材（微小中空樹脂）等がパルプ材や水性の糊等と混ぜあわされて粘土状となっている。軽さに加えて、加工もしやすいが、乾燥後の強度はあまりなく、芯材を使用したり、部分的に補強することも考えられる。小学校などで、芯材に紙パックやペットボトルを使用する例もあるが、必然的に使用する紙粘土の量は増えて大きい作品となる。お面や花瓶は昭和期からよく制作されてきたが、園児に適する題材と言い切れない事例もある。現在の保育園や幼稚園などの教育現場で何を題材内容として紙粘土を活用するかは課題である。ネットで見受ける保育向けの題材内容は、前述のように昭和期と比較してそれほど代わり映えはしていない。最近は、小学校の教科書題材にも見られる、おかしやケーキ、シェイクなどの食べ物関係の制作も多い。ペットボトルや紙パックを芯材としてペン立てやリース、ロケットなどの作品も見ると、目新しさはない。これらも過去の小学校の図画工作の教科書題材等で類似制作も見た記憶があり、小



写真1(上) 研究室所属学生試作例(全て紙粘土で制作)

学生向け題材がヒントとなっているようにも推察できる。

#### 3-2 過去の実践から

紙粘土による制作は大学生の振り返りでも好評だった。しかしながら、保育園や幼稚園などの教育現場では学生のように制作に時間をかけたり、細かな制作をしたりすることはなかなか難しい。そのまま幼・保の教育現場で活用は出来ない内容もある。そのような中、コロナ禍の前年になるが、研究室所属学生が紙粘土をテーマとしたいと希望を出した。試作を重ねさせ実践できそうな事例をいくつか考えさせた。知己の校長のいる小学校で授業実践をする機会があり、学生の考案した題材も1,2年の児童に併せて経験させた。(図2)他の授業内容(共同合同造形活動)を主として実施した後で、短時間で制作させた。児童には好評で、アンケートを採ると満足度は高かった。体育館で低学年2学級が行ったが(筆者の合同造形活動の関係で体育館を使用した。乾燥させる場として確保できる利点もあった)、見学に来た上級生が今度やりたいと担任にねだる姿を複数みた。ただ、小学生の題材としては内容が簡単すぎる点もある。また、幼・保園での実践する場合も、いくつか懸念があった。まず、細かい足の部分の作成と本体へのつなげ方が園児には難しい。乾燥するまで形が崩れやすいため、対象人数が多いと展開も容易ではない。園児の場合、形を作った後でよけいにいじって外れたりすることもある。保存中での破損も懸念される、等である。この学生からは卒業後は就職先では未だに実施できはしないとの報告を本年も受けている。

#### 3-3 試作から

以上も踏まえて、保育・幼稚園などの教育現場で軽量紙粘土の活用が可能な題材を求めて試作を続けた。本年度、保育園や幼稚園で造形教室を担当したこともその理由の一つである。

大学などの授業で学生に制作させる際は、紙粘土制作の楽しさを味わわせることを主目的とし、個々の工夫や追求を第一とした。そのため、以上述べてきたように、そのまま実習先や勤務先の園で実践することは難しい内容も想定していた。

その上で、どのような内容が望ましいか考えた。

- ・まず今回は軽量紙粘土を使用することを条件とした。
- ・次に園事情もあるので、価格を抑えることを優先した。
- ・何より子どもにとって楽しい制作となること、自分なりの工夫が出来ること、そして制作活動だけで終わらずに、遊ぶか飾るかの次の展開もできる内容とした。

予算については、就職した卒業生からも材料にそれほど費用をあてることはなかなか厳しいとの現場事情をよく耳にしている。大学等の授業のように大学にある材料や用具を使えるだけ使うとか、材料は少し高めの価格でもよりよいもので制作する、というのは当然ながらあまり教育現場では現実的ではない。そこで、100円均一店舗で購入できる軽量紙粘土を数人で一袋シェアして使うという設定で試作

を重ねた。

最初に、指人形制作を設定した。

円筒形と球にした紙粘土をつくり、人形制作時に合わせて成形させてみてはどうかと考えた。大まかに形はすぐ出来た。発色もよく、加工もしやすい。大人が制作するには問題はないと考えた。細かい成形をしなければ年長児でも可能ではないかと考え試作をした。(図3)

結果的にこの制作の選択は断念した。

理由としては、乾燥の遅さである。数日後、表面の乾燥は出来ていても、人形に指を入れると中はまだ水分が多く柔らかい。中が柔らかくて固まらない状況は一週間経っても続いた。乾燥させる場にもよるが、ある程度の大きさの塊はなかなか乾燥しづらく、芯材がないと整形しづらいことが改めてわかった。後日、この指人形制作は保育士向け実技研修で行ったが、大人は崩れないように手加減もできて手早く整形ができたが、これを園児に求めるのは少し無理があると思う。研修会参加者はとても楽しく制作が出来たようだが、終了後持ち帰る際には苦勞していた。一日研修であったが、制作後、半日の時間が過ぎても、中はもちろんのこと表面もよく乾いていない状況だった。

次に、まず制作時の粘土の量を減らしてみることにした。図4はよく知られる目玉パペットを紙粘土で制作したものである。一応形とはなるが、年長

児の制作題材内容としては不適切と考えた。やはり乾燥に時間がかかり、いじる間に形が崩れ、出来てすぐに遊ぶことが出来ない点が指人形同様に向いていないのではないかと考えたからである。

何回かの試作後、作って遊ぶものより、作って飾るものがよりよいと考えた。そこで紙皿に薄くした紙粘土を貼り付けて制作することとした。(図5)

試行する中で、以下がわかった。

- ・紙粘土は塊にせず、薄くして使用の方が扱いやすい。
- ・最初の大きな形、細かい部分等は木工ボンドを使用してとめた方がよりよい。

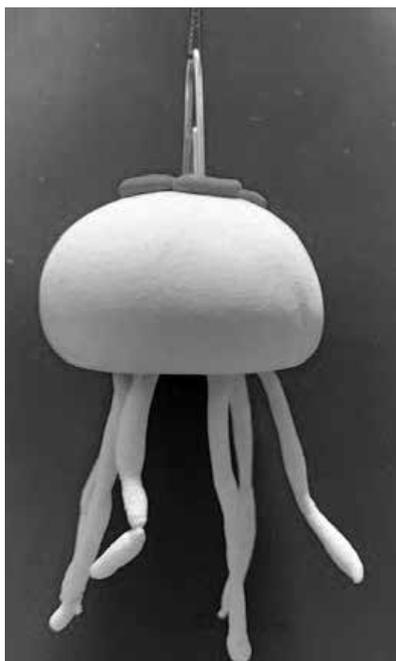


写真2 研究所所属学生試作例(全て紙粘土で制作)



写真3 試作例1(全て軽量紙粘土で制作)

- ・紙皿はぶ厚い方がよい。

この内容なら短時間で制作可能と判断した。手元にあった紙皿を使用したので薄い紙皿の使用となった。制作後、水分を吸って大きく変形してしまった乾燥時に再度形を整えた。

以上を踏まえて何回か試行して、一応題材の形となった。そこで具体的に実践してみることとした。本年度は幼稚園の造形教室を月2回担当していたため、そこで実践できるように準備を進めた。

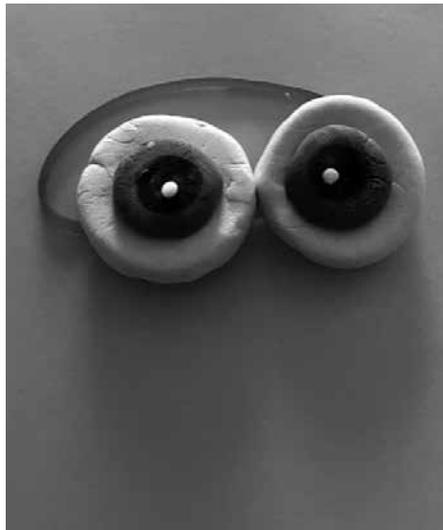


写真4 試作例2(軽量紙粘土で制作、輪ゴム使用)

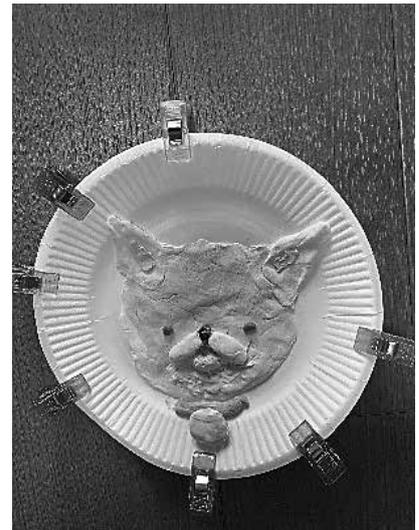


写真5 試作例3(紙皿、軽量紙粘土で制作 見本として使用)

#### 4. まとめ～年長児造形教室での実践から

計11名の園児が実際に制作した。

制作の時間は45分程度である。紙粘土は袋の1/6程度を個々に渡した。配布物は紙皿と軽量紙粘土で、園児は各自のマーカ―を使用した。手拭き雑巾はこちらで用意し、木工用ボンドも用意した。

- ・何を作るか考えさせて、まず自分の使う色紙粘土を制作させた。例えば人間は肌色、鳥は黄色など、園児の考えた色となるようにそれぞれ色を加えて色の紙粘土をつくらせた。着色は園児個々が持つマーカ―を使用した。
- ・事前に紙皿の上に穴を開けて、紐を通して完成後につるして飾れるようにした。

紙粘土経験があるのは2人だけだった。

結果的に、園児は集中して取り組み、全員が完成できた。家で続きをやる、家でもっとやりたいという園児が多く、残りの軽量紙粘土を分けて袋に入れて全員に渡した。

園児は鳥や恐竜、猫などさまざまに制作が出来ていた。中にはコック帽をかぶった男を作る園児もいた。あまり描画の得意でない園児も楽しく制作が出来ていた。

示した見本と全く同じ内容で制作した園児はなく、ただ一人自分なりのゾウを制作した園児はいた。

制作の中で個々のこだわりも伝わる制作だった。

短時間で園児でも制作できる題材となったと考える。

大きな塊などでの粘土の制作活動は、日頃油粘土などで出来てはいると考える。ただ、軽量紙粘土

は水分もあって手触りがよいので感触も違う。ハンドメイドの材料として使われることが多いため、手の小さい園児の細かい制作にも適していると考え。今後手立てや制作のテーマなど、さらに精選化していきたい。

次年度以降も試作を加えて、今回と同様に少なめの粘土で園児が軽量紙粘土で制作が出来る経験をさせる場を設けていき、より題材内容の精選化が出来るようにして養成校の学生に紙粘土題材のよさと具体的な手立てに結びつける視点を伝えたいと考える。

#### 謝辞

研究室所属学生の卒業生、授業に関わった当時の学生の皆様、造形教室の園、園の関係者、対象の園児、その保護者の皆様に深く感謝申し上げます。

#### 註

- 1; 指導作品の関東地区の陶芸コンクールで推奨受賞等
- 2; 森高光広「図画工作科・美術科における「遊び」の視点を重視したウォーミングアップ活動の有効性について—子どもなりの多様な表現を追求させる陶土を使う授業実践を踏まえて—」植草学園大学研究紀要3巻、2011年



## 新しい風船のあそび方「風船ドングリ」の提案と実践

大阪大谷大学 山本将之

### 1. はじめに

風船を用いるあそびは多数存在するが、それらのあそびを大別すると主として2種類に帰結する。一つは運動要素の強いあそびであり、一つは造形要素の強いあそびである。

風船を用いた運動的なあそびとは、例えば「風船バレー」や「風船運び」などが挙げられる。一方、風船を用いた造形的なあそびとは、例えば圧縮袋を風船で満たす「風船クッション」やシートに乗せた風船を弾ませる「風船パラバルーン」などが挙げられる。

上記の風船クッションは素材の弾性を楽しむあそびであり、パラバルーンは風船の動きを楽しむあそ

びである。このように造形的なあそびの中でも、特に感触あそびや簡単な操作あそびとして風船を活用する事例は散見されるが、構成あそび的に風船を活用する実践事例は調査の限り見当たらなかった。

そのため本稿では、風船を構成あそび的に活用するための具体的な保育事例を提案する。

提案する保育事例は「風船ドングリ」である。

風船ドングリとは、風船と紙皿を組み合わせることで、地面の設置面積を増やし、積み木のように重ねることを楽しむあそびである。

風船を紙皿で挟んだ形がドングリに見えることか、この様相やあそび方を総称して「風船ドングリ」と名付けた。

次章では「風船ドングリ」の実践を紹介する。

## 2. 「風船ドングリ」の実践

本章では、まず筆者が実践した際の具体的な情報を箇条書きで記す。

- ・年齢および人数  
4・5歳児クラス 計30人程度
- ・保育時間：1時間程度
- ・ねらい

風船の感触や弾く操作を楽しむ。  
風船の並べ方・重ね方を工夫する。

- ・環境構成  
風船（200個程度）

※風船は膨らませた状態で遊戯室に配置  
風船空気入れ（電動エアポンプ）（1つ）  
うちわ（人数分）

発泡ドングリ（人数の4倍程度）

段ボールの風船プール（4箇所）【写真1】

網のトンネル（1箇所）【写真2】

- ・保育の流れ  
前半（20分程度）

→身体やうちわを用いた風船あそび

後半（30分程度）→身体やうちわを用いた風船あそび、

または風船ドングリ

次に、実践の具体的な様子を記す。

まず事前準備では子どもの期待感を高めることができるよう、部屋を風船で満たした。

導入では、「この部屋でどんなことをしてみたいかな？」と問いかけ、「風船を触りたい、蹴りたい、弾いてみたい」という気持ちを刺激した。子どもと

の会話を経て少しずつ活動への意欲を高めたところで、さらに「今日はうちわも持ってきたよ!」と道具を示し、子どものあそび意欲が十分に高まるよう促した。

風船が割れると、大人でも驚くほどの大きな音が響く。そのためお約束では「風船を割らないように」と促すのではなく、例え割れても冷静さを保つことができるように、あえて風船を割ることによって音の大きさを示した。「風船が割れると大きな音がする」と体験的に知覚することで、活動中の突発的な音にも対応できるように促した。

活動が始まると、まずは手や足やうちわで風船を弾くあそびが盛り上がった。

また、プールを模した段ボールに風船を集めるグループも表れ、段ボールの囲いが風船で満たされると、その中に入って感触を楽しんでいる様子も伺えた【写真1】。

さらに多くの子どもが熱中した仕掛けは「網のトンネル」である。トンネルに入る子どもと、外からトンネルの中に風船を送り込む子どもに分かれ、陣取りのようなゲームが始まったり、トンネル上部にある風船をトンネルの内側から弾こうと試みたりする姿も見られた【写真2】。

そして活動が20分程度経過し、何人かの子どもに飽きが見られ始めたタイミングで発泡ドングリを紹介した。そして「どんなあそび方ができると思う?」と問いかけながらドングリで風船を挟み、重ねる操作を示した。

後半の活動では子どもに2つの選択肢を示した。1つは前半のあそびを継続しても良い、という選択肢であり、1つは風船ドングリにチャレンジしてもよ



写真1 段ボールの風船プール



写真2 網のトンネル

い、という選択肢である。

この結果、半数程度は前半からのあそびを継続し、残りの半数程度が風船ドングリに挑戦した【写真3】。

風船ドングリはバランスを取ることが難しく、慎重に重ねなければすぐに倒れてしまう。この難しさが子どもに丁度良かったのか、「たくさん重ねたい!」と熱中する姿が見られた。また、この適度な難しさゆえに、重ねられた際には喜びを爆発させる姿も見られた【写真4】。

また「重ねる」だけでなく、「並べる」ことを楽しむ姿も見られた。具体的には、段ボールプールの風船を全て出し、段ボールの壁に沿って風船を並べる、というあそびである【写真5】。そして並べるという操作だけでなく、並べた風船ドングリを家具に見立てる姿も見られた。

### 3. 実践の成果

本章では風船ドングリの実践の成果を記す。

まず実践の成果として、環境構成が挙げられる。保育計画の構想時から「風船を見つけた子どもは、弾く動作を試したいだろう」と想定しており、活動の開始時にこの想いを存分に満たす必要があると考えた。そのための環境として網のトンネルや段ボールプールを設置したが、これによりあそびの幅が広

がり、1時間では足りない程の集中力が発揮される結果となった。

このような環境設定のこだわりを併せて、複数のあそびの中のある1つのあそびとして風船ドングリを子どもに提示できた点も、活発な活動に至った一つの要因であると考えられる。

次に、風船を重ねる難しさが子どもにとって丁度良い負荷になった点が挙げられる。

風船ドングリを考案した際の教材研究では、「風船お絵描き」【写真6】というあそびも思案していた。

この活動は風船を並べることで、思い描くモチーフを表現するあそびである。このあそびを筆者自身で試した結果、風船が大きすぎるために細部の表現が難しく、想定した形にならない点に強いストレスを感じた。

一方風船ドングリは「積む」という単純な行為のみを楽しむことができ、併せてバランスの難しさが丁度良いストレス（負荷）になるため、何度も挑戦したくなる気持ちを育むことができると感じた。また、段ボールプールの中に風船ドングリを並べる姿も見られたことから、意図せず「風船お絵描き」のように平面的な広がりを見せる表現にも繋がった。このように、「風船ドングリ」は描く対象を定める表現とは異なり、行為の連続による子どもの試行錯誤の結果が表現として発露するため、これまでの風船



写真3 風船ドングリに挑戦する様子



写真4 木の実を使ったお菓子作り

あそびの実践とは一線を画す造形あそびになったと考える。

その他、部屋を風船で満たした環境構成や、割れる音を事前に示したお約束も、活発な実践を実現した要因の一つであると考え。

#### 4. 課題

最後に、本実践の課題を記す。

空間を広く用いて造形あそびを実践する場合、環境設定や材料の準備に苦慮することが多い。本実践においても同様に、風船に空気を入れる準備に多くの時間を要しており、日々の保育で本稿の実践を実施するには更なる改良が必要になると考える。具体的には風船に空気を入れる過程を子どものあそびとして保育に組み込む、あるいは段ボールプールを桶に変更するなどが考えられる。

今後風船を用いた造形あそびを開発する際には、環境設定に係る保育者の負担軽減についても検討を進めたい。

またあそびの中で風船を用いる際の具体的な課題として、活動中に割れる風船が多かった点が挙げられる。これは準備の段階で風船に空気を入れすぎていることが原因であるため、今後の実践では空気の量を減らし、割れにくい風船を実現するための手立ても検討したい。

#### 5. おわりに

筆者は造形あそびの開発と指導法の考察を主題とする研究を継続しており、これまで新規性の高いあそびを複数提案している。例えば空間にスタイロフォームを配置し、モールを刺すこと・繋げること

を楽しむあそび、あるいは有孔ボードに挿した木ダボにカラー輪ゴムをかけるあそびなどを開発している。

筆者はこれまでの実践経験から、活発な造形あそびを実現するためには、やみくもに材料の種類を増やすのではなく、ねらいに即した2種類程度の材料に限定することが肝要であると感じている。

本実践では「浮く・弾く」という性質から運動あそびに用いることの多い風船素材を、発泡ドングリと組み合わせることで、造形要素の強い構成あそびを実現できたと考える。

今後も、風船を用いた新しい造形あそびを検討すると共に、課題でも記した日々の保育への還元についても模索を続けたい。

#### 謝辞

本研究にあたり、実践の機会を提供いただいた大谷さやまこども園に厚く御礼申し上げます。

なお本研究は JSPS 科研費 JP23K12781 の助成を受けた研究の一環であり、その成果の一部である。



写真5 風船ドングリを並べる様子



写真6 風船の遊び方を研究する様子



## 透明ファイルと光を用いた影絵表現

育英大学 渡辺一洋

### 1. 実践の構想

コロナ禍の中で様々な映像媒体が発展し、新しい映像の世界に入ってきているとも俯瞰できる昨今ではあるが、筆者がこれまで着目してきた影絵の映像表現について、ガラス絵の美的イメージをミックスしつつ、透明ファイルと光を用いた影絵表現として、地域の公民館で約10年間継続してきた異学年のアート活動から考察し、その経過を実践報告する。

筆者は、子どもの小学校での図画工作における技術を基盤としながらも発展的な総合表現として、様々な表現発表の可能性を試みてきたが、影絵の美しさに惹かれ、今日まで表現を探求してきた。本実践は、コロナ禍の中で筆者自身、人工の画像

を多く見てきたが、その中で改めて自然の美しさについて見つめ直したことがきっかけであった。それは、筆者がコロナ禍が始まる直前の冬に訪れた水族館の中で見た自由に泳ぐ海の生き物である。筆者自身も行動制限の中で、その後、しばらく訪れることはなかったが、例えば、小学生の自宅待機やオンライン授業などの中で、本来、自由に動きまわり、柔軟な身体を用いた躍動的な活動ができなかった子ども達の姿に複雑な思いを抱いた中で、少しでも楽しい活動の表現の機会をコロナ禍が落ち着いてきたこの時期に企画できればと考えたことが背景にある。

## 2. 実践を通して

コロナ禍で多く接してきた素材が、会話の時に用いてきた透明のパーテーションであった。どこか心理的な距離感を遮断されるような印象が毎回使用の際にあったのであるが、そんな時に、ふと、ガラス窓にカラーセロハンを貼り、その光を楽しみながら笑っている子どもの姿を回想した。そこで、ノートの下敷きなどに活用されている透明ファイルを用いて、ガラス絵を描くように油性ペンやカラーセロハンで装飾する作品を製作し、影絵に映したらきれいではないかという実践イメージを思い浮かべた。その際、前述したガラス窓の子どもの製作風景のイメージから水族館の海の生き物をテーマとして、衣装製作、ペンギンチームとイルカチームに分けた新聞紙の彫刻製作を実践プログラムに取り入れながら行うこととした。

手順としては、新聞紙の紙彫刻(2グループ)、透明ファイルを用いた海の生き物をイメージした影絵

作品、海の生き物をイメージしたカラービニール袋を用いた衣装製作で実践を構成した。実践の環境設定として、ステージの背景に学生の製作した壁面や新聞紙の彫刻作品を配置した。

## 3. 全体的なまとめ

製作の段階では、学生が製作したサンプル作品などを説明することにより、子どもは製作が進めやすかったと考えられる。光の水族館を表現した中で、クラゲなどの海の生き物が影絵として浮かび上がり、幻想的な世界を演出していた。保育士養成校の学生や小学校の教員を進路とする学生にとっても力量形成の場になった点もあり、今後もさらに、今回のようなテーマや素材についての追試研究を深めていきたいと考えている。



写真1 オブジェ作品のサンプル (学生作品)



写真3 影絵作品の製作説明



写真2 影絵作品の製作の様子



写真4 ファッションショーの様子



## ダンボールで自分のお部屋をデザインする地域の親子アトリエ

育英大学 渡辺 一洋

### 1. はじめに

秋も終わりになる11月になり、冬の気配とともに、毎年開催されている本実践は育メン講座の視点も含め、親子アトリエとして、10年続けてきたロングランの地域連携による公民館企画である。コロナ禍で改めて家庭教育が見直され、父親の育児参加の大切さも着目されているが、父親ならではのものづくりの視点から実践を通して考えるため、素材として、大型ダンボールを用いた製作を行った。

実践に関する参考作品のデザインは、筆者が約20年間に渡り顧問を務めてきた子育て支援サークルの学生が製作しており、「クリスマス、フルーツ、動物」などをテーマとして作品製作を進めた。この

活動を通して、保育者養成における学生の表現に関する力量形成にもつながると考えられるため、課外活動における製作経験を豊かにすることを重視して環境構成への視覚的な効果を検討した。

### 2. 実践の計画と経過

実践計画の段階で開催時期を考慮しながら、公民館担当者と打ち合わせを行った。毎年、異なる製作テーマを設定しているが、11月の開催時期ということから、クリスマスや冬の雪などのテーマが季節として主となっている。また、実践会場においても幼児の緊張感を和らげる学生製作による冬の壁面の展示を行うこととしている。来場した親子は

会場の雰囲気からリラックスして製作している様子が毎回見られている。本実践のテーマにおいては「自分の夢の部屋」というテーマで製作を行った。本実践の作品イメージは、自分の部屋は冬のあたたかい室内や人形、時計を配置したかわいらしい部屋まで様々な構成が考えられ、ダンボールや色画用紙を用いて大型の作品製作を行う内容とした。

また、装飾をしながら、可愛いらしい部屋になるようにイメージして実践計画を行った。実践の経過としても当日、ダンボールを用いた屏風型の独創的な作品が完成した。完成後は、親子による作品発表を行い、インタビューなども取り入れながら、盛り上がりのある実践内容となった。

### 3. 実践の考察

父親と幼児の活動ということからダンボールによる加工を行う活動は、父親ならではの製作に展開でき、比較的大型の作品が多く発想され、完成した。「育メン」という言葉が登場してから10年以上経過して、親子アトリエの空間を見つめてきたが、休日のひとときでも幼児と過ごすかけがえのない時間は、アンケート結果や現場の状況からも多く感じられることである。また、ものづくりという観点からも父親が参加しやすい活動の取り組みもニーズやこれまで継続してきた理由として考えられる。

### 4. おわりに

地域における様々な父子の製作活動はコロナ禍を経て、今回の実践まで途絶えることなく継続することができた。今後は、実践を深めながらも新しい可能性に向かい、試行錯誤を重ねていきたいと考える。

さらに、保育者養成校の学生にとっての力量形成としての地域における造形活動の実践研究の場としても実践内容を検討していきたいと考えている。



写真2 親子による製作の作品

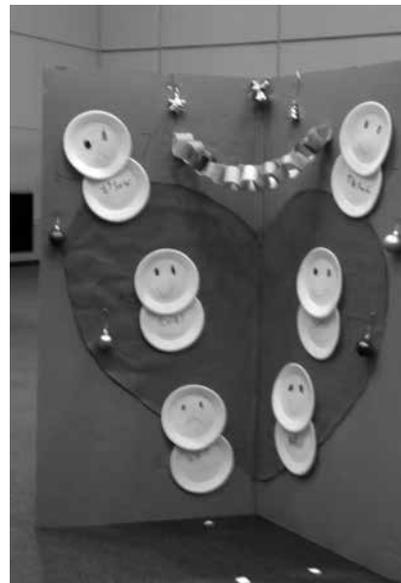


写真3 親子による製作作品



写真4 親子による製作作品



写真1 親子による製作の様子



## イメージを育むごっこ遊びの可能性

帝京科学大学 渡部 晃子

### はじめに

本稿は保育教職セミナーという授業の報告である。この授業は特に足立区と連携して行われる「のびのびプレイデイ」というイベントに向けての準備や取り組みが主な内容となっている。このイベントは毎年地域の未就学児とその保護者が参加して工作や運動遊びなど様々に楽しまれてきた。

一方、筆者はこれまでにイメージの豊かさを幼少期に育むことの重要性について意識してきた。その中でイメージの豊かさをどのように育むのかについて具体的な方法について検討することは授業の課題の一つであった。

そこで子どもの身近なイメージから展開する「ご

っこ遊び」に着目した。さらに豊かなイメージを育むために幼少期において実感を伴うということが必要であろうと仮定し、「つくる」ことから「ごっこ遊び」へと展開する方法で実施することにした。イメージは「つくる」ことによって強化され、遊びや人との関わりによってその深さや広がりを増していくのではないかと。そのように考え、子ども自身がつくることとごっこ遊びが自然につながるように計画した。

もう一つの課題は、保育者養成校において筆者が日頃感じてきたこととして「環境構成の重要性をどのように伝えればよいのか」ということである。幼児教育において環境構成は非常に重要であると認識しているが、環境構成の場合、机上で学ぶより

も経験的に学ぶ方が理解されやすいのではないかとと思われる。

今回の実践では大学1年生であり、環境構成について予備知識が十分ではない状況であった。したがって教員が環境構成について検討しあらかじめ設定しておき、最後にその環境構成について考えるという方法をとった。

## 1. 授業の目的

大学1年生を対象とし子どもの発達や特性を踏まえた活動を計画・実践し、保育の職務に必要な基礎的知識と技術を身につけるようにすることが目標の一つである。実践はゼミ単位の取り組みで行われ身体や音楽、造形を使った遊びをそれぞれのゼミが企画運営する。筆者のゼミでは毎年造形表現に関わる内容を実施しており、今年度は2ゼミ合同で行われた為、総勢12名の学生と取り組んだ。

筆者のゼミでは主に造形表現の基礎的演習を実施するとともに、子どもと触れ合うことをとおして将来の保育者としての資質・能力を高めることを目的としている。

具体的には第一に造形表現の基礎的演習として様々な材料とその違いを把握し、学ぶために「紙を使った題材研究」をテーマとして織り交ぜている。お花紙、折り紙、画用紙、半紙などを用いて様々なものを製作した。

第二に未就学児と親子を対象として親子が触れ合えるように企画・運営し、その為に声かけや環境構成を工夫するようにした。保育の現場は保育者と子どもだけで成り立っているわけではなく、保護者の存在は欠かせない。そうした保育の多層構造を把握することができるように考慮した。

第三に単に子どもと触れ合うということだけではなく、保育者としての視点をもって子どもの発達状況や個性をよく観察しながら主体的に考え、接することを提案し、促していった。

上記の具体的な方法により造形表現の実践を学生が主体的かつ経験的に学ぶことを目指した。

## 2. 概要及び方法

この授業はオムニバス形式で行われており、本稿では特に筆者のゼミで行われた造形表現の実践内容の流れについて中心的に概説する。筆者が担当した授業のうち造形表現の実践に関わる4回分



写真1 虹色チューリップの材料



写真2 虹色チューリップ



写真3 アイスの材料

の授業について概説する。

当初は紙を使った食べ物製作を計画していたが、親子が参加しやすい流れを考え、お店屋さんごっこの商品を子どもが作り、親が買い物に来るという展開を計画することにした。

第1回では全体の活動内容や準備について説明し、各役割分担等を決定した。具体的にはごっこ遊びとして「お店屋さんごっこ」を提案しながら店の内容については学生の意見を募った。4店舗の出店としてそれぞれの時間配分の中で分担をしながら4店舗を順番に受け持った。

第2回から第4回ではブースの看板製作や飾りつけのほかお店の商品のサンプルや下準備の時間として実施した。各店舗は学生の意見から①アイス屋②お花屋③パン屋④果物屋に決定された。そのうち筆者の授業部分では主に①アイス屋と②お花屋の準備、製作に携わった。

第2回ではブースの入り口に飾る看板の製作を行った。様々な紙の特性を理解するためにこの時間ではお花紙を取り上げてその特徴を活かし保育の活動としても楽しむことができるように準備した。

お花紙は計12色用意して色の組み合わせを考え、楽しむことができるようにした。また紙のちぎり方を様々にちぎるようにし、その感触やちぎりやすさを感じてもらった。

ロール紙に洗濯糊を薄めたものを塗布し、上からちぎったお花紙を散らしていった。製作しながら自然と学生は色のバランスや色と色との重なりによってできる色を感じながら、画面を製作していった。また並行して半紙にもちぎったお花紙を散らしておき、虹色の紙を製作した。

大きな画面に複数の学生が協同して製作を行った為、普段の製作とは違う体験になったと思われる。最後に色画用紙でタイトルを切り抜き、貼りつけて仕上げた。

第3回と4回では主にお店で売る商品を準備した。第3回ではアイスの土台となる部分やコーンの部分をあらかじめ製作した。第4回では虹色チューリップ、ムーンフラワー、あじさいの3つの花の一部を製作した。虹色チューリップは第1回で製作した虹色の半紙を用いて作り、ムーンフラワーはアルミカップを使用した。いずれもはさみを用いず、接着材のみで製作できる。短時間で体験ができるように材料・用具を吟味し工夫した。



写真4 洗濯糊を刷毛で塗り、お花紙を散らす



写真5 偶然の色の重なりや美しさを味わう

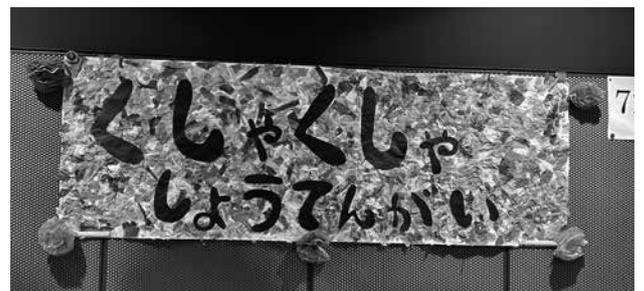


写真6 完成した入口の看板



写真7 つくり方を解説したプリント



写真 8 保護者向けの解説パネル

その他にもお店屋さんごっこで使用する財布や店頭ディスプレイするためのメニューやタグなど細々したものも製作した。

当日のイベントブースは親子 75 組を限定とし、令和 5 年 11 月 18 日(土) 13:30 分~16 時 00 分の間行われた。また、およそ 20 分での入れ替え制であった。

### 3. つくって遊ぶ環境の構成

限られた条件の中で可能な限りつくって遊ぶことを楽しむことができるように環境の構成に気を配った。学生と教員で工夫しながら検討した。

例えば入口と出口の動線、入口から入ってすぐに見える商店街、親子が向き合う席の配置等が挙げられる。また親子のほかに兄弟、姉妹で訪れる参加者も多く、待っている場所に絵本コーナーを設置した。

子どもたちは入口付近でつくりたいものを選び、製作を終えると呼び鈴を鳴らし、保護者は財布をもって店を訪れる。そこから親子の買い物のやり取りが始まる。最初は学生とともにつくることを戸惑っている様子だった子どもたちも出来上がったものを満足そうに手渡していた。

出口付近には後日自宅でもお店屋さんごっこの続きを楽しむために学生が自作したお店の様々な商品のつくり方を書いたプリントを置いた。お店の商品はほとんどが子ども達の身近にあるもので製作できるようにし、親子の遊びが続けられるように配慮した。

### おわりに

ごっこ遊びは本来子どもの身近な生活の中から主体的に取り組まれるものであろう。その点では今回の実践はある種の制約の中で限定的な取り組みではあった。しかし学生が未就学児と交流することによって、また親子の触れ合いを感じ取ることによって保育の広がりや想像することができたのではないかと感じている。

例えば振り返りレポートの中で次のようなコメントが書かれていた。

「どの子どもみんな一生懸命に作ったものを嬉しそうにお母さんやお父さんに見せてすごいね、頑張ったねと言われると照れくさそうにしていたかわいらしいなと思いました。保護者も一緒に参加できる場所も良いと思いました。」  
(原文ママ)

また授業の振り返りの意見交換の中では子どもとの関わり方や子どもの発達や個性の違いについて実感し、意識するようになったという感想が聞かれた。ある程度製作するものが決まっていたにもかかわらず子どもの表現についても想像以上に自由な製作が行われたことにも驚いた様子であった。

環境構成については後日授業の振り返りとともに講義を行い、その理解に努めた。環境構成を体感し、学生自身も考えて行動したことにより机上の講義よりもその意味や意義を把握しやすかったのではないかと感じた。

全体としては子どものイメージを深めるためにつくることとごっこ遊びがつながることによって相互に良い相乗効果が生まれた。当初、子どもたちは保護者から離れることを躊躇する様子が見られたが、自分でつくったものでのごっこ遊びによってものに意味や価値が生まれ、つくり出す喜びを感じている様子であった。

イメージの深まりは想像力や創造力を育むことにつながっている。現代における幼児の造形表現においていかにイメージを高めるかということは重要な課題である。今後もイメージを深めることができる造形表現の活動について模索していきたい。

## 「端材×造形」

### - 木材の魅力、端材の魅力を探求する

目白大学 佐藤牧子・野中梨帆 大和屋株式会社 服部千明・宮崎恵



当日参加した先生方

#### 1. はじめに

造形活動において、素材の1つとして端材が使用される例は多い。そこで、全美協の賛助会員でもある大和屋株式会社とコラボレーションして、「端材×造形」について手を動かしながら考えてみる場を設けた。

大和屋株式会社は、1824年創業の江戸時代から続く「木材」を扱う会社である。2024年2月29日には200周年を迎える大和屋株式会社は、創業以来、自然素材の木にこだわり、現在は保育施設の園舎施工や木の魅力を発信するために子ども向けに木を扱ったワークショップなども行っている。

一方、私(佐藤)は2020年から大和屋株式会社に端材をいただき、子どもたちと行うワークショップ等で端材を活用している。造形素材として端材を扱

う背景には、活動の中心が東京都23区内であることもあり、子どもたちが自力で木材を手に入れる環境が乏しい点があげられる。子どもたちが木材の調達を行うには、ホームセンター等で購入する必要があり、購入に際しては、まず何を作るのかという目的を決めて、計画に基づき無駄が出ないように木材を購入するという流れになるのが常である。結果として、制作の目的や完成形が事前に求められる活動にならざるを得ず、「木」という素材に触れながら、目的が曖昧なままいろいろと試してみるといった活動に発展しにくい現状がある。これらの現状は、子どもに限らず教員養成校の学生や教員にも当てはまる現状ではないかと考えている。

そこで、今回のコラボレーションでは、大和屋株式会社工事部の服部千明氏とともに、改めて木の魅



写真1 イロイロ研究室の名刺

力、造形素材としての端材の魅力を再確認するべく、実験的な要素を含めたワークショップを計画した

## 2. イロイロ研究室（仮）

イロイロ研究室（仮）は、年齢や立場や所属などの枠組を超えて、ともに手を動かしながら素材に向き合い造形活動を行う中で、「人と人の新たな関係性」や「造形活動における新たな視点」の創造を目指すことを目的に、私（佐藤）が試験的に立ち上げたチームである。イロイロ研究室（仮）に所属するメンバーは、年齢や立場や所属に関係なく、全員が研究者としての名刺をもち、活動を行う。現在のメンバー構成は、幼児、小学生、大学生、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校教諭、大学教員（研究者）である。本ワークショップが、イロイロ研究室（仮）の初回の活動となるが、今後もメンバーを募りつつ、チームとしての可能性を模索する予定である。

## 3. ワークショップの概要

### 1) 目的

#### ①造形活動の視点

造形素材としての木の魅力、端材の魅力を探る。

#### ②産学連携の視点

全美協の賛助会員である大和屋株式会社との今後の連携や協働について考える糸口を得る。

2) 日時：2023年12月27日（水）10:00～13:00

3) 場所：大和屋（株）問屋町事務所・物流センター  
埼玉県熊谷市問屋町4-1-7

4) 参加者（16名）の構成

5) 当日の流れ

- ・参加者自己紹介（名刺交換）[10分間]
- ・ワークショップの趣旨説明[5分間]
- ・大和屋株式会社について[5分間]
- ・実験[30分間]

- ・造形活動[90分間]
- ・研究会（意見交換会）[30分間]
- ・おわりの挨拶・記念撮影[10分間]

## 4. 当日の様子

### 1) 参加者自己紹介（名刺交換）

イロイロ研究室（仮）の研究者として、一人一人

内 訳	備 考
大和屋株式会社社員 (2名)	工事部、建材部(各1)
保育園児(1名)	港区の保育園年長児
小学生(6名)	港区、千代田区、足立区の小学生
2年(1)、3年(2)、5年(3)、6年(1)	
大学生(1名)	新宿区の保育者養成校の大学3年生
幼稚園教諭(1名)	練馬区の教諭
小学校教諭(1名)	埼玉県深谷市の教諭
大学教員(4名)	聖徳大学、目白大学(各2)

図1 ワークショップ参加者の構成

が大和屋（株）工事部の服部千明氏と建材部の宮崎恵氏と名刺交換を行った。

### 2) 大和屋株式会社について

大和屋（株）の服部氏より、2024年2月29日に200周年を迎える江戸時代から続く会社であること、かつては、所有している秩父の山で伐採した木を筏（いかだ）にして、荒川の水路を使い熊谷まで運び、柱などに製材していたことなどが説明された。現在は、北欧（スウェーデン、フィンランドなど）から木材を仕入れているということで、住宅で使用されている木材も紹介された。合わせて、最近では本物の木に触れ合う機会が少なくなっているため、本ワークショップを通して、みんなで木に触れながら木について勉強できる場にしたという話があった。

### 3) 実験

加工場に移動して、大和屋（株）の服部氏と宮崎氏より木材の説明と端材の実験が行われた。

#### ■フローリング材の加工の違いについて

はじめに、大和屋で扱っている4種類のフローリングの端材を触り、違いを感じるところから始まっ

た。本物の木でできた一枚板のモノもあれば、一見すると木に見えるが実は木以外の素材に木の模様がプリントされたシールが貼られているモノ、安価なベニヤ板に3ミリくらいにスライスされた質のいい木が貼り合わせられているモノなどがあることを知った。それらは断面を見ると一目瞭然で、本物の木には年輪が刻まれていることも確認できた。木の種類や堆積によって価格が決まるため、このような加工が行われることもわかった。

#### ■実験①木の種類別：加工のしやすさ

次に、杉、メープル（楓の木）、オークの3種類の木を触り比べてみると、色や触り心地や重さの違いを感じることができた。重さの違いは、木に含まれる空気の量が関係しており、軽い木は空気が多く含まれる針葉樹（杉）で、空気が少なく密度の高い広葉樹（メープル、オーク）は重いことを知った。そこで小学2年生が代表して、それらの木に釘を打ち比べる実験を行うと、空気の含有率の高い針葉樹（杉）には簡単に釘が入っていくのに対し、空気量の少ない広葉樹（メープル）には針葉樹（杉）の時よりも強い力が必要となり、広葉樹（オーク）はさらに硬くなかなか釘が入っていかないという結果になったことから、[空気の含有量が多い＝軽い＝柔らかい＝加工しやすい]、[空気の含有量が少ない＝重い＝硬い＝加工しにくい]ということがわかった。

#### ■実験②木の種類別：傷のつきやすさ

続いて、みんなで3種類の木を金槌で打ち付けて凹み傷を付ける実験を行ってみると、釘の時と同様に、[空気の含有量が多い＝軽い＝柔らかい＝加工しやすい＝傷つきやすい]、[空気の含有量が少ない＝重い＝硬い＝加工しにくい＝傷つきにくい]ということを知ることが体感することとなった。あまりに硬くて凹み傷ができない広葉樹（オーク）に躍起になって、力の限りに何度も金槌を振り下ろす子たちも現れ、加工場に大きな音が鳴り響いていたが、その音の大きさとはいくらもほとんど傷がつかない木を見て、改めて木の硬さに圧倒される一幕もあった。

そして、軽くて柔らかい木（杉、レッドパインなど）は傷つきやすいが踏み心地はいいこと、硬くて丈夫



写真2 大和屋

な木（オークなど）は1日立っていると疲れやすいことも教えていただいた。

#### ■実験③木の種類別：水に浮かびやすさ

次に、杉とオークの端材を水に浮かべる実験を行った。この実験においても、空気の含有量が水に沈む量、水に沈ませてから浮き上がるまでの時間に直結していることがわかった。水に浮かぶ端材を沈めようとしても、杉はすぐに浮き上がるのを見て、改めて木に含まれる空気の存在を感じることができた。さらに、同じ木であっても場所によって特性が変わることも教えていただいた。

#### 4) 造形活動

端材を物色するところから、活動は開始した。端材を360度方向から眺めたりする中でイメージを紡ぐ人もいれば、作るものに合わせて端材を探す人もいた。また、面白い形の端材を見つけて周囲の人と面白さやイメージを共有する人もいれば、自分だけのイメージの世界に入り込む人もいたり、人がやっているのを見て、そこからイメージを膨らませる人もいたり、素材へのアプローチは個々に異なっていた。

#### 5) 研究会（意見交換会）

加工場からミーティングルームに戻り、端材のことや木工、図画工作のことなどについて意見交換を行った。小学生の図画工作では、課題に合わせて木

針葉樹（杉、レッドパインなど）  
空気の含有量が多い＝軽い＝柔らかい  
＝加工しやすい＝傷つきやすい＝水に浮きやすい

図2 実験結果まとめ



写真3 木材の説明をする大和屋の服部氏と説明を聞く児童と小学校教諭



写真4 金槌を使い実験をする幼児・児童・大学教員



写真5 実験の説明をする大和屋の宮崎氏と参加者



写真6 端材の浮力を確かめる参加者

工制作キットを使用したり、自由課題では先生が用意した木材を使用したりしているとのことだった。

保育園児からは、ノコギリや金槌を使った木工を行っているとの話が出たので、なぜやらないのか理由を聞いてみると、「危ないと思われているんだと思う」とのことだった。その日も実際に保育園児は、木を切り金槌で釘を打っていたので、「自分でも保育園児には危ないと思うのか?」と尋ねてみると、「危ないとは思わない」とのことだった。その話を受けて、小学生からは「舐められているんじゃない?」という声も上がった。

参加していた幼稚園教諭の園では、ノコギリ、金槌を使った木工が行われているとのことで、事前に行われている具体的な指導内容が共有された。

小学校教諭からは、子どもたちが端材の山から使うモノを探している様子がとても楽しそうに見えたとのことだった。普段学校で使う木工キットは、みんな同じ形のモノが配られるが、今日の材料は木の種類や形など、いろいろな特徴のあるものだったの



写真7 端材を物色する参加者



写真8 切断箇所印を付ける小学2年生。最終的にマクドナルドの店舗が出来上がる。



写真9 端材の凹凸がはまった結果、アイスクリームのような形ができたことから、アイスの屋さんの看板を作ることにした幼児と相談にのる幼稚園教諭

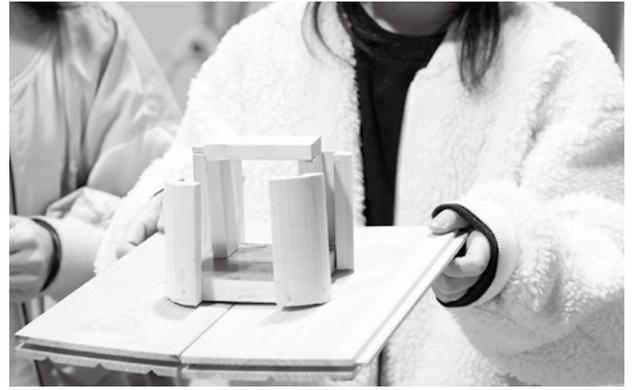


写真13 試行錯誤(写真11・12)を経て、覗くとガリバーの気分が味わえる装置ができあがる。



写真10 実験を受けて、水に浮かぶ端材を検討し「冷凍みかんをお風呂で食べるセット」を作る小学6年生とそれを手伝う服部氏



写真14 船の構造について話をする大学生と教員



写真11 直角にカットされた端材をノコギリで同じ長さに切断して、フローリング端材の四隅にセットしてボンドで接着する小学生5年生



写真15 パチンコ台の構造について話し合う小学3年生と大成先生



写真12 ボンドでの接着がうまくいかず(写真11)、釘を打つ小学5年生。



写真16 様々な端材の形状を利用して「たち入りきんし」の看板を作った小学5年生



写真 17 小学校の実態について話をする小学5年生

で、選ぶ楽しさに加えて、探しながら選りながら、アイデアを思いついていた人もいたように思うとのことだった。

保育者養成校の大学生からは、今日の活動を経て、大学の授業で見た保育の記録映像の中で、子どもが木を使って水に浮かんで動く船を作ろうとしていたことを思い出したとのことだった。映像の中では、船がうまく出来ていなかったが、木の種類を水に浮かびやすい杉材などに換えることで、実現できるのではないかと思ったとのことだった。今日の実験を経て、これまではうまくいかなければ別の素材（牛乳パック、ペットボトルなど）を試そうとしていたかもしれないが、今後は木の種類を換えるという手立てが考えられるようになったと思うとのことだった。その話を受けて、お風呂で冷凍みかんを食べるセットを作った小学生からは、「僕もでっかい船作ったよ!」という声が上がった。また、保育者になった暁には、子どもがやりたいこと（例えば木で船を作りたいなら木で実現する）を叶えられるような保育者になりたいとの話が共有された。

聖徳大学で助手をしている能登谷さんからは、学生が行う木工の授業の様子を見ていて、モノの使い方、どこにどのように力を加えたらよいかなどを理解（経験）しないまま大学生になっている学生が一定数いると感じているという話が上がった。今日の子どもの活動の様子を見てみると、モノをどう使ったらよいかを頭で理解した上で活動しており、改めて、何をどう使ったら何ができるのかがわかっているというのは重要だと思ったとのことだった。

目白大学で助手をしている野中からは、自分自身はあまりアイデアが出るタイプではないが、今日は

実験からインスピレーションを受けて、船を作ってみたいという気持ちになったので、知識を得ることは造形表現・活動の幅を広げることにもつながると実感したとの話があった。

聖徳大学の大成先生（全美協会会長）からは、端材が綺麗であることと溝があることが今回の端材の面白さとして挙げられた。今回使用した端材はとても綺麗だったので、出来上がったモノも綺麗なモノになっており、改めて綺麗な端材を使うと楽しい活動になるという話が出た。また、溝があることの魅力として、適度にはまりそうだったりはまらなさそうだったりするところが面白く、そういったことに触発されて色々考えるきっかけができていないかとのことだった。

大和屋（株）工事部の服部氏からは、1つの方法でうまくいかなかったら、別の方法を見つけ出すことがすごいと感じたとのことだった。以前に行った幼児向けのワークショップでは、普段先生がみんなに同じモノを提供していることから、子どもはそれと同じものでないと作れないと思い込んでいて、それに似たモノを探したり代用したりするという考えに至らない事例があったとのことだった。自由（柔軟な）な発想ができることが、今回のワークショップではすごいと思ったとのことだった。

大和屋（株）宮崎氏からは、まずは今回「木」に興味を持ってもらえたことがとても嬉しかったとのことだった。そして、子どもにはいい意味で制限がないため、ハンマーで木を叩いてみる実験においても、大人であれば遠慮がちに叩いてしまうところを、子どもたちは思いっきり叩いてみるので、その結果をみんなで共有できたことは大きかったとのことだった。

## 6) おわりの挨拶・記念撮影

最後に大和屋（株）から、スウェーデンの伝統的な置物で「幸せを運んでくれる馬」と言われているダーラナホースとトートバックをプレゼントしていただき、ワークショップは無事に終了しました。

## 5. ワークショップを終えて

### 1) 大和屋株式会社（工事部）服部 千明



写真 18 端材の魅力について話をする大成先生

(建材部) 宮崎 恵

今回は、私たちも初めて「実験」というものを取り入れたため、こども達が興味を持ってくれるか、どういう反応をするのか、不安もあったが、カナヅチを力いっぱい振り下ろしたり、水に浮かべた木の沈み具合を観察したり、違いに気づいた時のこども達のキラキラした目が、印象に残っている。

今後のワークショップでも、「木」という一つのカテゴリーでくくってしまうのではなく、樹種によって違いがあり、それぞれに良さがあるということを伝えていける活動をしていきたいと考えている。

## 2) 目白大学 野中 梨帆

私は今年度から目白大学の学科助手として勤務し始めたが、昨年度までの7年間、認定こども園にて保育者として勤務していた。学生時代は美術系のゼミに所属しており、作ることは好きだったが、俗に言う「センス」が求められる製作は苦手意識が強かった。保育現場では、子どもが作ることにに対して苦手意識を持たず、表現の楽しさを感じてほしいと常に考えていた。

今回、ワークショップでは木工活動を行ったが、自身が保育者をしていた頃、保育に木工活動を取り入れたことは無かった。では、何故自分は保育現場で木工活動を取り入れられなかったのだろうか。

私自身が保育者だった頃、好きな遊びの時間に子どもから「木と釘で看板を作りたい。」と言われたことがあるが、代替案を提案し、別の素材で行うよう促した。なぜなら、1人担任だった自分がそこに付きっきりになることは難しく、子どもがケガをすることが容易に予想できた為、そのような対応となった。しかし、現場を離れた今振り返ると、【ケガに対す



写真 19 参加者全員で記念撮影

る行き過ぎた配慮】が子どもの経験の機会を奪っていたのではないかと感じることもある。経験不足の子どもは、危険の予測をすることが難しく、大きなケガにつながりやすい。ケガをさせたくないあまり、経験の機会を奪うと、更に経験不足の子どもを増やすことになるのではないだろうか。

図3は、保育における経験不足に陥る悪循環の図である。先のエピソードを例に図を見ると、まずは子どもたちの主体的な【思い】や、保育者の経験してほしいという【思い】がある。それに対し保育者は、子ども、保護者、保育者自身の現状や、園の方針や環境などの【実態】を考えるだろう。そして次に、取り組む子どもの経験値や、周りの子どもの状況、クラスの様子、ケガの心配や保育者の人数配置、園内の足並み揃え等の【懸念】が生まれる。代替案を提案するなどの打開策がある場合もあるが、それが見つけられなかった時は、望んでいた活動を諦め【回避】せざるを得ない。【経験する機会を失うこと】は子どもたちをさらに経験不足にさせるとい

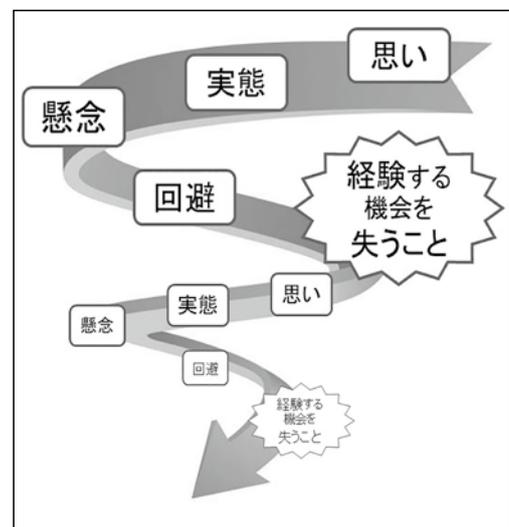


図3 経験不足に陥る悪循環の図

う悪循環を繰り返していると考えられる。又、これは保育者にも当てはまり、子どもへの【思い】はありながらも、【実態】や【懸念】に阻まれ、【回避】の経験を繰り返すことで、保育に対する熱意や意欲の低下につながるのではないだろうか。又、同時に保育者自身の経験不足も招いていると考えられる。ケガに対する予防策は、子どもの安全を保障する上で保育者が必ず考えるべき事柄だと思うが、少しずつでも経験したことがある子を増やしていくことで、活動の幅が広がるのではないかと今回のワークショップを機に考えさせられた。

自分自身が保育者の頃、一人でクラス運営を行っていた時には気付くことができなかったが、振り返ってみると、『自分のキャパシティ』＝『自分の保育のキャパシティ』であると考えた。そしてそれが、子どもの経験に影響を与えてしまっていたのではないだろうか。一方で自身の知識や技術等のキャパシティを広げようと思うと、多くの時間と費用がかかり、日々疲労困憊だった自分には現実的に不可能だったのではないかとも思う。しかし、一度現場を離れ、俯瞰で見ると、保育者のみで賄おうとするのには限界がある。そこで今回のワークショップのように、大和屋さんのような木の専門家に相談したり、木工が趣味の地域の人材を活かしたりと、周りを頼ってみたらできたこともあったかもしれないと考えた。今回のワークショップを終えて、私自身が保育者時代に歯がゆいと感じていた葛藤に気づき、もしかしたら【回避】せずとも子どもや保育者の【思い】を叶えられるかもしれない、といくつかの術を考える良い機会となった。

### 3) 目白大学 佐藤 牧子

日頃、私が行っている子どもの造形ワークショップにおいては、子どもたちが多様な素材と関わるように、端材だけでなく、スポンジやストロー、ビーズや布、針金や紙粘土など、多種多様な素材を取り揃えるように心がけている。しかし、今回のワークショップでは、端材(木)の魅力を探ることが目的だったため、端材以外の素材を持ち込むことはしなかった。常に多様な素材に囲まれて造形活動を行っていることもあり、どこか心もとない気分を抱えたまま、ワークショップは始まった。



写真 20 多様な様相を見せる端材の山

ところが、木の実験が始まるとすぐにその思いはどこかに行ってしまった。これまで「木」という1つのくくりで見ていた「端材」の山には、色・形・重さ・香り・手触り・浮力・強度など、実に多種多様な「木」が存在していることに気付かされた。注目をすればするほど、その違いは大きく見えてくるから不思議である。

今回のワークショップを経て、私はこれまで使ってきた「多様な素材」の概念を修正することにした。これまで、材質の違い(例えば木とプラスチック)という単位で素材を区分していたが、樹種という視点を持つと、樹種の違いを超えて端材を1つの「木」として扱うことは難しい。今回のワークショップは、素材と関わる視点をさらに分化する有意義な時間となったと言える。

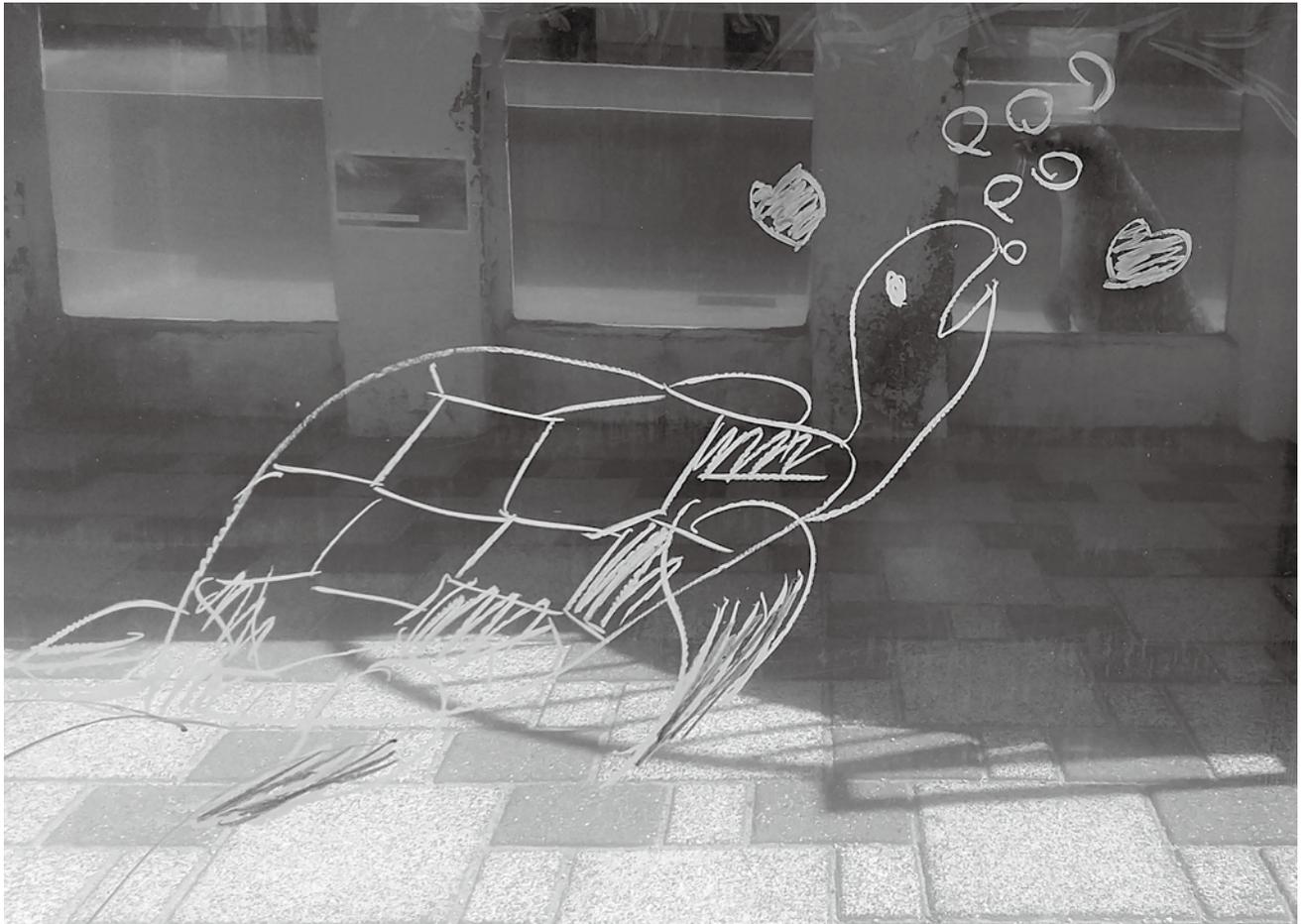
## 6. 今後について

通常、ワークショップには主宰者がいて、参加する人がいるという構図だが、その構図は主宰者が参加者に何かを保障するという構図でもある。しかし今回は、イロイロ研究室(仮)というチームで動き、大和さんの理解にも助けられた結果、活動全体が実験的だったように思う。全美協の賛助会員でもある大和屋株式会社との今後の連携、協働について探ることも今回の目的の1つであったが、もしかしたら、今回のような形で常に実験的なスタンスでつながることができたら、新たな創造につながるのではないかと感じられた。

今後も、大いなる遊び心と実験心をもって、産学連携の活動ができればと考えている。

# 「楽がき」で海の生き物と遊ぶーキットパス in 水族館

中国短期大学 鳥越亜矢



【写真1】 キットパスを使って「アザラシプール」前で描いているとアザラシが寄って来た

## 1. 概要

「描くこと」で水族館という生き物がいる環境にかかわるとどんなことが起きるのか、それを楽しむイベントを企画した。これは岡山県初の企画であり、本稿はその報告である。また、この活動は公益財団法人福武教育文化振興財団の「2023年度 教育文化活動助成」採択プログラム「画材と環境を軸にした地域貢献と創造的教育活動の創出と普及」の一環で実施したものである。

2020年に全美協賛助会員として日本理化学工業株式会社が加盟して以来、筆者は岡山県で保育者を対象にして、



キットパス

キットパスを使った教材研究型の研修を行っている。研修参加者は紙だけではなく、窓ガラスなどの環境に直接描けること、そして描いたものが水拭きすると消えることに驚き、絵画表現の概念が揺さぶられる体験をしている。それは筆者が勤務している短期大学附属のたねのくにこども園においても同様であった。

2022年2月19日に実施した全美協造形教育フォーラムにおいて、同園ではキットパスを使った教材研究型の対面ワークショップを行った。その時、金魚を飼育している水槽に、ある保育教諭が絵を描いていると「金魚が寄ってくるという現象」1) が起きた。筆者はそのことがとても印象に残り、水族館でキットパスを使った「楽がき」ができないかと考えるようになった。そして、岡山県内にある渋川マリン水族館（玉野市立玉野海洋博物館）に企画書をもって打診したところ、快諾を得られた。そこで、筆者を含む学科教員3名で「中国短期大学保育学科チームキットパス」を発足し、「キットパス in 渋川マリン水族館～「楽がき」で、海の生き物と遊ぼう!～」というタイトルのイベントを計画し実施することにした。

渋川マリン水族館は瀬戸内海国立公園内にあり、昭和28年に開館して以来、岡山県民に親しまれている水族館である。大小34個の水槽に瀬戸内海の種を中心とした日本各地の海洋生物約180種、2000点を飼育展示している。同館には、大小さまざまな水槽に海洋生物が展示されている建物を挟み、北と南に2箇所屋外エリアがある。南側の屋外エリアには、机と椅子が設置された「親子ふれあい広場」というスペースや、ヒトデやナマコのいる「ふれあいタイドプール」、そしてウミガメのいる大きな「カメ池」がある。北側の屋外エリアには、「キタオットセイプール」や、ゴマフアザラシが泳ぐ大きな「アザラシプール」がある。2)

## 2. 実施目的および方法

### 1) 実施目的

水族館という環境でキットパスを使って「楽がき」

表1 活動内容と活動場所

実施内容	場所
①水槽への楽がき体験	親子ふれあい広場
②透明下敷きに描いた絵を館内の水槽にかざし、生きものに合わせて動かして遊ぶ体験	親子ふれあい広場 ↓ 館内
③アザラシを見ながら透明ボードに楽がきする体験	アザラシプール
④透明カップとシールとキットパスで「手のひらMy水族館」作り	親子ふれあい広場

することで海の生き物と遊び、生き物と絵画表現のコラボレーションを楽しむ。また、その活動でどんなことが起きるのかを知る。

### 2) 水族館との打ち合わせを経た内容と方法の決定

2度の打ち合わせや下見を行って水族館側の意向を伺い、可能なことと不可能なことを整理し、実施方法、活動内容や場所を確定した(表1)。

水族館側の意向は以下の通りであった。

A イベントに参加しない通常来館者に配慮すること。

B 建物内の水槽に直接描かないこと。

C 館内にはキットパスを持ち込まないこと。

筆者らが一番やりたかったのは館内の水槽に直接描くことだったが、残念ながらそれは意向A Bを理由に断られた。そこで建物内の水槽にOPPフィルムを貼って描くことを提案したが、それも意向Aに反するため、却下された。意向Cの理由は、参加者が館内のどこに描いてしまうかを館として把握しかねるためであった。しかし館長から次の提案を受けた。「親子ふれあい広場」の机に小さな水槽を設置してそれに描くことは可能であること。「アザラシプール」の前に適度な距離を取って透明な衝立を置き、それに描くこと。そして小さな水槽に入れる生き物として、「ふれあいタイドプール」にいるヒトデやナマコのほか、タコや小さな真鯛、クラゲなどが候補として挙げられた。そこで、キットパスを使うのは屋外エリアの「親子ふれあい広場」と「アザラシプール」に限定することにした。そしてあらかじめ「親子ふれあい広場」で透明下敷きに描画し、それを館内に持ち込んで水槽

にかざし、絵と生きものとのコラボレーションが楽しめるようにした。

「落書き」禁止の環境に描く非日常感と、透明なものに描いて消すことのできる画材としての特徴を味わってもらうため、透明下敷きや小さな水槽に描いたものはすべて参加者に消してもらおうように考えた。その一方で成果物を持ち帰ることのできる活動もあるとよいと考え、活動内容に「手のひら My 水族館」づくりを加えることにした(写真2)。これは、キットパスで透明シールに描いておき、それを貼り付けたプラスチックカップを二重にして、内側のカップを回すとくるくると絵が動き、自分だけの手のひらサイズの水族館が出来上がるというものである。

### 写真2 「手のひら My 水族館」

2度目の下見の際には透明アクリル板をはめ込んだ衝立を持参し、「アザラシプール」の前に設置してシミュレーションを行った。その際、ウミガメを描いていると何度もアザラシが寄ってきた。明らかにアザラシがこちらを見ている様子うかがえた。写真1はその時のものである。

イベント参加者としては幼児から小学生くらいの子どもを連れた家族連れを想定した。そのため、活動の在り方に高い自由度を持たせることにした。計画した4つの活動のうち、参加者はどれをしてもよく、行う順番も参加者の自由意思に任せる。企画内容の説明後に、参加者にやりたい内容を聞き、参加者の移動にはボランティア学生が帯同することにした。

なお、日本理化学工業株式会社には会場で配布するキットパスのリーフレットをご協力いただいた。

### 3) 活動や参加者の感想などの記録方法

活動の記録方法としては次のようにした。1つはスマートフォンを使った動画や写真の撮影と、それらをオンライン掲示板アプリ Padlet (以下、Padlet) へ投稿することである。もう1つは、参加者へのヒアリングである。これらは事前にスタッフとして募集したボランティア学生 18 名に練習をさせた。

### 4) 参加者に対する手続きとヒアリング内容

研究の一環として動画や写真の撮影を行うこと、



写真2「手のひら My 水族館」

それらを Padlet へ投稿すること、参加者へのヒアリングを行うこと、これらの内容を研究成果として公開することについて了承を求める同意書を作成し、イベント当日の受付で、同意を求めることにした。なお、同意しない場合でもイベントに参加できるようにした。

ヒアリングシートには、来館者情報と、活動に関する項目を設けた。

来館者情報としては、大人と子どもの人数、どこから来たか、このイベントを知ったきっかけ、グルー

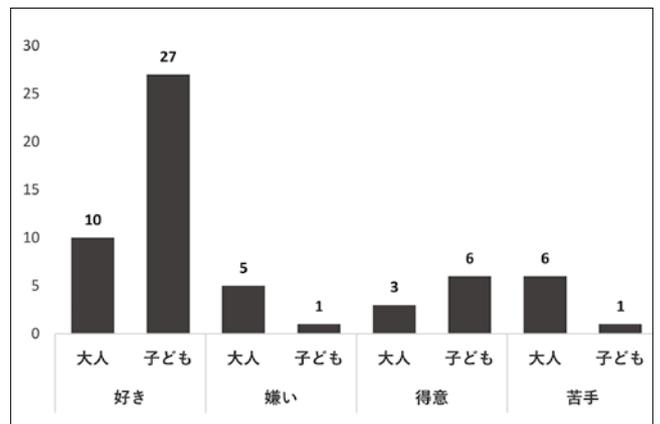


図1 絵を描くのは好き?嫌い?得意?苦手?

プでの来館の場合は家族、友人などの関係性を尋ねる項目を設けた。なお、子どものみ年齢の項目を設けた。

活動に関する項目としては、「絵を描くのは好き？嫌い？得意？苦手？」という描画に対する意識の項目や、キットパスを知っているかどうか、どの活動をしたのか、どんなものを描いたのか、描いた絵を使った生き物とのかかわりの感想、描画素材・環境に対する意識として、紙ではない透明なものや、普通は描かないものに描いた感想、画材の使用感や特徴に対する感想、キットパスを使ってみたい場所について尋ねる項目を設けた。

### 3. 結果

#### 1) 参加の概要

実施日時：2023年9月30日(土)

午前の部／10:00～12:00 12グループ 37名  
参加

後の部／13:30～15:00 12グループ 33名  
参加

会場・共催：渋川マリン水族館(岡山県玉野市)

主催：中国短期大学保育学科チームキットパス

協力：日本理化学工業株式会社

受付の結果、大人33人、子ども37人の合計70人が参加した。しかし、ピアリングなしで帰る参加者が1グループいたため、回収したピアリングシートの合計は23枚である。ここでは23グループ分のピアリングの結果を示す。回収できたピアリングシートでは、大人31人、子ども36人となった。参加した子どもは3歳が15人と一番多く、続いて2歳5人、1歳4人、6歳2人、0歳・7歳・8歳・9歳が1人ずつであった。

来場者がどこから来たかという内訳は次のとおりである。岡山県内では岡山市内が12グループ、玉野市と倉敷市がともに4グループであった。そのほかは香川県の高松市、広島県の福山市、京都府からそれぞれ1グループずつであった。

来場者がこのイベントを知ったきっかけは次のとおりである。「今日来館して」が13グループ、「知人



【写真5】ガラス越しに相手を見ながら描く

や友人からの紹介」が6グループ、当方で作成したチラシが2グループ、新聞に掲載されて知ったのが2グループであった。

参加者のグループの種別については、家族が17グループ、親戚が2グループ、友人が6グループであった。

描画に対する参加者の意識は図1のとおりである。

キットパスを知っているかどうかという項目の結果は、「知らないが」18グループ、「知っている」が5グループであった。知っている理由を複数回答可として尋ねた結果、持っている:1人、使ったことがある:1人、SNSで知った:1人、人から聞いた:2人、24時間テレビ3)で知った:1人であった。

#### 2) 活動の様子

①親子ふれあい広場での水槽への「楽がき体験」の参加グループ数は14。②透明下敷きに描いた絵を館内の水槽にかざして楽しむ体験の参加グループ数は18。③アザラシプール前での描画体験の参加グループ数は11。④「手のひらMy水族館」づくりを体験したグループ数は12であり、どのグループも複数の活動を体験していた。

①親子ふれあい広場での水槽への「楽がき体験」の活動では絵を描くというよりは塗りつぶす子どもが



写真3 塗りつぶされた水槽



写真6 絵をかざすベストポジションを探る子ども



写真4 水拭きしたらヒトデが出てきてこんにちは



写真5 カニのおうち

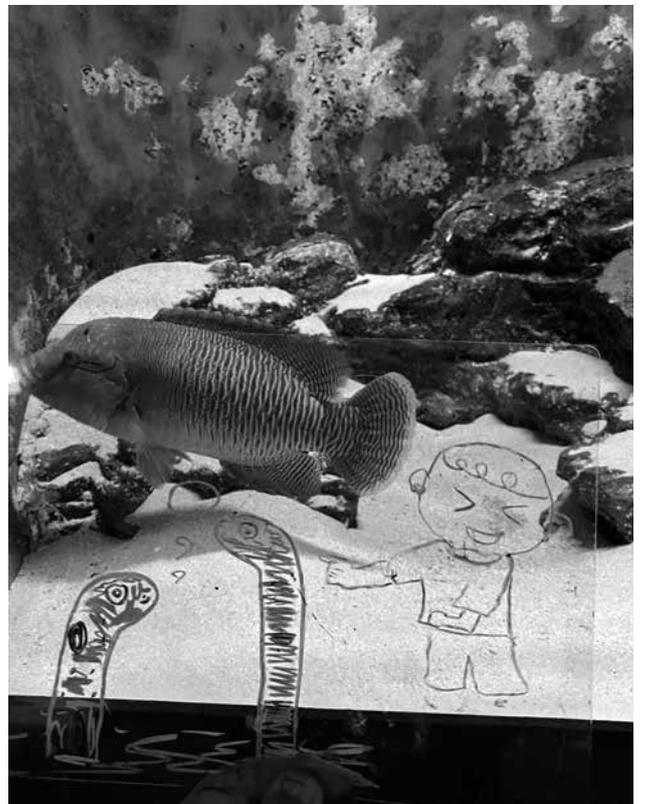


写真7 足が砂に埋まって絶体絶命のピンチ



写真8 アザラシにアザラシ

多かった(写真3)。また、塗りつぶしたところを拭くと、ヒトデが現れ、「こんにちは～」と親子で会話する姿が見られた(写真4)。また、水槽内でじっとしているカニを見て、赤い三角屋根の「カニのおうち」を描く子どもがいた(写真5)。

②透明下敷きに描いた絵を館内の水槽にかざして楽しむ体験では、自分で描いた生き物を水槽に出現させるベストポジションを探る様子が見られた(写真6)。

また、その水槽にはいない海の生き物と人の姿を水槽にかざすことで出現する新たな世界を楽しむ様子が見られた(写真7)。

③アザラシプール前での描画体験では、子どもが塗りたくった面の反対側から、親が仲間のアザラシを線描すると、本物のアザラシが寄ってきた(写真8)。また、描いている人をアザラシの方が見ている瞬間もあった(写真9)。ここは唯一、大きな画面に生き物を見ながら描ける屋外の場所だったので、みんなとても解放感にあふれた様子で楽しんでいた(写真10)。



写真9 アザラシが水中から見ている



写真10 アザラシプールの前で一緒に描いて楽しむ親子

なお、アザラシプールの前に置いていた透明な衝立に貼っていたOPPフィルムをはがして空にかざすと、空に絵が描けたと喜ぶ様子が見られた(写真11)。

④「手のひら My 水族館」づくりでは透明シールに描いてそれを透明カップに貼ったり、直接カップに描いたりする子どもがいた。カップを二重にして内側や外側のカップを回し、それぞれに自分だけの水族館を作って楽しむことを喜んで(写真12、13)。直接カップに描いた子どもの母親は、自分の子どもが水族館でこんなふう生きものと遊べる体験をしたことで、「家ではおえかきをしないけどたくさんかい



写真 11 今度は空に絵がかけた

てくれて良かった。」と感想を述べた。また、アザラシプールの前で透明衝立に貼った OPP フィルムに描いて楽しみ、さらにその OPP フィルムを空にかざして楽しんだ 6 歳の子どもは、この活動では大好きなポケモンを透明カップに描いた。そしてクルクルと透明カップを回してみせ、ポケモンが雲を切り裂いて空を進むようにした。この子どもは、もはや「手のひら My 水族館」ではなく「手のひら My Sky」を作ったのである(写真 14)。そして回しながら、家に帰ってジュースを入れて飲みたいと、嬉しそうにしていた。

### 3) ヒアリングシートに記録された感想の紹介

( ) 内の数字は記述があったシートの枚数を示す。

水族館で「楽がき」をして生きものと遊べる体験では、「初めての体験」(9)、「面白い」(6)、「またやりたい」(5)、「楽しい」(2)、のほかに、「一緒に泳いでいるみたい」「きれいだった」「(水族館に)いつもくるけどいつもとちがう非日常感」などの感想を得た。

描画素材・環境に対する意識がうかがえる感想は次のとおりである。



写真 12 「手のひら My 水族館」づくりを楽しむ様子

紙ではない透明なものや、普通は描かないものに描いた感想を尋ねた結果、「楽しかった」(11)が一番多く、そのほかには「水そうにかけると楽しかった」「お魚がいっぱいかけた」「つるつるしてた。きれいだった。」「いいと思う」「水で落とせるクレヨンと変わらない感じ」という感想を得た。

画材の使用感や特徴に対する感想としては、描きやすさに関する内容(8)や、柔らかさや筆圧がなくてもかける点に言及した内容(3)のほか、「よかった」「いいと思う」「普通のクレヨンと変わりなく、使いやすかったです。」というものがあつた。キットパスが水で消えることについて尋ねたところ、「すごい・びっくり」(4)、「良い」(2)のほか、「ありがたい(らくがきがが多いから)」「便利」「水彩のようにさまざまな使い道があるのがいい。」「キレイに消えて楽しい。(子どもが)「一緒にケシケシ(キュッキュッ)しようね」と言っていた。」という感想が得られた。

キットパスを使ってみよう場所について尋ねた結果では、お風呂(5)、窓・ガラス(4)があつた。そのほかには爪・顔などの体(2)やテーブル(2)紙コップ(1)、やってみたいこととして、手形スタンプ(2)、お手紙(1)という回答があつた。

## 4. 考察

ガラスやアクリル、プラスチックなど、紙外の素材、特に透明な素材(場所)に描けるうえ、水拭きで消えたり、水を加えると水彩絵の具のように使えたりす



写真13 完成した「手のひら My 水族館」

るといふキットパスの特徴を生かした活動では、強い非日常感を伴うことが、イベント参加者の様子やヒアリングで得られた感想から明らかになった。特に今回は水族館という透明な水槽の中に生き物がいる環境である。普通であれば描いてはいけない場所に描く活動で、しかも描く行為で生き物と遊ぶ活動は、参加者にとって初めての体験である。キットパスという素材と水族館という環境のもたらす相乗効果により、参加者が感じた非日常感はとても強いものであったことが推察される。

ここで描画活動に着目して考察した結果を述べる。

3歳以下の子どもの参加が多く、なぐりがきの段階にいる子どもが多かった。特に親子ふれあい広場では写真3のように水槽を色で塗りつぶす活動が多く見られた。しかし、写真5のように、水槽の中でじっとしているカニを見て描かれたおうちからは、生き物に対する子どものやさしさを感じる事ができた。

透明下敷きに描いた絵を水槽にかざす活動では、参加者は下敷きに魚などの水槽にいる仲間を描いたり、自分を描いたり、街を描いたりして館内に持ち込んでかざしていた。この活動では水槽にないもの、あるいは絵にないものが重なり合うことによって、新しい世界やストーリーが出現する面白さを体験できたといえる。

屋外でアザラシを見ながら大きなスペースに描く活



写真14 「手のひら My 水族館」から「手のひら My Sky」へ

動では、衝立の両側から描くこともできたため、写真8のような親子の合作にアザラシが加わる楽しさが味わえた。また、描いた後で衝立に貼ったOPPフィルムを外して他の場所や物にかざすことにより、まったく違う絵に生まれ変わることを体感できたといえる。

イベント参加のお土産も参加者に作ってもらおうと企画した「手のひら My 水族館」では、コップを二重にして動かす仕組みを面白がりながら、年齢に関係なく作る様子が見られた。形あるものを描くだけでなく、なぐりがきが二重になって変化するさまも美しかった。また、参加者自身がこの仕組みに創作イメージをのせて新たな「手のひら My ○○」を生み出していた。

活動後のヒアリングでは、水槽に描いたり絵を水槽にかざしたりすることで生き物と一緒に泳いでいる感覚になったことや、キットパスを使って描く行為で環境にかかわることで、いつも来ている水族館が非日常的空間になったことを楽しんでいることが分かった。またキットパスの特徴については、大人も子どもも「消える」ことに驚き、凄いと感じた一方で、

大人は特に「消える」ありがたさや便利さを実感していた。しかし、「消す」楽しさを子どもとともに味わう良さを感じている大人もいた。

## 5. まとめと課題

参加者は年齢に関係なくキットパスの特徴を楽しく理解し、描く楽しさや活動で生まれる非日常的な状況や空間を堪能していた。

水族館という生き物がいる環境に「描くこと」で起きたことは、透明素材に描いた絵と生き物のいる空間が重なることにより、一緒になって泳いでいる感覚になったり、そこに新たなストーリーのある世界が出現する面白さを堪能したりするなどの、静止している絵と動く生き物との様々なコラボレーションであった。

こうした創造的なコラボレーションのほかに、活動中には親子や他者との様々なコミュニケーションが起きていた。それは笑顔やまなざし、共同注視といった非言語コミュニケーションや、「みて、みて」「すごい」などの会話である。会場はこうしたコミュニケーションで満ちあふれていたのである。

したがって今回の活動は水族館という環境の下、キットパスという画材を使い、活発で豊かなコミュニケーションも楽しみながら、参加者自らが画材と環境を軸にした様々な創造的活動を創出していたといえる。

一方で、反省点が2つある。

1つ目は、水族館側と主催者側の間に認識の違いがあったことである。館長との打ち合わせを通じ、屋内の水槽には直接描くことはできないが、屋外の親子ふれあい広場に設置した小さな水槽には直接描いてよいと筆者は認識して活動を実施した。ところが水族館側としてはそうではなかったのである。水槽に描く様子を見た館長からイベント中に次の内容を伺った。それは、この種のイベントをすると勝手に館内で描画材を使う不届きな来館者が出る危険性があるというものだった。筆者は館長に認識の違いを詫言、午後からは小さな水槽にもOPPフィルムを貼って対応した。

2つ目は、ヒアリングと記録の難しさである。思

いのほか活動参加者へのアテンドに手を取られてしまい、落ち着いた状況でのヒアリングや、写真や動画の撮影が十分できなかつた点である。ヒアリングではなく、参加者にアンケートフォームを送って体験の感想などを回答してもらう方法をとったほうがよかつたかもしれないと、反省している。

しかし、今回の結果や反省点を踏まえ、今後も様々な場所で画材の特徴と環境の相乗効果による創造活動の創出が期待できる活動や研修を実施して、画材や活動の普及を行いたいと考えている。

註

1) 大成哲雄・佐藤牧子・鳥越亜矢 (2023) 「2021年度 全美協造形教育フォーラム 報告」,『大学造形美術教育研究』,pp.10-11

2) 渋川マリン水族館に関する情報については以下を参照のこと。 <https://www.city.tamano.lg.jp/site/kaihaku/>

2024年1月11日取得。

3) 2023年8月26日に、24時間テレビ 愛は地球を救う(日本テレビ)のスペシャルドラマ「虹色のチョーク 知的障がい者と歩んだ町工場のキセキ」にて、日本理化学工業株式会社の経営理念と障がい者雇用の実態がノンフィクション小説をもとにドラマ化され、キットパスのことが取り上げられた。

謝辞

今回の企画に快諾をいただき、水族館を会場としてご提供いただいた渋川マリン水族館(玉野市立玉野海洋博物館)館長 岡秀彦様、並びに職員の皆様に深謝いたします。

## 全国大学造形美術教育教員養成協議会規約

本協議会は、全国大学造形美術教育教員養成協議会と称する。

本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。

本協議会は、前条の目的を達するために次の事業を行う。

1. 保育所、幼稚園、こども園から高等学校までの造形美術教育の、教員、保育士養成に関する連絡、協議、研究の交流。
2. その他、協議会の目的達成に必要な事業。

本協議会は、造形美術教育に関わる、教員、保育士養成課程の認定を受けている大学、短期大学の教員を以って組織する。

本協議会に下記の役員を置く。

1. 会長 1 名、副会長 2 名、委員若干名、常任委員若干名、監事 2 名。
2. 役員は次の任務を分掌する。
  - (1) 会長は本協議会を代表し会務を総理する。また会議を招集する。
  - (2) 副会長は会長に事故がある場合にその職務を代行する。
  - (3) 委員は役員会において本協議会の運営及び事業の起案について協議し執行することができる。
  - (4) 常任委員は本協議会の運営及び事業について起案することができる。
  - (5) 監事は本協議会の会計を監査する。

役員は総会において選出され、任期は 2 年間とする。但し、再任は妨げない。

1. 会長及び副会長は役員会で委員の中から選出される。
2. 常任委員は会長が任命し、役員会で承認される。

役員員の任命および解任は総会の出席者の過半数をもって決議される。

総会は、本協議会委員の選出、運営及び事業の承認をし、また、本協議会に関わる事案の協議を行う。

本協議会に関わる案件については総会で決議する。

総会は研究協議会とともに年 1 回開催し、会長がこれを召集する。

会長の下に事務局を置く。

本協議会の会費は、会費及び寄付金による。会費は年額 4000 円とする。

1. 教員の所属する大学、短期大学は専任、非常勤にかかわらず、会費を納入しなければならない。
2. 会費は教員の所属する大学、及び短期大学 1 校で一口とし、複数の教員が所属する場合も同様とする。(機関加盟) 但し、複数の学部それぞれ専任が配置され異なる免許を出す場合はこの限りでは無い。

本協議会は運営の為、別に細則を定める。

本協議会の事業年度は当該年度の 4 月 1 日から 3 月 31 日迄とする。

この規約は、平成 26 年 4 月 1 日から発効する。

## 全国大学造形美術教育行員養成協議会賛助会員 内規

### (目的)

第1条 この規約は、本協議会規約第4条により設置する賛助会員制度の運営等について必要な事項を定め、これをもって外部関係者の本協議会に対する協力と理解を高めることにより、本協議会と協働して美術教育の振興を進めていくことを目的とする。

### (加盟資格)

第2条 賛助会員の資格を有するのは、本協議会の目的と事業内容に関心を持ち賛同するとともに、本協議会の事業の円滑な実施に協力しようとする団体及び企業とする。

### (賛助会員に対する事業)

第3条 本協議会は、第1条の目的を達成するため、賛助会員に対し、次の事業を行う。

- (1) 本協議会が作成又は発行する会員名簿を含む資料の提供
- (2) 本協議会又は会員との協働による美術教育の振興を進める活動
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

### (賛助会員が実行可能な事業)

第4条 賛助会員は第1条の目的を達成するため、以下のことを行うことができる。

- (1) 本協議会又は会員と協働して美術教育の振興を進める活動。
- (2) 本協議会又は会員に対し、教材や製品などの紹介を行うことができる。
  - ① 年数回発行される会報発送時に A4 用紙 1 枚程度にまとめた情報を会員に送ることができる。
  - ② 年 1 回発行の研究誌に通常の 5 割の費用で 1 頁分の広告掲載ができる。
  - ③ メーリングリスト担当者と連携を取りながら、毎月発行するメールマガジンに広告掲載やリンクを張ることができる。
  - ④ 企画者と協議のうえ、造形教育フォーラム等の全美協が主宰するイベントに参加できる。
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

### (加盟)

第5条 賛助会員たる資格を有する団体及び企業は、あらかじめ加盟申込書を会長に提出した後、本協議会の承諾を得るものとする。

2. 前項の諾否は、役員会において決する。

### (会費)

第6条 賛助会員は、年会費を納入するものとする。

2. 年会費は 30,000 円とする。

### (脱退)

第7条 賛助会員が脱退しようとするときは、あらかじめ本協議会に届け出て脱退するものとする。

### (除名)

第8条 本協議会は、次の各号のいずれかに該当する賛助会員を除名することができる。

- (1) 本協議会の事業を妨げ又は妨げようとした賛助会員
- (2) 会費の納入を怠った賛助会員
- (3) 故意又は重大な過失により、本協議会の信用を失わせるような行為をした賛助会員
- (4) 犯罪その他の信用を失う行為をした賛助会員

### (その他)

第9条 賛助会員について本規約に定めのない事項であって必要な事項は、役員会で決定する。

付則 この規約は、令和2年4月1日から施行する。

全国大学造形美術教育  
教員養成協議会規約等

ていく。さらに、個人と社会との関係に言葉をおきかえると「個人の体験から生まれた『知識』は他者に共感されて(伝わることを通して)社会で通用する概念的な知識へと高まっていく」となり、社会において造形の言葉を通じた「コミュニケーションを成立させていく事になる。

「造形実験」ではこのように美術の「知識」について書いている。さらに続けて、

このような個人の体験に基づく知識については認知心理学的見地からレベッカ・フィンチャー・キーファー(Rebecca Fincher-Kiefer)は『知識は身体からできてくる』(新曜社2021)において「身体化された知識は、概念知識の表象が身体に依存することを意味する」と述べ、「認知は特定の個人の形質と生理機能に合わせて調整された知覚・運動処理から生じる。このような考え方からすれば、自分自身の身体や感情に特有の特徴や属性が、感覚情報を獲得し使用する能力を決定づけ、感覚情報に意味を与える・知識に変えるのである。」と、知識は一人一人の身体特性に基づいた経験に依拠するものだとしている。つまり美術の「知識」は身体と共にある感性や想像力と切り離せない個性を伴った「知識」となるのである。

感覚情報の意味付けについて渡邊淳也は『情報を生み出す触覚の知性』(株式会社化学同人2014)の中で情報工学の視点から「記号接地」について説明している。記号とは言語を指しており、その記号(言葉)が実感を伴った理解、すなわち「接地」することの重要性について次のように述べている。「接地」とは、地に足が着く。地に足がつかずふわふわしている。というような

意味として理解できる)。

「そして、「言語記号の意味を『自分事』として理解するためには、言語記号自体を学習するとともに、言語記号の指し示すものを自身の体験に接地すること(記号接地)が必要となります。」と述べ、さらに「記号接地問題は記号あふれる現代に生きる私たちの情報認識にとっても大きな問題となります。普段、私たちが使用している記号は、全て自身の感覚によって接地されたものだといえるでしょうか。むしろ、接地しない状態で使用している記号も多いのではないのでしょうか。」と、本質的な理解を伴った言葉のリアリティ、即ち意味の獲得を「触知性」という身体との接続で問っている。体験を通して学ぶ美術ではこのような知識の習得における課題を、人工知能の進化が激しい現代だからこそ、自身を取り巻く外界を理解する「知識」として、そして「知識」を実感的に捉えるという人間でしかない強みとして再確認していく必要があるのではないだろうか。

認知心理学から美術教育を捉えた視点はこれからも美術の必要性について重要な視座を与えてくれるだろうと期待している。美術の学びは日常の意識の中にあると思うのである。

アメリカの教育学者であるエリオット・W・アイズナーは芸術教育の果たす役割について「芸術教育の最大の価値は、諸芸術が、人々に外界を理解させるというユニークな貢献にある」と述べ、美的な体験をその根拠としている。

美術の「知識」は日常の意識を豊かにするための知識となると思うのである。

今日の社会では、近代に生まれた学校というシステムで効率よく学びを定着させていく構造がまだ必要であると思うが、一方で、我々美術に関わる教員は学校という校種に囚われることなく、常に人の生涯を見通した中で目の前の子どもたちに接していく必要があるだろう。その為にも異なる校種において何が行われているかを知る必要がある。その上で、学校教育を人の生涯教育の一部として位置づけ、携わる教育において個に応じた個別最適な学びを提供する必要があるだろう。

特に乳幼児での触覚体験、身体感覚の体得は学びの原点になる。そしてその身体を通じた学びは死ぬまで美術の学びを更新し続ける手段になっていくのである。

人工知能が更なる発展をしていくだろうこれからの時代、人間が人間である優位性を持ち続けるためには、身体を通しての学びの重要性がさらに注目されていく必要があるだろう。

あらためて美術の学びは、それぞれの発達段階で切り分けることができず、乳幼児から大人まで、さらには死ぬまで不断の学びとして続いていると意識を強くしなければならぬ。

未完の原稿を引用した我田引水の品のないエッセイで申し訳ないが、本誌のレイアウトをしていたら、自分でも何か書いておきたくなってしまった。そこで近ごろ気になっている美術の知識について、現在停戦中の文章を取り上げてみた。

# 美術の知識とは

武蔵野美術大学 三澤一実



現在「造形実験」という本の執筆に取り組んでいる。予定ではすでに出版されているはずなのだが、あちらから、こちらからと、解決を迫られる用件が続き、ついつい執筆が後回しになってしまふ。原因は自分にあることも分かっている。きつぱりと断れば自分の時間がつくれるのだが、いざ時間に余白が生まれると、余白に何かを描きたくなるのが人間の性で、時間がなくなるのが分かっていても「できそうだな」と、悪魔のささやきが耳元で聞こえ、安請け合いや、場合によっては断れずに頭を縦に振ったり、時には自ら仕事を入れてしまうのである。単発の仕事なら良いのだが、継続的に続く仕事や、毎年訪れる季節労働は新たな年を迎える毎に垢のように蓄積し、気づいたら身動きがとれない雪だるま状態になっている。そうなったら、もう死んだふりをするしかない。そのような状態の中、遅々と進まない原稿の一部を借りて書こうと思う。

それは、美術の知識の意味を人に伝える難しさである。学校教育は学習指導要領によって学習の内容が規

定されているが、今回全教科を通して整理された三つの資質・能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」）によって、今まで曖昧だった美術における知識の意味の解釈が定まった。そして、「共通事項」という、表現及び鑑賞の双方に共通する造形的な視点と知識として位置づけられた。

美術を専門的に教えている我々はこの美術の知識についての解釈は理解できるが、これを市井の皆さんに伝えるにはなかなか困難である。子どもたちには授業を通して、造形体験をもとに実感的に伝えることはできるのだが、体験を通さずに言葉だけで伝えるのはなかなか難しい。そして、伝わったのではないかと思っ

ていても、それが深い理解になっているかどうかは甚だ疑わしい。

この美術の知識問題は、平成二九年版学習指導要領によって示された、美術の「知識」という新たな（いままで曖昧だった）概念から生まれた問題である。

もしかしたら、この美術の「知識」という概念は、今まで言語化できずに、「感性」とか「情操」などの言葉借りて、美術の学びを正当化しようとしてきた私たちに、新たな説得力を与えてくれる言葉になっていくかも知れないのである。私はその可能性に大いに期待しているのである。

この「共通事項」であるが美術の知識として位置づけられている。ここでは前章でも触れた美術の「知識」の捉え方について、私たちが一般的に日常で使う知識と意味が若干異なることを改めて考えてみたい。

私たちが日常的に使っている知識という言葉は、言

語情報や言語化された概念、すなわち全ての人が共有できる固定された意味を持つ言葉（記号）として扱われることが多い。ところが美術では個人の体験によって生まれた感情が、その場に存在する色彩や形、光や質感などの造形的な視点と結びつき複合的に記憶された、「その感じ」を「知識」として扱っている。例えば新緑の森を歩いたときに感じた爽やかさは、「新緑の緑」と「爽やか」が結びつき、新緑の緑色は爽やかさを感じさせる働きがあるという「知識」になっていく。そして、その習得された「知識」は表現活動や鑑賞活動において既知の「知識」として活用され、爽やかな感じを伝える視覚的な造形の言葉として、新緑の風景を描くときに活用されたり、そのような色彩の絵画を見たときにその知識が発動され作品のイメージがつけられたりする。

このように身体感覚を通して身についた（身体化された）「知識」はその人の個別的な体験に基づき形成されていく。よって他人と比較した際、似たような傾向を示したり、あるいは全く異なる意味を持つたりすることもある。つまり人によって必ずしも同じではない。

中央教育審議会などではこの身体を通して得た知識を「事象的知識」として呼び、「事象的知識は探究の過程が繰り返され、連続していく中で、何度も活用され発揮されていくことで、体系化され生きて働く概念的な知識へと高まっていく」と述べている。この文章を美術の「知識」に当てはめて考えてみると次のような言い方ができよう。「個人の内面では、美的な体験を重ねるたびに『知識』の意味する内容が洗練され深みと広がりが増し、イメージを伴う概念的な知識へと高まっ

## ■ 研究誌『大学造形美術教育研究』投稿規定

### 1. 投稿資格

全国大学造形美術教育教員養成協議会加盟校に所属し、年会費が納入済みであること。

### 2. 投稿内容（分類）

指名論文（造形教育フォーラム報告）と投稿レポートによって構成され、大学における造形美術教育に関わる内容であり、研究ノートと実践報告、エッセーに分ける。

- A. 研究ノート：教育研究に関する内容で4頁にまとめること。
- B. 実践報告：教育実践の内容で2頁または4頁にまとめること。
- C. エッセー：造形美術教育に関わる内容で2頁または4頁にまとめること。

### 3. 投稿条件（件数）

会員の同一号に関する投稿件数は、単著・共著、またA・B・Cを問わず一人2本までとする。

※ 詳しくは、ホームページをご参照ください。<https://www.zenbikyo.com>

発行部数は各大学に1部、投稿者1部、他希望者を含め500部（2023年度）

複数冊希望する場合はレターパック370に送り先を記入し、下記まで送って下さい。

なお、レターパックは3cmまでなのでその範囲内で送ります。残部がなくなり次第終了します。

〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬550

聖徳大学 大成 哲雄

「大学造形美術教育研究 第21号」（2023年度）

発行日 2023年3月15日

発行者 全国大学造形美術教育教員養成協議会会長  
大成哲雄（聖徳大学）

編集 三澤一実（武蔵野美術大学）

事務局 中村光絵（和洋女子大学）

〒272-8533 千葉県市川市国府台2-3-1  
047(371) 2751

e-mail: zenbiooffice@googlegroups.com